一生分の片思い

津神　八尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一生分の片思い

【Ｎコード】
Ｎ１２７５Ｓ

【作者名】
津神　八尋

【あらすじ】
恋をした。したくもない初恋の相手は、十歳年上のイケメン上官お貴族様。どうやったって報われないってわかっても、止められないのが恋心。しかし、この恋、どこをどうとっても、絶対にかなうはずのない恋で――――
そこから始まる昼と夜、二つの世界のお話です。どう転んでも全年齢向けにしかなりません。明るいコメディーを目指します！よろしくお願いいたします。
今の処、（改）は誤字脱字の範囲です。

その始まり（前書き）

始めてしまいました、新連載。
最初の二三話は思いっきりネタばれ満載の状況説明から。
よろしければ楽しんでやってください。

その始まり

恋をした。

したくもないのに、初めて真剣な恋をした。

あたしが正真正銘、初めて本気で惚れこんでしまったあの人は、
十歳年上の上司で上官で。
信じられないくらいの綺麗な顔に、信じられないくらいにカッコいいお姿の、まごう事無きイケメンで。
国内五指に入ろうかと言う毛並みの良さと、国王に継ぐ莫大な領土をお持ちになった大貴族様。
おまけに、これが極めつけ。
なんと、非の打ちどころのない婚約者までいらっしゃる。

初めから全部、ぜ～んぶ解ってた癖に、惚れこんでしまうのを止められなかったあたしと言えば、
十歳年下の、ちびでちんくしゃで、貴族とは名ばかりの地方のどん詰まりで生を受けた下級貴族の端の端。ドジで無鉄砲で、まあ可愛い所がない訳じゃないけれど、此処の所、迷惑をかけ続けまくりの部下兼従僕――――　それがあたし。
おまけに、これこそが本当に極めつけ――――――　紛れもなく、あたしは男なんである。

男なのに、「あたし」とかって可笑しいそっち系?とかって聞かな

いで欲しい。
あたしだって、ちゃんと自分の外に向かってはきちんと「僕」と一人称は使っております。ええ。もう絶対間違えることなしに。ついでに言うと、あたしには本来そっち系の趣味はこれっぽっちもございません。
そりゃ、人さまの趣味趣向を、どうのこうのと咎めたり、声高に非難したりはしないけれど（だって、恋愛はあくまで個人の問題だと思っちゃってますし）それが、こと、自分自身に関わってくるとなると話は別です。その手のお話は、もう、はなっから「無理！」――――との結論に達してしまうんですね、これが。

――――じゃあなんで？

…はい。ごもっとも。
あたしだって、『何故？』とは、一度誰かに聞いてみたかった事ではあるのだけれど。

……えっと…
これを言うと、絶対なんか文句を言われそうな気がするんだけど、あえて言わせていただきます。

ゆめ、だから。

はい、夢。
しょーがないじゃない。夢だもの。夢の中なんだからしかたない。男が男に惚れたって、惚れちゃったものはしかたないでしょーが！

夢――――　そう、ゆめ。
Ａｍｂｉｔｉｏｎ（これって、大望って意味なのね）じゃなくて、Ｄｒｅａｍの方。

あの、バタンとベットの横になって、「おやすみなさい」って言ってから見てしまう夢でございます。
見ようと思ってみる訳じゃなく、勝手に人の頭に入ってきてしまう
ある意味とんでもなくお騒がせなその世界の中で。

あたしは、初めての恋をした。

そんなとんでもなく、どうしようもないシチュエーションにもかかわらず、
あたしは恋に落ちてしまっていたのだ。悲しい事に。

その一

さて、いきなりでなんですが、今日もまた、夢の中。

夢の中で、あたしは日本では無い何処か西洋風の、いわゆるファンタジーの様な世界の中に居るのである。（誓って言おう！　絶対あたしの願望じゃない！）

「こらー！　ユーリー！！さぼんじゃねーぞー！！」
「わかってますーーー！！」

いちいちうるさいですよ！！と噛みつきながら、先輩方の乗ってきた馬の世話を一手に引き受けて今のあたしは大忙しだ。隊舎の厩（うまや）には名だたる名馬がひとそろい。これだけでも世話のし甲斐があるってもんです。

あらためまして、こんにちは。
今、あたしの本体は寝ているんだから、「こんばんは」が正しいのかも知れませんが、こちらの世界は昼なので、一応「こんにちは」と言わせていただきます。

初めまして。あたしはユーリー。
ユーリー・コールターと言います、この世界では。
日本での本名は、またおいおい出てくると思うので、今はユーリーと覚えてやってください。

あたしが今いるのは間違いなく夢の中なんだけど、この夢、妙にディティールにこだわりまくりの世界なので、少し説明をさせていただこうかと思います。少しの間お付き合いください。

ここは、アランドア大陸の西に位置するスーベニア国、首都シュロス。（おお！まごうことなきファンタジーだ！！）
その中心にそびえる王宮の、その広大な敷地内の西北に配置された第一騎士団の石で造られた強固な隊舎の中。あたしは騎士見習いとして、一年ほど前からこの隊舎に住み込んで暮らしている。

この国には、国を守る騎士団が全部で十二有るんだけど、第一騎士団はその中でも別格。
他の騎士団と違って隊舎が王宮内にある事でも解る様に、この隊は王の直轄であり、近衛隊も兼ねる精鋭だ。
あたしは本当に入ったばっかの新米だけど、五十人余りからなる団員はそれぞれにもしかしたら他の団ならそのまま団長になれるんじゃないかと囁かれる逸材ぞろい――――――と、これは朝昼晩の御飯を世話してくれるおばちゃん方からの情報だ。（その分、個性の強い方々が勢揃いの様な気もするが…）
そして、その精鋭の中でも凄いのが――――――

「ユーリー」
「だ、団長…！！」
「どうだ？　もう慣れたか？」

此処の馬は気性が荒いからな。気を付けろよ。
そう言って笑うこのお方――――――第一騎士団団長、アレクシーズ・ユノ・コルフィー。
何を隠そうこの人こそが、あたしの報われない初恋の相手そのひとなんである。

あたしが初めて本気で恋したこの人は、
１８０センチはあろうかと言う長身に、日に透ける銀の髪。そして、

吸い込まれそうな紫の瞳。端正な顔立ちは日本人――――――　もとい、人間離れしたくらいに整っていて、その癖そのシャープな曲線には一欠けらも女々しさなんて有りはしない。

匂い立つような男らしさ――――――　紛れもなく、『男』として、おっそろしいまでに良い男なんである。

性格は明朗にして闊達（かったつ）。

さらに、この国の重鎮を代々にわたって務め上げ、王家との婚姻も一回や二回じゃありませんと豪語出来るコルフィー公爵家の跡取りでもある。

つまり、生粋のエリートなのだよね。

その明晰な頭脳に目を付けた宰相が、自分の後釜に据えようとかつて色々画策をしたらしいが、その要請をやんわりと、しかしきっぱりとはね付けて、国士を守る騎士として生きる事を選んだと言う硬骨漢。騎士としてだって、その腕前は「スーベニアの獅子」と呼ばれる王と並び称されるほどに轟いていて、二十五歳の若さで、もっとも重要と言われる第一騎士団の団長を務めるほどに…って、本当にこんな出来過ぎ君が本当に居るのかって感じだけど。

兎にも角にも、凄い美形で凄くカッコ良くて――――――　初めて会ったその日に一目で惚れこんでしまったあたしに決して罪は無いと思う。

「どうだ？だいぶ慣れたか？最初は雑用ばっかりだが、腐るなよ。日々の鍛錬も怠るな」

「はい！」

にっこりと微笑んで告げられれば、もう良い子のお返事をしてしまうのはしょうがないと思う。

本来なら雲の上の、もう一つ上の、こんな所に来なければ絶対に一生お目にかかる事もない筈の天上人なんだから。

いくら有名人で名前だけは聞いた事が有ったとしても、この世界にはテレビもラジオも無いし、情報は全て人づてだからね。同じ国内とは言え、東の隣国アベロンとの国境近く、辺境出身の一貧乏男爵の息子風情が、まさかこんなに近くで、この人を見あげる事が出来るなんて夢にも思ってみなかった。（いや、夢なんだけど）

「ユーリーはいくつだった？」

「今年で十五であります。団長！」

「そうか。これからが伸びる時期だな。楽しみにしているから励む様に」

「は、はい！」

もう、もう！

あこがれの団長から声を掛けられて、舞い上がっちゃう自分が押さえらんないよ～！

「じゃあ」

と、手を上げて踵を返す後姿も麗しい…

ああ…もう少し…もう、ずーっと、見ていたい…

ずっと…　ずっと……

ジリリリリリリリリリ！！！！！！

その時、無粋なベルがあたしの意識を切り裂いた。

その二

ジリリリリリリリリリ！！！！！！！

大音響のベルが鳴る。

「有里！うるせーぞ！！」

隣の部屋から聞こえるのは壁を蹴飛ばす音と、が鳴りたてる兄貴の声。

止めろ！ばっかやろー！！

「わかってるってば！！　」

そっちの方が、うるさいよ！

怒鳴り返して、枕もとの目覚まし時計を止める。

自分の寝起きの悪さを考慮して買った『冬眠している熊でも起きる』と言うのが謳い文句の時計だが、毎朝毎朝、確かに心臓に悪いったらない。

特に、この一年。

特定の夢を見だしてからからは、この音が文字通り『夢』の世界から自分を切り離す悪魔の様な気がして理不尽な殺意を持ってしまったりする。

「有里～！　起きたの～！　顔洗って、ご飯だよ～！！」

階段の下から、母さんの声がする。

「今行く〜！」

そう言い捨てて、パジャマのまま洗面所へ駆けこんで寝起きの顔を冷たい水でバシャバシャと洗いあげる。滴り落ちる水を拭いもせずに目の前にある鏡を見る。

こちらを向いて眠そうにしているのは見慣れた平凡なあたしの顔。

けっして、ふた目と見られぬご面相と言う訳じゃないけれど、良く言って十人並み。悪く言えば何の変哲もないありふれた顔がじっとあたしを見詰めている。

夢の中のユーリーはその設定に相応しく茶色の髪に薄青い瞳を持つ少年なんだけど、現実のあたしはどっから見ても当り前の日本人。寝ぐせのついた髪は一度も染めた事の無い黒のままだし、カラーコンタクトなんてとんでもないあたしの眼は普通にまっ黒いまんまだ。

平凡な顔の両親から生まれてきてるんだから当たり前だが、何処と言って取り柄の無い顔に決して良いとはいえないスタイル。

自分を綺麗に見せる事が殊のほか苦手な母親に似てしまったあたしは、化粧も下手だし、それを一生懸命学ぼうと思うほどの情熱も無かったから、薄化粧とは名ばかりのいい加減な化粧しかしない女となり果ててしまっている。

まあそれで、何の不都合もないって言ったらなかったんだけど。

これがあたし。

現実世界のあたしは、神部有里（かんべゆり）と言う極々一般的な二十五歳の日本人。

職業は管理栄養士。職場は病院。

この年まで浮いた噂一つなく、品行方正とは名ばかりの、ぶっちゃ

けめんどくさいから恋愛とかって無理だよな～との妙な達観を貫いて、この年になるまで、その手の話とはとんと縁の無いままに来たって言うのに…

――――――　なんで、夢で落ちるかな～…

いや、恋愛が自分の思う様にならないってのは友達からもよ～く聞かされてきたんだけども。

まさか、現実以外で初恋を経験するなんて。しかも、相手はとびっきりのイケメンと来た。

この時まで自分があんな面食いだとは思ってもみなかったってのに、こうしているとまざまざと思い出せる夢の中の住人のその姿。
銀の髪に紫の瞳。
すらっとした長身に、整い過ぎるほど整ったその顔だち。

――――――　夢は、自分の願望って言うけどな～…

それにしたって、あれはやり過ぎではないだろうか？
本来、あたしはどっちかって言うとおじさま系の渋い年上がタイプだった筈なのに、こうやって落ちてしまえば何の事はない、初恋がとびっきりのイケメンだったなんてねぇ？

もう、笑い話にもなりゃしないわね。これまでの常識さんさようなら～って奴？
ついでに、二十五にして初恋って何よ、初恋って！

あの妙にリアルな夢を見だしたのは一年ほど前から。
あっちでは、ユーリーが故郷を出て騎士団に入隊する直前のことだ

った。
生来あんまり物事にこだわんないし、夢だって解ってからは思いっきりその世界を楽しむことにしたから、それまでは本当に初めて見る街の様子とか、王宮のたたずまいとかに見とれたり感心したりで結構お気楽に過ごしていたんだけど。
なのに、光栄にも第一騎士団に配属され（見習い兼従僕だけど）団長に会った途端に一目ぼれ――――――　ってなによ！　ついでに、その途端に失恋が確定したっておまけつきだ。
男同士だから？――――――　いや、それも大事な要素なんだけど。
実は、この夢には根本的にどうしようもないお約束って奴が有りまして。

あたしはユーリーの中には居るが、あたしはユーリーでは有り得ないのです、実は。

どう言う事かって？
えっとね、つまり、夢の中のユーリーは間違いなくあたし自身であるのだが（何しろ、彼の目線でしかあたしはあの世界を覗けない）ユーリーの意識とあたしの意識とはまるで別のものなのだ。
わからない？　……う～ん…どう言ったらいいのかな…
映画を見てる感覚？
そう――――――　もの凄くリアルな映画を、体験しながら見ている感じ…とでも言うのだろうか。
あたしの意識は確かに有るのに、ユーリーの行動をあたしは制御出来ないし、彼の意識を乗っ取ることも無い。だから、あたしが何を感じても、何かをしたいともっても、あちらの世界に一切干渉は出来ないようになっている。
あたしが夢を見ない間でも、確実にあちらでは時間が流れている様

子なので、言わば寝いっている間だけあたしの意識がユーリーの中にお邪魔してそれを共有させてもらっているだけの様なそんな感じ――――――　もう、これって夢って言わないのかもしれないが。

だから、あたしの恋心は実は決してユーリーのものではない。
ユーリーの中の団長への感情は、唯のあこがれの気持ちだけ。
アレクシーズ――――――　もう、めんどくさいからアレクね。その、アレクへのあたしの想いはあたしの、あたしだけのものなのだ。つまり、決して伝える事も叶える事も出来ない、最初っから失恋確定の恋心ってやつなんです。

「――――――って、あんまりだよね～…」

そうよ。あんまりにもあんまり過ぎる。
あんなにも近くに居て、ユーリーを通してだけど話して触れて感じる事は出来るのに、あたしからは話しかける事も問いかける事も触れる事だって出来はしない。
全て、ユーリーの行動次第。彼が動いてくれないと、あたしは何も見れないし触れない。
理不尽だ。余りにも理不尽な事態だと思うのに。
それでも、アレクがユーリーに話しかけると、頭を撫でて笑いかけると。
ユーリーの中であたしは悲しいほどに嬉しくて震えるほどに泣きたくなって。

――――――　なんだって、あんな、話しかける事も出来ない相手にこんな気持ちになるかな～

夢は、あたしの思い通りにはならないけれど、あたしは彼に会える事をこんなにも心の底から望んでいる。

「――――　な～に、百面相してんだ、ボケ！」

ゲイン！と音さえ立つほどの勢いを付けて後ろからあたしの頭を叩き倒したのは、朝一であたしの目ざましに文句を付けやがったあたしの兄貴――――　ユウキ、こと、神部祐樹（かんべゆうき）だ。

「痛いな～　仮にも大事な妹の頭、思いっきり殴る？　しかもグーで！」

「はん！お前みたいに女捨ててる奴に払う優しさなんざこれっぽっちもないわ！　文句が有るなら、彼氏の一人も連れてこい！」

「あ…あ～っつ…！　…人の一番気にしてる事突いてくるな！　このバカ、兄貴！　てめーこそ、彼女の一人も連れてきやがれ！このへたれ！」

「なにを～！？　妹の分際で生意気な！」

「おうよ！やる気！？」

「おお！受けて立ってやる！！」

「――――　いい加減にしなってんだ！このバカチンどもが！！」

ばこっ！ぼこっ！！

二発ぶっ続けの叩き倒す音は、我らがおふくろ様の丸めた雑誌から放たれた。

「～～～～……」

「…おふくろ～～～…　頼むから、通販のカタログはやめてくれ…」

頭を押さえて泣き入る兄貴に心の底から同意しつつ、本日二度目の衝撃にあたしは声すら出やしない。

普通殴るか？あの分厚い奴で。

「ほら！さっさとご飯食べちまいな！　有里、あんた、今日早番だっていってなかったっけ？」
「うわっ！やばい！　母さん！ごはん！」
「出来てるよ！　ほれ、祐樹もいつまでも妹相手に遊んでんじゃないよ！　さっさと嫁さん連れてきなって言われたいのかい！？」
「それを言うか…？　お～れに、それをいうか！　…いじめか…？
おふくろ、それは俺へのいじめなのか？」

どうせ、俺はもてねーよ！！
叫ぶ兄貴を後目に、あたしはテーブルに用意されていた朝ごはんの前に座って両手を合わせる。

「いただきます」

ギャーギャーとまだ騒いでる兄貴の声が聞こえるが、実の所、兄貴は決してモテテない訳ではないとあたしは思ってるんだけどね。

とりあえず、いつもながらの騒々しい朝の風景に、残っていた夢へのあたしの感傷は少しづつ消えて行く。
決して無くなりはしないけれど、「今日は話せただけラッキー！」と思い返せるぐらいに、あたしの思考は現実の世界へと対応していった。

その二（後書き）

今回で夢の中の状況の説明は終了…かな？　しばらくは現実の有里の方のお話になります。

えっと…　こんなエセファンタジーですが、よろしければこれからもお付き合いください。多分、不定期更新になると思います。でも、結構楽しんで書けますので頑張りたいと思っています。楽しんでいただければ嬉しく思います。

その三（前書き）

これからしばらく、現実の有里のお話。
さて、どんな環境か…
それでは、どうぞ。

その三

ドアを開けて開口一番。

「おはようございます」

「おはよう」

「おはようございます！」

声をかければ、次々と応えが返ってくる。

う〜ん、今日の皆さまのテンションは良好…やや、お疲れ気味ってとこかな？

あたしの職場。ここ慧愛会坂水病院（けいあいかいさかみずびょういん）は二百床ほどの中規模病院だが、小児科、内科、外科、整形外科――――と、とりあえず一般的に需要の多い診療科を曲がりなりにも取りそろえ、大都市から少し離れた医療僻地一歩手前のこのあたりの駆け込み病院として、地域医療の中核をになっている――――――　一応。

就職するまではそれなりに敷居の高かった（実はあたしは名うての医者嫌いなのだ）この病院の門を叩いたのは三年以上も前の事。大学をどうにか卒業見込みに漕ぎ付けて、とりあえず習得できるであろう資格を生かす職場をと、何も考えずに一番家から近かったこの病院の面接を受けたんだったっけ。

とにかく、初めての面接に緊張しまくっていたあたしを前にして、好々爺然とした院長がまるでお告げのようににっこり笑ってのたまった。「ああ、ちょうどいいから、さっそく4月から入ってくれる？」――――こうして、あたしの就職活動は、ゼミの皆から大ブーイングを浴びるほどあっさり決まってしまっていた。

それから、色々軋轢が無かった訳じゃないけれど。
まあそれなりの居心地を、自力で確保して今も勤め続けていれるんだから良しとしよう。

今日は早番だから、此処に居る栄養士はあたしだけ。
後はやっぱり早番で出てきている食事を作る方のおばさま方が、もう既にしゃかりきで朝ごはんの準備をなさって下さっている。ひい、ふう、み…うん。ちゃんと六人いらっしゃってくれている。今日はイレギュラーは無しか。上等上等。今日はこのまま事務室の方にまわってしまっても良さそうだ。
既にロッカーで白衣には着換えているけれど、ガラスで仕切られた調理室、配膳室に入るには、もう一ランク厳しい服装規定が有るからね。人数足りない時の非常要員も兼ねているあたしらは、そうなった場合もう一度着換えてこなきゃならない。うん。今日は大丈夫そうだ。

「神部ちゃ～ん！　さっき、業者から電話あって、玉ねぎが一箱足んないってさ～」
「え～～！！　芝さん、それやばいじゃん！昼、大丈夫！？」
「昼分までは取り置きでオッケーかな。もう一度電話かけてやってよ、向こうも色々あたってみるって言ってるし」
「了解！」

流石に3年目ともなれば、年下の扱いに厳しいおばさま方も、少し寛大になって慣れてきてくださって。皆、悪い方々じゃないんだけど、年齢もキャリアも何もかもあっちの方が上だからね、職場（ここのなか）じゃ。
でも、立場上、指導するのはこっちだし…
色々気を使う訳ですよ、こちらとしても。

そうこうしている内に、定時出勤の時間がやってきて。

「おはよう」

柔らかな落ち着いた声が、ドアを開ける音と共に耳に届いて、あたしは机に向かっていた顔を上げて思わず笑顔になっていく。

「おはようございます。深山(みやま)さん。おはよう。よーこちゃん」
「はい。おはようございます」
「おはようございます！　神部さん。早番ご苦労様です！」

にこにこと入ってきたのは、あたしの本当の意味での同僚たるお二方。

「よーこちゃん、何時も元気だね。ちゃんと朝ご飯食べてきた？」
「はい！ばっちりです！栄養士が朝ご飯抜きってまじありえませんし！」

そりゃそーだ。
室長の深山さんとあたしは顔を見合わせて笑いあう。この雰囲気がこの職場の一番の売りなんだよね～

この病院の栄養士は三人。
室長の深山さんは、確かもう今年五十歳をお迎えになる大ベテラン。いつもにこにこ微笑みを絶やさないが、言うべき時にははっきりと物事を言い切れる、此処の職場歴も一番長い頼りになる大先輩でもある。

で、もう一人は今年入った西(にし)　陽子(ようこ)ちゃん。
この子がまた、可愛いの！
丸顔の笑顔が絶えない、愛くるしいペットみたいな女の子だ。あた

しに同性を愛でる変な趣味はないけれど（これ、前にも言ったよね？）この子見てると、もう何時でも、その頭をかいぐりかいぐりして撫でてあげたくなってしまう。
陽子ちゃんが嫌がらないのを良いことに、今日も今日とて我慢できずにその可愛らしいおつむをかいぐりかいぐりして、恒例の朝のスキンシップ。

「よーこちゃん見てると、つくづく年齢を感じるんだよね～　わかいってい～ね～」

かいぐりかいぐり。
本当に陽子ちゃんってば、髪はさらさらだし、お肌はすべすべだし。

「なーに言ってんの。神部ちゃんだってまだ二十代の癖に」

クスクス笑いながら、すかさず深山さんが突っ込んでくる。

「二十五過ぎたら、女ももうピークです。こっから先は下がっていくばかりらしいですからね。…よーこちゃん。その若さを大事にして、いい男ゲットすんだよ」

かいぐりかいぐり。
う～ん、やっぱりよーこちゃんに触ってると和むな～

「こら、このセクハラ女。さっさと純真な後輩から離れろ」

ポコン！

いきなりの男の声と同時に、頭を背後から丸めた紙の束で叩かれる。

ま～た、頭だよ！今日は何なんだ、叩かれる特異日なのか？
憤然として振りかえったあたしの眼に映ったのは、女ばっかの職場環境に不似合いな、変に圧迫感のある大きなガタイの持ち主だった。

その三（後書き）

ここで切るか～ってところですが、ごめんなさい。一旦切って、明日、続きを更新いたします。新キャラ登場！なんですね。さあ、誰でしょう？

この四日で、ユニークが４００を超えました。…ありがとうございます！

お気に入り登録や、評価も頂き、凄く嬉しいです！ゆっくり更新ですが、楽しんで頂けるような話にしようと思っています。よろしくお願いいたします。

…さて、今回から、有里の職場について色々と説明が入りますが、一応お断り。フィクションですので、現実とはかなり異なると思います。参考にさせて頂いている雰囲気や状況はかなり前のお話なので、現在とは大分違うらしいですね。働いていらっしゃる人数とか、就職面接とか、書きやすいように変えていますのでどうか、参考にはなさらないでください。

特に、あのあっさりとした面接は…たぶん、現状ではあり得ないだろうと…

昔聞いた知り合いの話があんまりにもビンゴでしたので、ここで使わせて頂きました。くれぐれも、信じないように。現実はそう甘くは無いようです。

…どうか、あくまでフィクションとして楽しんでやってください。

それでは、頑張って、明日、また更新いたします。どうぞ、いらしてやってください。

その四（前書き）

昨日の続きです。新キャラです。

その四

脳天へ、何の遠慮もない一撃を食らって、ボルテージが一挙に跳ね上がる。
病院内で、あたしにこんな仕打ちをくらわせて平気な奴なんてたった一人だ。

「剛史！」

やっぱりお前か！
結構なたっぱの有る（ちなみに１６７センチ）あたしを見下ろす様に立つこの男、名を山本剛史（やまもとたけし）と言う。今年の春から、うちの病院で整形外科を担当する事になった正真正銘の医者ではあるが。

「出たな、妖怪」
「誰が妖怪だ、誰が」
「んじゃ、天敵、害虫、ぬらりひょん。あっちいけしっしっ！　あたしの大事な後輩に近寄んないで、女の敵！」

軽く撫でるだけだった陽子ちゃんをぎゅーと抱きしめながら言ってやる。
だ～れが、あんたなんかの言う事なんかきいてやるもんか！
この山本剛史と言う男、あたしにとっちゃ鬼門中の鬼門。出来れば顔を合わせるのだって思いっきりごめんこうむりたい相手なのに。

目算で１８０センチはありそうなガタイは上だけでなく、横にもそれなりに分厚くて。細い黒ぶちの眼鏡の奥の眼は整形したお姉さんが裸足で逃げ出すくらい見事な二重のそれなりに整った顔をしやがって。

その所為か、一部看護師の間では『可愛い』とか『カッコいい』とか言われてモテテいるらしいのがまた、腹立たしい。いっくらいい男ったって、このレベルで言って欲しくないってのが本音よね。夢の中とは言えアレクを目の当たりにしてきたあたしに取っちゃ、奴なんぞゴリラだねゴリラ。

おまけに性格が、思いっきり難有り！
なのにあのバカ兄貴の親友ってだけで、どんだけ顔突き合わせて来なきゃならなかったか！

齢十歳。いたいけな小学生の時、兄貴の同級生として家に遊びに来たこいつと最悪の出会いをして以来、あたしのこの男への評価はこれっぽっちも上昇なんぞしていない。
あの時、兄貴に連れられて家に遊びに来たこいつの初対面での暴言を、あたしゃ死んでも忘れないからね。

「人聞きの悪い事を連発するな。このバカ女。女の敵で、セクハラ大魔王はお前だろうが。さっさとその大事な後輩を放してやれ。窒息するぞ」
「窒息なんてさせるもんですか。ちゃ～んと考えてだっこしてます。あんたの前に無防備に置いとくより何ぼかマシ！」
「だから、それが人聞きが悪いと言うんだ。俺をどこぞのナンパ師の様に宣伝するな、バカ女」

くっそ～…
昔みたいに怒鳴り返してくれれば三倍返しにして叩きのめしてやれるのに、ふふん…といかにも余裕の顔で腕組みなんぞされながらではこっちの分がだんだん悪くなるだけだ。
ちっ…　この辺が潮時か？

「山本先生、おはようございます～　今日もお元気ですね～！」

腕の中、それでも律儀に朝の挨拶をする陽子ちゃんにしぶしぶ廻していた腕を外す。

「はい。おはよう、陽子ちゃん。毎朝毎朝、大変だね～君も。僕が代わりにセクハラで訴えてあげようか？」

にっこり。

いかにも害の無さそうな顔でなんて事言いやがるんだこの妖怪！

しかも、僕って言ったぞ今、僕って！

うわ～～っ！！　背中に虫が走りそう。

「大丈夫ですよ～　っていうか、神部さんのスキンシップにはもう慣れましたし。相変わらず、仲いいですね～　お二人は」

…よーこちゃん。今、聞き捨てならない事をおっしゃいませんでした？

「聞きたくないけど、聞いて良いかな陽子ちゃん。誰と誰が仲いいって？」

「そりゃ勿論、山本先生と神部さん」

「――――――　有り得ないから！！それ！！」

思わず絶叫してやろうかと思ったわよ！

「剛史とは、腐れ縁も腐れ縁！　もう十年以上前からの！」

もう腐りきってる縁しかないわよ！　本当に！　何処をどうとった

ら、そうなんの！？

「え～？でも、すっごく楽しそうですけど」

「だ・れ・が！」

「お前だ、お前。ちなみに俺は巻き込まれてるだけ」

「巻き込まれてんのはあたしの方でしょう―が！！　こんの、バカ剛史！」

「先生と呼べ、先生と。できればしっかり山本先生と呼ぶように。仮にも年上のしかも医者に向かってのその暴言、許し難し。今夜、付き合え、おごらせたる」

「あほか！　もう十年以上も呼び捨てにしてる相手に今さら『センセ』もくそもないわ！　高給取の癖しやがって、しがない栄養士にたかるな！」

そうだ！医者の癖しやがって。

あんたの給料とあたしの給料の、額面比べてみてやろうか？　どんだけ額が違うと思ってる！

「――――　おはようございます。どうされたんですか、山本先生。こんな朝早く」

にこにこと、この時まで何の口もはさまずにあたしたちの騒ぎを傍観していた深山さんが、やっと口を挟んでくれる。

正直、そうでないと突っかかるのを止められないんだ、あたしには。

「おはようございます、深山さん。実は入院してる伊藤さんの指導の件で、少しご相談が」

「ああ、３０２の伊藤さん？あの方の栄養指導は確か午前中に…」

さっすがだな～深山さん。

今日の予定も、もうバッチリ頭ん中入ってる。
あらら…剛史の顔も、もう医者の顔――――　二人とも、もう完璧に仕事モードに突入してる。

只今、午前8時25分。さあて、朝のウオーミングアップ終了ってとこですか？
ちょっぴり不完全燃焼の様な気もするが…　お仕事はしっかりこなす。これはあたしの身上だから。
さ～て、今日も一日、しっかりやんなきゃね。
気持ちを切り替えて、さっきまでまとめていた栄養指導のカルテを机の上から取り上げ、もう一度中身を確認。

「ドジんじゃねぇぞ。このおっちょこちょい」

深山さんとの打ち合わせを終えて、ドアを開けた剛史がそれでも最後に振り返って一言。
ニヤッととしたその笑いに、同じようにニヤリと返してやる。

「だ～れに言ってんの？」

こちとら、勤務歴に関してはあんたよりず～と長いんだからね！
カルテをしっかりとファイルに挟みこんで、傍で同じように準備をしていた陽子ちゃんに声をかける。

「陽子ちゃん、あたしたちもそろそろ行こうか？」
「はい！」

こうして、いつものようににぎやかに、あたしの日常は流れて行くのだ。また今日も。

その四（後書き）

昨日一日のユニークが３５０を超えました。ありがとうございます！　お気に入り登録も評価も本当に嬉しいです。精進いたしますのでこれからもよろしくお願いいたします。

もう一回、現実のお話かな～　その後は、また、あっちの世界に行ってもらうつもりです。

その五　－1（前書き）

少し長くなりすぎましたので、二つに分けました。
同時更新いたします。

その五　―1

――――――…で？

「…で…？」

「は？」

「…なんで、こうなる…」

「なんでって…　約束しただろ？　楽しみにしてたんだぜ～　お前のおごり」

隣の席で、ニヤニヤ笑いながら剛史が言う。

「だから！　高給取の医者が、薄給の栄養士にたかるんじゃねぇ！」

すっかり朝の一件など忘れて作業仕事に没頭し、しっかり残業までこなして心地よい疲れの中、さあ早く帰ってご飯だ、ご飯！！――と、通用口を出た途端に、でっかい腕にとっ捕まって、あれよあれよとばかりに連行されてきたあたしは、ここにいたって初めて我に返って剛史を怒鳴りつける。

公衆の面前だ？　そんなこと知った事かい！どうせ周りも他人（ひと）の事などほっといて、自分達の事で盛り上がってるような輩ばっかりなんだから。

ここは、病院にもほど近い、御用達とも言っていいほどよく来る居酒屋。そのカウンターに二人して陣取って…　ちが～う！！　今日はあたし、こんな予定は入ってないぞ！！　確かに、ここの突き出しと魚の煮付けは絶品中の絶品なんで、あたしの大好物の一つだが……

――――――　と、そんな事言ってる場合じゃない！

「あたし、バイク！」

病院に置いたままじゃない！　いや、それ以上に飲酒運転なんぞする気はこれっぽっちも無いんだから！　居酒屋来ておいて、酒飲まないで帰れって！？

「あとで、タクシー。俺が帰るついでに送ってやる」
「母さんのご飯…！」

準備してんのに食べなかったら、どんな制裁が待ってるか…

「あ、俺が連絡しといた。『急な飲み会で夕飯はいりません』」
「……明日、どうやって職場に来いって……？」

徒歩三十分歩けってか…？

「俺が迎えにいってやる。…と言いたいところだが。残念ながら明日の午前中は研修で大学行き。ユウに頼んどいたから、送ってもらえ」
「……兄貴にまで話行ってんのかい…」

なんつー用意周到な…
この男、本当にほんとーに、外面だけは良いもんだから、妙に受けだけは良いんだ、周りには！

いつもにっこり、素敵な笑顔。ガタイは結構いかついくせに、物腰だけは柔らかで。病院内でも、『話の解る優しい先生』って事になっている。う…なんか、めまいがしてきたぞ。
ついでに、その結構たちの悪い中身を把握しきってる筈の我が家に

置いても（え～い！十年来の付き合いだけは伊達じゃない！）、なんでか、もの凄く信用が有るんだこれが。もう、ヘタしたら娘のあたし以上に、だ！

「『久しぶりのデートでしょ？　楽しんでらっしゃい』と言われたぞ」

「ちょっと待て！　それは誰の台詞だ！」

「お前のおふくろさん。いや～相変わらず話が早くて助かるね～」

「訂正しろ！訂正を！　そこは、思いっきり訂正するとこだろうが！」

「お～れは一向にかまわんぜ。虫よけにもちょうどいいし」

グイッとあたしがキープしていた筈の冷酒取り出して、何の断りもなく呑みながら言ってのけてくれちゃってますね、この極悪人。

「――――　自分で虫よけとかって言ってのけるとこが、異常に腹立つんだけど…？」

「ま、そう言うなって。事実は事実だろうが」

けろっと自慢をうそぶきながら、タイミング良く、目の前の突き出しをさっとあたしの前にすべらせる。う～美味しそう…　今日はひじきの煮ものですか？　ああ…お待たせされる間もなく、こ、これは、愛しのつかやチャンではありませんか…

この辺じゃめったにお目にかかれない魚、つかやを使った煮物は、もう、これ以上ないごちそうだ…

お腹はもう、減り過ぎるほど減っている。

くそ～～～！！　どうあっても、付き合わないでは帰れないってか？

「おごりは無理！　――――　て、言うか、あんたみたいにでっか

い奴の食べる量なんて、あたしにおごり切れるわけないじゃんか！
今日、手持ち少ないから、絶対足りないし！」

今日は給料日の十日前。財布の中身は確か一万円も無かった筈。
基本病院での昼食は、給料引き落としのチケット制だから普段から大金は持ち歩いたりしないけど。
それでも、今は、一番厳しい時だろうが！

「カードがあんじゃん」
「クレジットカードは持たない主義」

いつもにこにこ現金払い。それがあたしのモットーなの。

「……しょーがねぇな～　うんじゃあ、わり。割り勘分ぐらいはあるんだろ？　帰りのタクシー代は持ってやっからさ」
「…わかった、付き合おう…」

ぐーぐーなるお腹には勝てないし…どうやら、帰してくれる気も無いらしい。
ううう…　唯でさえ今月ピンチだってのに…

「…まったく、何だって、こんな奴が同じ職場に…」

絶妙の塩加減のひじきと、お待ちかねの煮付けを口に運びながら、思わず小さくブチブチと愚痴る。

「は？なんか言ったか？　ほれ、おにぎりセットとビール。冷酒はその後だろ？先にやってるぞ」
「断る前から、やってんじゃん…」

人のお気に入りのキープ冷酒は勝手に呑みはじめちゃってる癖に、
酒とコメをセットで食べないと落ち付かないとか、とりあえずビー
ルを呑みたがるとかってあたしの癖はしっかりと飲み込んで、こっ
ちが頼む前から目の前に差し出されてきたりする。
このおとこ、本当に、いったい何を考えてんだか…

その五　－2

このやたらガタイのいい男が、兄貴を介してあたしの生活圏内に入りこんできたのはもう十五年も前の事。

あたしが住んでるこの街は、一応市とはいえ、県内でもすこ～しばかり知名度って点で見劣りがする場所にある。県の中心から少し離れている事もあってか、結構交通網が発達していると言われる中で、『此処だけは車がないと生活できないわよね～』などと、真面目な顔して囁かれたりする結構な小都市だ。

けれど、市の中を一本だけ通っている電車の便は、そのまま中心部へ直通出来る事もあり、時間が少しばかり掛る事さえ我慢すれば、結構何処へでも通いやすい場所ではある。

だからかもしれないが、あたしはこの二十五年間、自分の家以外の場所で住み暮らすことなく生きてきた。高校も大学も、通える場所にそれなりのいい学校が有ったから、余裕の無い家計を圧迫してまで無理して下宿探す必要も方向性も持たなかった。

ぬるま湯とかって言われるかもしれないが…　だって、考えるのもめんどくさかったし。

親とか先生とかと、そーゆー方面で逆らおうと思わなかったんだな～これが。

でも、そんないい子ちゃんって訳でもなかったぞ。成績だってどっちつかずの中の中…いや、下、の方かも。反抗期だって人並みぐらいはあったしね。

そんなあたしとは裏腹に、剛史は、本来なら親の希望通り公務員とか教師とか、そっち方面の仕事に就く予定だった筈なのに、ある日突然医学部を志望した挙句、皆からあれほどやいのやいのと言われ

ながらも地方の国立の医学部にあっさりこんと現役で合格をしてのけて、その後六年間、ここから、三百キロも離れた大学へ入学するためこの街を出て行った。

『あのバカ、上手い事やりやがって…』

と、その時呟いたのは、地元の大学の教育学部に合格していた兄貴だったかな…？

なんとなく、なんとなく…　兄貴の言葉の意味は、あたしにもわかっちゃった。

剛史がやってのけた事は、あたしたちには出来ない事だったから。

そしてその時思ったんだ。ああ、これであいつとの縁も終わったな…って。

なのに。

なのに、だ。

八年以上も経ってから、研修を終えた途端こいつはこの街に舞い戻ってきやがった。

それも、寄りにも寄ってあたしが勤めてる病院（とこ）に！

しかも、ご丁寧にも、赴任して来るその当日まで、あの兄貴の口にまで緘口令（かんこうれい）を引きやがった。

新任の挨拶で、剛史の顔を見た時のあたしの驚きや推して知るべし！

それを見たこいつの、『してやったり』とした笑い顔――――――

あ、思い出したら、また、腹が立ってきた。

「つくづくむかつく…」

「誰が？」

「もちろんあんた」

自覚がないんか、おのれには。

「…それは全く心外な…　このタッパもあって顔も良くて、頭も良くて性格も良い、おまけに将来有望なお医者様に向かって、それを言うのか、お前はよ」

「異議あり！　異議をたんこもり言い立てるぞ、あたしは！　だいたい、あんた程度の顔で威張るな！　ついでにあんたの場合、性格でお釣りが来るわよ！」

「お前にそれを言われたくない」

「そっくりそのまま返してやる！」

こちとら、十年越しなんだ。恨み既に骨髄に徹っしてる。

「初めて会ったあの日あの時、いったいなんておっしゃいましたっけ？山本剛史さん」

「……」

「よもや、お忘れではありませんよねぇ？」

「…古い話を…」

ちっと舌打ちをしてあっちの方向を向いている。ふん！　少しは悪かったって思ってんのか？このやろう。

こいつと初めて会った時、あたしはまだ、小学の五年生で。

１６７センチというあたしの身長は、いま、この年になっても女としたら大きめなのに。

あたしの身長の伸びのピークはあろうことか小学校の高学年。五年生の終わり頃には、もう既に１６０を超えていた。それは同学年の女子は元より、二つ年上の中学生になっていた剛史よりも、その頃のあたしは背が高くって。

それなりにコンプレックスを持っていた、当時十歳だったいたいけなあたしに、初対面でこいつはこう言ってのけたのだ。

『可愛くねェ、ノッポなガキ』

「――――――　いい加減、その古い話を忘れねぇか？　…こうして同じ職場になったのも何かの縁って奴だと思ってさ。昔馴染みなんだし、もうちょっと可愛げのある顔してくれても良いじゃねぇか」

「あんたに見せる愛嬌（あいきょう）はない」

もう、どきっぱりと言ってやる。

あたしに、そんなもんはなから期待する方が間違ってると思わないかい？

「そんなに愛嬌のある顔が見たかったら、他、当たんなさいよ。ほかを。あんたがにっこり笑って見せれば、満面の笑みで応えてくださる綺麗どころがあっちこっちに満載よ？」

いや、これは本当に誇張でも何でもなく。

さっき本人も言ってたが、医者で独身。狙ってるお嬢様方って結構居るんじゃないだろうか。

うちの病院内だってねぇ？　それでなくても、女性が多い職場なんだから。

「今から、バレンタインが楽しみね～　山本センセ」

「…嫌味か、それは」

「いや、本音。あんたが、久しぶりの優良物件ってのはホントだもんね。盛り上がるわよ～きっと」

自分に関らない、こういうお祭り騒ぎは大好きだ。
がくっ…と肩を落とす剛史を横目で見て、少しだけ溜飲を下げる。
ほっほっほっ…　あんた、甘いもの苦手だったもんね、気の毒に。
あ～本当に楽しみだ！

そうこうしている内に、頼んだ注文はあらかたお互いの胃袋に収まりかえり、お酒も…おお、ちょうどよく、ほろ酔いってとこですかね。
あ～…　これで今日は良い夢が見れそう…
うん！　今日はアレクに会えそうだ！
よし。そうと決まったら、さっさと家に帰って風呂に入って寝ないとね。剛史の方もどうやら、お開きにして大丈夫そうだし、さりげなく置いていたバックを手にとって伝票に手を伸ばす…
と、その前に、その伝票を大きな手にかっさらわれる。

「え？あれ…ちょっと…」

そのまま、すたすたと出口へ向けて歩き出した剛史を慌てて追いかける。

「ちょ、ちょっと待ってよ。お勘定…」
「今日はいい」
「いいってあんた」

あたしにおごらせるために来たんでしょうが。もちろん、会計さんに頼んで割り勘にしてもらっちゃう気満々だけど。（ここのお店は、珍しくも割り勘での清算を引き受けてくれる珍しいサービス付きの居酒屋なのだ）

そんなあたしを無視する様に、会計を済ませ店の外へ出て、二人きりになった所で奴がいきなり立ち止る。
くるっと振り向いて、じっとあたしを見降ろした後、ニヤッと笑って剛史は言った。

「今度、もっと高いとこでねだってやることにした。首洗って待ってろ。破産させてやる」

ゲッ…
な、なんつー脅迫を…

「だ〜れが付き合うか！」
「ふふん。俺は自分の決めた事を一度たりとも諦めた事はない」
「いや、それ、自慢じゃないし！」

だいたい、あたしは何の約束もしてないし！

「ばっか言ってんじゃないわよ！　だ〜れが、あんたとなんか…」

頭に来て怒鳴りかけたあたしの腕を、いきなり強い力が拘束する。

「つっ…」

思わず発した言葉を拾い取る様に顔を近づけて、

「逃げられると思うなよ…」

――――――　えっと、剛史さん…？
どうかなさいましたか？いきなり…
少しばかり、なんだか目がマジなんですが…

そのまま、通りかかったタクシーに押し込まれ、何だかお互いに無言のまま、シートにもたれかかる。

う〜ん…何だろ…？
なにか、いつもと違う感じはするのだが…
ちらっと、横に座った昔馴染みの顔を見る。
前だけをみて、柄にもなく真面目な顔をして…

――――――　な、なんか話しかけてみようかな…？

いやいや、藪をつついて蛇を出すなんてとんでもない。ここはさっさと退散するに限る。
うん。絶対そうにきまってる。

やがて、ありがたくも前方に我が家の屋根が見えてくる。
なんとなく、ホッとするのは何故だろう。

「有里」
「え？」
「約束したからな」
「は…？」
「はいって言え。それだけでいいから」

…それ言っちゃたら、何させられるかわかんないから言えませんって、言っちゃ駄目？

きーっとブレーキの音がして、タクシーが止まる。あたしはドアが開くのも待ちきれないままにバックを引っつかんで外に飛び出す。

「残念ながら、時間切れ。お約束などしておりませんから。おやすみなさい、山本センセ。ごちそうさまでした～」

バタンとドアが閉まってスモークのガラスがあいつの顔を隠す。
そのまま。うん。そのまま、タクシーはゆっくりと走りだしていって…

あ～あ、やっと帰った…
角を曲がって、その車体が見えなくなってからやっと落ち着いて息を吐き出す。
この所、や～けにからむよな～あいつ。

――――――　更年期障害？　いやいや、誰かに振られたとか？

…いずれにしてもそれってば、しっかりくっきり八つ当たりじゃん。
良い迷惑だわよこっちには。

それでも、また、明日になれば同じ職場で顔を合わせる事になるし…
こうなったら、一日でも早い奴の精神の回復を切に祈ろう。

「は～やく、別の八つ当たりの場所作ってくれりゃーいいのに…」

ぽつんと一つ、そこいら辺の屋根の影から見える星にそっと呟いて、
あたしは玄関のドアを開けた。

その五　－２（後書き）

その五、ここで終了です。思っていた以上に分量が増えたので、一番分けやすいところで二つに分けました。連続と、どっちがいいか迷ったのですが…

一応内容の捕捉を。

文中に出てくる『つかや』と言うお魚は、もしかしたら一般的ではないかもしれませんが、黒っぽい体の、煮つけにすると本当においしいお魚です。値段もお手頃なので、わたしは大好き。日本海の方で採れる事が多いかもしれません。

『恋愛遊牧民』様に登録して頂いてから、来て下さる方がぐぐっと増えて、びっくりしています。お気に入り登録も、驚くほど…　本当にありがとうございます。

次の回は、間違いなくあっちの夢の方へ参ります。

今週中には更新出来たらいいな～　出たとこ勝負ですが、これからもよろしくお願いいたします。

その六（前書き）

本日からあっちの世界。
しばらく、ユーリーとしての目線で進みます。

その六

揺れる。

視界が躍る。

ああ…　ユーリーってば走ってるんだ…

自分の体がそれを認識した途端、あたしの視界がぱっと鮮明になる。
え～と此処は…　ああ、隊舎の中だ。
この道は執務室への途中。そうか、お使いの最中ね。手にはしっかりかなりな量の書類を抱えてるし。

自分の置かれている現状を認識して、あたしは意識を落ちつける。
この間に、実はあまりタイムラグは無い。

あたしが夢のこの世界へ来るのには、実の処余り明確な法則などは無いようで、あたしの現実世界とこの夢の世界とは、どうやら時間の流れすらも違うらしい。
だって、来るたび、朝だったり夜だったり、あんまりにもまちまちなんだよね、その瞬間が。
あたしがあっちで就寝する時間って大体一定してるのに（仮にも社会人があんまりハンパな生活送る訳にはいかないじゃん）こんなにもこっちに出てくる時間がいい加減なんで、そんなふうにあたしは納得してるだけなんだけど。（いっつもいっつもあっちで「おやすみなさい」こっちで「おはようございます」って事態もどうなのよ…　とは思うから、いいんだけどね）

ともかく、勝手に流れていっているユーリー本人の時間の中での出

来事は、本来ならその時その場に居ないあたしには記憶すらされない筈のものなのだが、そこはそれ、それこそが夢って奴の便利な所であるようで。

此処へ着た途端、あたしの意識はほんの数秒でユーリーの意識とものの見事に同化する様になっているらしい。あたしが居なかった間の記憶ってやつも、その瞬間、何の違和感もなくあたしの中に流れ込んでくるから、「ちょっと、ちょっと、どうなってんの!?　前回の話、見逃した～」なんて事には今までなった事が無い。いやまったく…　なんて便利な機能なんだか。

確かに、あたしにとってはすんごくありがたいけれど、これ、ユーリーにあたしの存在がばれたりなんかしたら、きっと、ユーリーが悶絶する事請け合いだわね。

だって、初めて、この子の意識の中に居る事を理解した途端に、あたしはこの子が今まで生きてきた全部の記憶すらも共有することになったんだから。

考えても見てくださいな。他人に、自分の過去や考えている事を知られてしまうって…ちょっと考えただけでも、もう滅茶苦茶恥ずかしくない？　あたしゃ、これやられたら、マジ、恥ずかしくてその日のうちにトンズラするわね、この世から。

これでも、あたしはあたしなりにプライバシーってもんを尊重してきたつもりだから、とりあえず知らなくて良い事は知らない様にしようと努力だけはしたんだけど…　やっぱり、無理？　…っていうか、あたしの意識は、此処に居る以上どうしたってユーリーの意識と文字通り一心同体な訳で。

もうしょうがないから、せめてもの思いやりって訳じゃないけれど、あたしはユーリーの過去を振り返る事だけは極力避ける様にしてい

る。記憶って、意識をそちらに向けない限りあんまり思い出したりしないでしょ？　あたしだって昔の事なんて、きっかけがあって思い出そうと思わなければ、普段意識に登らせることもない。だから。それに、記憶はともかく感情の方は、いくら同化してるって言ってもやっぱり察知しにくいの。その時その場で同化している時は、否応なくこの子の感情はあたしに流れ込んでは来るんだけど、過去にあった事に関するユーリーの感情は、やっぱりもう名残の様な淡いもので。その事柄への喜怒哀楽、その程度しか認識できないようになっている。

だからそこら辺、勝手ではあるけれど、自分のなかで折り合いを付けることにしてるんです、あたしとしては。

まあどっちにしても、あたしって存在がユーリーに気付かれる訳じゃないんだから、そこまでこだわんなくってもいいのかもしれないが。

と、ともかく。

そーゆー訳で、今日この場所を、ユーリーが小走りに走っている理由はこの時点であたしには把握済み。

ふ～ん、宰相から、団長への書類一式のお使いね。

『出来るだけ早く』って…そんなこと言われたら、走るにきまってっんじゃないの、この子なら。

隊舎の中は基本バタバタ走ったりしないものなんだけど、そう思ってか、精一杯早歩きに見えそうなってとこが泣かせるじゃない。

うんうん。いつも良い子だね～　ユーリーは。中に入ってるおねーさんも、もう、鼻高々だったりして。

でも、気を付けないと。結構その書類、量多いよ？　あんまり慌てるとうっかりして…

「うわっ！」

「わわっ！！！」

どしん！

ばさっ！

――――――　ほらやった…

「うわっ！すみません！すみません！」

誰かを確認もしないで謝って、さげた視線の先でものの見事に散らばった紙の束にユーリーは青ざめる（遅いって…）。

「わわっ！！書類が…！」

あたふたとかき集め出したユーリーの、その傍にしゃがみこんで一緒に書類を集め出す人影。

「慌てんじゃないぞ、ぼーず」

聞き慣れた声に、あたしも、そしてユーリーも、思いっきり驚いた。

「ヒュ、ヒューバー団長…！？」

慌てて眼を上げた其処に居たのは、黒髪の驚くほどの男前の偉丈夫だったのだから。

「よっ！　久しぶりだな、ぼうず。相変わらずちっこいな～」

拾い集めた書類を渡され、そのままその大きな手で、頭をかいぐりされる。

う〜ん…頭なでられるって、気持ちいいんだよね〜…ってそうじゃなくて。

「お、お久しぶりです！　お元気でしたか？」
「おうよ。そっちはどうだ？変わりないか？」

そう言って笑ったのは、この所めったにお目にかかれなかった第二騎士団団長様――――　ガイ・ヒューバー、その人。
あらら〜、本当に久しぶり。あたしが生で会うのも久しぶりだけど、ユーリーもこの頃会ってなかったみたいだもんね。

立ちあがって見あげると、これまた驚くほどに背が高い。
アレクも高い方だけど、それより、もう五センチぐらい高いかな？
瞳は髪と同じ黒。アレクが非の打ちどころがない美貌だとすると、こちらは粗削りな男らしいとしか表現できない容貌の持ち主。
体躯も、アレクが細身のしなやかな剣だとしたら、この人は鍛え抜かれた剛剣。その男らしさでアレクと王宮で、貴婦人方の視線を二分する存在だ。

しかし、生粋の貴族でもない事もあって、社交の世界にはとんと興味も未練もないらしく、用がないかぎりこの王宮には足を運んでこない変わり種。でもって、あたしのアレクの大の盟友でもあるのだね（あたしのだって…　きゃ〜！　言っちゃった！！）

「団長に御用ですか？」
「ああ。ちょっと色々相談ごともあってな。居るかい？」
「いえ、あの、わたしも、これを届けに、今執務室へ伺う所で…いらっしゃるかどうかは…」

うん。正直、行ってみないとわかんない。

前にも言ったと思うけど、アレクは、騎士団の仕事のほかに、今は公爵家の実務もこなさなくちゃなんない事態に陥ってしまってる。現在、アレクのお父さんに当たる公爵は、急な病で自宅から身動きが取れない状態になっている。その為、かなりな実務をアレクが代行することになっているらしい（これは、団の諸先輩方からの、通達も込めた噂話からの情報ね）その所為か、この頃は執務室に居ない事も多くて、団員が欠かさない訓練すらも欠席しがちになっちゃってる。

おかげで、この頃、こっちへ来ても会えない時が多いんだい！　ううう…恋する乙女に何たる無情！

う〜ん…今日は居るかな〜？　居て欲しいよな〜

あたしがこっちの来れるのって、本当にささやかな時間だけなんだぞ〜

せめて、大好きな人の顔の一つぐらい見て帰りたい。

「――――　まあしかたないか…　とりあえず、行ってみれば解る。どれ、半分貸せ。持ってやる」

そう言って、ひょいっ…とユーリーの手の中の書類の束を掴みあげる。

「えっ!?　あの!!　ヒューバー団長…!」

どう見たって、そっちの方が多そうなんですけど!?

「どうせ、行先は同じなんだ。滑ってまた落っことしそうだ。俺がほっとけなくなるから、持ってやる」

にやっとした笑いが、また決まるんだ、この人は！！
見あげるユーリーの目線が、称賛に染まっていくのが、中に居るあたしにもはっきりとわかってしまう。

いや～正直な話、アレクに此処まで打ち込んでなきゃ、こっちに惚れてたかもしれないくらい良い男なんだよね、ガイってば。もともと、おじさま系のちょい悪に弱かったあたしのハートを、もうびゅんびゅん突いてきちゃってんだよ、本当に！
言ってる事は俺様っぽいけど、声も、やってる事も、どっかあったかいし…
ああ…　この人も、ほんとになんていい男なんだろう…

「――――　ああ、ユーリー。おや？　ガイも一緒なのか」

どうした？二人揃って。

いきなり掛けられた声に、真面目に意識がぶっ飛んだ。

きた～～～～！！！
振り返ってみたその先に、あたしが一番会いたかった銀の髪が陽光に光っていた。

その六（後書き）

また、ここで切るか～って感じですが…　すみません。次回まで少しご猶予を…出る出ると言いながら、最後の最後かよ～って感じですが、この後から、こまめに出る…かな？　…実は、まだ、わかりません…

この度、お気に入り登録が１５０を超えまして…ＰＶも２９０００ユニークも、７０００を超えさせていただきました。皆様、本当にありがとうございます。

凄く凄く嬉しくて…　出来うる限り頑張る所存ですが、きっと更新は遅めになりそうです。どうか気長に待ってやってください。

その七（前書き）

ようやく、本命登場です。

その七

陽光に、キラキラと透ける銀の髪。
鮮やか過ぎる紫の瞳。
執務室へ続く回廊で微笑んでいるのは、間違いなくあたしが誰よりも会いたかった人。

「団長！！」
「よお。良い所で」

ガイの呼び掛けに、にっこりと笑い返すその端麗な微笑み…

うわ～～～っ！！　アレク！アレクだ～～～～！！！
し、しかも、極上の微笑みつき…
マジ？マジですか？　いつも微笑んではいるけれど、こんな楽しそうな心からの笑顔ってあたし初めてかも…

「本当に良い所で、だ。急いで帰ってきた甲斐が有ったな。久しぶりだ、ガイ。元気だったか？」
「それを俺に聞くのか？　お前と違って俺は温室とは無縁でな。ちょっとやそっとじゃ倒れんのだ。おあいにくだったな」
「…相変わらず口の減らない…　変わりがなくてうれしいよ」
「…それは、嫌味か？」
「なんとでも」

言葉だけ聞くと口喧嘩みたいだけど、二人ともとっても嬉しそう。
目がね～　うん！すっごく楽しそうに笑ってる。

本当に、今日はついている。アレクのこんな表情、めったに見られ

るもんじゃない！　しかも、遠目じゃなくこんなに近くで。
…わおっ！！　この角度…　見あげられるほど近いじゃん…
ああ…相変わらず、どの角度で見てもなんてお綺麗な…
あたしは美形フェチじゃない。美形フェチでは無い筈なのに…

…おっとっと。我に返ったユーリーが一歩下がって礼をする。ヤバいヤバい…見惚れてる場合じゃなかった…って、あたしは見惚れてても構わないのか…
う～ん、ユーリー。目線上げよーよ。あたしに、アレクの綺麗な顔を見せてください。

「本宮からの帰りか？」
「いや。一の郭の私邸からの帰りだ。領地の方の諍いが解決していなくてな…　どうした？その書類」
「ああ。そこの坊やが持っててな。お前当てらしいから、お手伝い」
「それは…　すまないな。ユーリー。重かっただろう」

うわっ！いきなりのお言葉ですか！？

「い、いえ！し、仕事ですから！！」

ひ、引きつる…　緊張で、声が引きつるってば。

「…おい、俺には一言もなしか」
「そのぐらいの量でどうにかなる程、貴殿はヤワでもあるまいに。それとも、この私に気遣って欲しいとでも？」
「…相変わらず良い性格してるな…　おい、坊主。こんなのの下で働くの、嫌になったら言ってこいよ。俺のとこでちゃんと面倒見てやるから」
「将来有望な部下を口説かないでくれないか？　この子は私の所で

一人前にして見せる」

――――――　これって、取り合い？　あたしを挟んで、取り合ってるよね！？

さ、さんかくかんけい？？

い、いや、違う！あたしじゃない！　取り合いされてるの、あたしじゃないし！

しかし、アレクってこんなにしゃべる人だったっけ…？　なんか、何時も見る頼りになる団長って感じじゃなくて、二十五歳の（そう言えば、あたしとはタメになんのか、本当は）青年のままって感じ？いやいや、これはこれで凄く魅力的…

そんだけ、ガイには心を許してるって事っすか？　い～な～。ガイになりたいな～

「あ、ありがとうございます！がんばります！！　りょ、両団長のご期待に背かぬように、精進いたします！」

ぴょこん！　ユーリーが思いっきり頭を下げてお辞儀する。

その途端、アレクとガイが顔を見合わせて…

――――――　うわ…この子ってば、なんて…

「…相変わらず、素直だな…お前は…」

「いい子だろう？」

「まったくだ」

ぐりぐり…また、ガイの手がユーリーの頭にのびてちょっとだけ強めに頭を撫でられる。

う～…この人ってば、こういうスキンシップ好きなんだよね～

でも、気持ち解るわ。あたしも思わず撫でてやりたくなったもの。
手が有れば、だけど。
どうせならアレクにも、やってもらえないかな～…なんて、思っちゃうのは、これ、仕方ないよね。なんたって恋する乙女！　ほんの少しの接触でも、嬉しいんだけどな～　…あたしの体じゃないけど。

だけど、目の端に映るアレクはにこにこ笑ってるだけ。元々、ガイと違ってスキンシップ自体、得意じゃなさそうだし――――

まあ、しかたないか。ガイの手だけでも、実は十分役得役得。ここが本宮あたりでユーリーが女だったりしたら、ガイを狙ってる宮廷のお嬢様方に睨まれる事絶対だ。ああ、ここが隊舎でよかった…

そんな事を思いながら、舞い上がってた気持ちを少しだけ落ち着けて、なでられてるその体制のまま二つの背の高い姿をユーリーの目線で仰ぎ見る。

銀の髪に、黒い髪。
アメジストと黒曜石の瞳。
こうして見ると、実に対照的な二人なのに並んでいても不思議と違和感がない。
アレクの容貌は、その非の打ちどころの無さから冷たく鮮やかな夜を思わせて。
――――　一方のガイは、髪も眼も、服装すらも漆黒なのに、何故か明るく輝く夏の陽光が良く似合う。
夜と昼。光と闇。月と太陽。
『スーベニアの両輪』と謳われる紛れもないこの国の要。
まだ三十代後半だって聞いている、お若い（あくまで国王としては）ルード陛下が最も頼みとするのがこの二人だってことは、スーベニ

アの国民全部、それこそ子供ですら知っている。
第一騎士団は王宮を。その周りの首都は第二騎士団が。
第一と第二と。アレクとガイと。二重の守りにこの王宮は守護されている。
第二騎士団は、こっちでの警察の様な仕事も兼ねてるから結構人数も多いんだよね。確か、騎士だけで五百…だったっけ。歩兵とか入れたら、第一騎士団の優に五倍以上になるらしい。だから、実質的な首都防衛は、実はガイの両肩に掛っていると言っても過言ではないのだろう。

前にも言ったけど、第一騎士団は近衛も兼ねてるから、案外人数は少ないの。少数精鋭って奴？その分、いろんな才能を併せ持つ人が集められてて、いざという時は多方面への遊軍的な意味合いもあるとかって聞いたこともあるし…
ともかく、常に首都シュロスを守る立場に立つこの二人。
いざという時には協力し合う事も多いから、二人の仲が緊密であることが首都の安全のためには絶対に必要不可欠なこと――――――
　ってこんなのは、ユーリーが常日頃いろんな人から聞かされてる事の受け売りなんだけど。

そんな事は関係なく、とにかくこの二人は仲が良い。
こうして並んでても、お互いをお互いが惹きたててるようにしっくりくる。

良いよね～こういう男の友情って。お互いを尊重し合ってるのが、傍で見てても思いっきりわかっちゃうんだもん。おまけに二人とも、これ以上ないいい男だし…
いや～眼福眼福。おねーさんてば、今日はホントにラッキーです！

そうこうしている内に、アレクの執務室の前に着く。

一歩退いて従ってきてたユーリーが、慌ててドアを開けようとするんだけど、それを笑って制して、アレクってば自分でドア開けちゃうし…
ううう…　従僕の仕事、取らないでください…

「ユーリー」
「はい！」

正面の机に、書類一式、ガイからも受け取って揃えておいた時、アレクから声が掛る。

「厨房へ行って、何か酒を取ってきてくれないか？　そうだな…まだ昼間だから、軽い物を」
「おいおい。俺相手に、軽くで済まそうって？」
「暗くなったら、たっぷり付き合うさ。――――　頼めるかな？」
「はい！！只今！」

ぴょこん！とお辞儀をして、ユーリーは小走りに駆けだしていく。

わ～い！！お仕事お仕事！！
何か、大好きな人の為に出来る事がある。
動くのはあたしの体じゃないけれど、あたしにとってもそれは本当に嬉しい事だった。

その七（後書き）

長らく、お待たせいたしました…　ようやく、更新。やっとこさ、本命さんがいっぱいしゃべってくれました。
この間、お気に入り登録が２００を超えまして…あ、ありがとうございます！　ＰＶも４００００、ユニークも１００００を超えさせていただきました。　こんなにも読んで頂けて本当に嬉しいです。
だらだらと不定期更新ですが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

その八（前書き）

文中に未成年の飲酒シーンが有りますが、それを推奨するものではありません。あくまで違う世界の話としてご了承ください。

その八

厨房から、大急ぎで。でも、折角のお酒とまかないのおばちゃんの心づくしの干し肉を絶対に落っことしたりしないように慎重に。あたしは右手に今年取れた葡萄で造った出来たての葡萄酒を、左の手には干し肉が一杯に盛られた木の鉢を抱えて回廊を小走りに歩いて行く。

小走りに歩く…って、日本語、可笑しいけど。それぐらいの気持ちで動いるんだと思って欲しい。あたしは――――　じゃないよね。ユーリーは。

こうしてアレクの為に働くのは間違いなくユーリーの意志で、動くのは彼の体なんだけど。こんな風に同化してるとね、そこら辺の感覚が曖昧になってくる。
特に、あたしとユーリーの感情が同じ方向に向かっている時なんかは。

アレクの為に何か出来る。それがあたしたちにはたまらなく嬉しい。

両手いっぱいの荷物を抱え、アレクとガイの居る執務室の前でふと立ち止まる。

――――――　はて…　どうやって、ドアを開けようか…？

その時、前触れもなくいきなり目の前のドアが開いて。

「よお！　ごくろうさん。早かったな！」
「…あ、ありがとうございます…」

…仮にも第二騎士団の団長ともあろう方が…

だから、それはあたしの仕事だってば！
確かに、両手ふさがってるからドア開けられなかったけど。ドアの前で立ち往生はしてたけど！

――――――　お客様にドアを開けていただくなんて…

ほら。部屋の奥でアレクも苦笑してる。もう、情けないやら恥ずかしいやら…

でも…　ま、いっか。
こういう気さくな所がガイのきっと良い所なんだろうし。アレクだって、決して咎めるような視線じゃない。
うん、ユーリー。この際だから立ち直ろう。

「おお！お前、気が効くな。ちゃんと食べるものも一緒か。ありがたい」
「こ、これはジーナさんから…」
「流石、第一の隊舎の主。アレク、お前良い生活してるな～」
「やらんぞ。せっかく私が整えた極上の仕事環境だ。人に頼らず、自力救済するんだな」
「友達甲斐の無い…　お前が先に、良い人材を取っちまうから俺が苦労するんだろうが」
「貴殿の努力不足を人の所為にするな」

また、言葉の応酬ですか？　楽しそうだから良いんだけどね。
でもね。ユーリーはおろおろしちゃってるから、その辺で止めていただけると嬉しいな～なんて。

おねーさんぐらいになると、会話の裏の裏とかって案外解る様になるけどさ（ふふん。これが年の功ってもんよ）ユーリーなんかは、まだ、無理なんだよね。良くも悪くも世間慣れしてないって言うか…ああ、もう！　そんなにうろたえなくても大丈夫だから。まずはその両手の持ってるものを、しっかりとテーブルに置こう。落っことしちゃうからね。

団長専用の執務室は隊舎への客の応接室も兼ねているから、テーブルとイスは結構きちんとしたものが置いてある。華美では無いけれど、結構良いものなんじゃないかとあたしは見てるんだけど。なにせ、主がアレクだし。それに、ここって仮にも王宮の中なんだから、そんな変な品物自体が有る訳は無いだろうしね。

「とりあえず腹ごしらえ…　アレクも食うだろ？」
「…此処は私の隊舎だぞ。何故、貴殿の方が先に座って物を薦める」
「まあ、堅い事言うなって。そうだ、坊主も一緒にどうだ？」
「え？」

――――――　え？

な、何をおっしゃってますか？ガイさん？
解ってますよね？あたしはただの従僕で、むしろ色々とお給仕？…
…いや、いらないかもしれないけど、そう言う事を率先してするべき立場なのでは無いのかい？

「ああ、そうだな。ユーリーもそろそろ酒を覚えても良い頃だろう。此処に来なさい」

――――――って、アレク～～～～！！！
あんたまで、何言ってらっしゃるんですか～～～～！！

「そうだそうだ。こんな無愛想な顔だけ見ていては酒も美味くないからな。お前も、こっち来て一緒にやれよ」

って、ガイ！
そこで、あんたの隣の椅子を引くんじゃない！
うわっ！！
いきなり引っ張られて、ユーリーの体はすとんとガイが用意した椅子の上に乗っかって。何時の間にか手に葡萄酒の入った器が握らされている。

「ほら、呑んでみな。葡萄酒は初めてか？」
「これは…今年取れたばかりの奴だから、強くないと思う。お前にも呑めると思うが…」

きゃー！アレク！！
なんで、あんたが先に呑んでんですか！
毒見…ってこの城内で、そんな心配は無いと思うけど。従僕の毒見をあんたがやるって、本末転倒でしょうが！！

――――――なんて、騒いでんのは、ユーリーの中のあたしだけで。
当のユーリーはもう一杯一杯で、恐る恐る器に口を付けている。

「うぷっ！」
「ありゃりゃ…　お前、本当に初めてか？」
「は、はい…！」

ごほっ！！
うわっ！　むせちゃった！く、苦し…！
あたしにとっちゃ、水みたいなもんだけど、この子ってば、お酒、

初めてなんだよね～
初々しいって言ったら、その通りなんだけど…　訓練の必要あるよ、ユーリー君。

「…剣の練習もだが、こっちの方も鍛えてやれよ、アレク」
「どうやら、そのようだな。ああ、もういい。無理しなくて良いから」
「で、でも…！」

まだ、器に残ってんです～

――――――　口に出さなくても、言いたい事は良～く解りますよ、ユーリー君。

お残しは許しません！――――――って、食堂のジーナさんに言われるまでもないんだけど。
こっちに来て、痛切に思った事。
何をするにせよ、何を作るにせよ、それはあたしが本来居る現実世界に比べて、おっそろしいまでに手間が掛るっていう事。

基本、機械ってもんが存在しない世界だから、食べるものから着るものまで、家も城も橋も、何もかもがみんな手作り。もちろん、その分手間も暇も思いっきり掛ってる。
だから、全て勿体なくって、『捨てる』っとかって概念があまりない。
……まあ、アレク並みの大貴族様はどうか知らないんだけど、ユーリーにはあたしなんかでは太刀打ちできないくらいに勿体ない精神が息づいてるんです。それも当り前に。
だから、物を捨てるとか、食べ物を残すって事が基本出来ないの。
ユーリーは。

器を見ると、まだ、半分以上残ってるし…

う〜ん…あたしだったら、こんなもん軽いもんなんだけどねぇ…

精神は融合してても、味覚も口もユーリーのだもんね。

…と、考えてたら、ひょいと手の中の器を取り上げられて。

「――――!」

「ほい。ごちそうさん」

ガ、ガイ〜〜〜!!!

呑んだ?え?残ってたの、呑んじゃった!?

「このままで、良いか…　アレク、そっちの酒樽寄越せ。これっぽっちじゃたりねぇよ」

器!ガイ!あたしが呑んだ器そのまま!!…って、か、かんせつきす…ですか!?

え?え?え??　ど、どうせなら、アレクと…

い、いや!　ちがうだろうが、そこは!!

間接キスになっちゃったのは、あたしじゃなくて、ユーリーだってば!!

男同士…男同士…

い、いや、良くあること!　そう、意味なんかないぞ!良くあること!!

あたしだって、部活で当り前の様にペットボトルのシェアしてたし!　それと一緒!　焦るな!あたし!

「ここで、本気を出さなくて良い。今夜、屋敷に泊っていくだろう?　とっておきの竜酒が有るから、呑んでいけ」

「竜酒？！　イアニスの竜酒か？」
「それも十年物だ。いるか？」
「もちろん！――――と言うか、良く手に入ったな…」

なんか、酒の事で盛り上がってんですけど…
イアニスって、確かスーベニアの北方に位置する大国だよね…　ユーリーが持ってる知識の中では、決して良い印象が無い国だけど。
しかし、北の方の酒って――――――　もしかしたら、めっちゃ、きつくね？
アルコール度数、半端無いのが多い様な印象が…　まあ、あたしが呑むんじゃないから良いか。ユーリーに呑ませる訳でもなさそうだし。
やっぱり、お酒にも強いんだ、二人とも。
それはそれでカッコイイよね、うん。やっぱり、惚れ直しちゃう！

それでも、この大物二人と一緒のテーブルに着いてるのって、ユーリーの神経に多大な負担をかけるみたいで、ユーリーは早々に椅子を立ち、葡萄酒の追加やら（何しろ、浴びるように呑むのだ、この二人）その他の細々した雑用やらであっちこっちへ動きまわることになる。

いや～、確かに目の保養なんだけど、あんまり近くでってのはあたしにとっても心臓に悪い。
ガイの存在感もそうだけど、やっぱりネックはアレクのあのとんでもないお顔の造作に尽きるでしょう。

あの顔とあの近さで向き合って、普通に話せるガイに尊敬の念すら持ってしまう。やっぱり、大物は違うって？　なんかちょっと、情けないと言えばなさけないなぁ～

片思いってのにも、もしかしたら適度な距離感ってものが必要なのかも。
また一つ、勉強になった気がする。

その九

やがて、ゆっくりと夕闇が王宮に押し寄せて。

「じゃ、門まで、お見送り致します。今、松明を…」

今日はガイと一緒に私邸へ帰ると言うアレクの為に、大急ぎで夜番の宿舎へ行って松明を二つ用意する。
この頃では、見る見るうちに夜が深くなるから、執務室に戻った時には、もう辺りは宵闇に包まれていた。

「やあ、来たな」
「ああ、すまない、ユーリー」

こちらには電気なんてこれっぽっちも存在しないから、回廊に設けられた灯り取りの松明のうっすらとした焔を受けて、薄暗いオレンジ色の世界の中、アレクの銀の髪が色を増して浮かび上がる。
そしてそれを支える様に立つ、闇から溶け出した黒衣の影。

――――――　なんて、絵になるんだろう…

もう、何回惚れぼれと見返せば気が済むのかって感じ。

『恋すりゃ犬も詩人』とかって言うけれど、アレクを表現するには、あたしの語彙力は少な過ぎる。
ああ、写真…　ここにケータイが有れば良いのに！

アレクとガイ。
二人が並んで歩き始めるから、あたしは――――――もとい、ユーリ

ーは、一歩下がってその後に付いて行く。

聞くともなしに聞こえる会話は、軍事から政治、経済から外交…あまりにも多岐に渡るから、あたしはついて行くのが大変だ――――と、これは、ユーリーにとっても言えることなんだけど。こうやって聞いていると、国を本気で動かすのには色々な要素が複雑に絡み合っていて、国王と言う存在のこの国での大きさを実感する。それを支えている、宰相とか、アレクとか…側近って言われる人たちの博識にもだ。

どちらかと言えば軍事に偏りがちなガイでさえ、大まかな外交や、経済の行方は頭に入ってるみたいだし、自分の領地を治めているアレクはもっといろんな事を考えている――――――　きっと、あたしたちが知らない事まで。

「――――　それで、その後の状態は？」

「ああ。市街の警備を少し増やした。特に、西を重点的に」

「西？あの辺りは大きな屋敷ばかりだろう」

「だから…かな？　なんとなく大物が引っかかったりして」

う…なんか、難しそうな話になってる。

こうなってくるとユーリーとしては黙ってついて行くしかないんだよね。まだまだわからない事ばかりだから。

れっきとした大人の筈のあたしですら、この二人の会話には付いて行くのが大変だ。半分解れば良い方。下手したら、何言ってるのかチンプンカンプンの時だってある。ましてやユーリーは。

でも、こうやって傍に居て、話を聞きながら自分で学んでいくのがこちらでのやり方だ。この世界には、学校とか教師とかって、ほっといても教育してくれる様な機関は無い。知識や教養、身の処しからから剣の使い方。全て親や身近な人が手本になり、小さい時から自分の力や身分にふさわしいやり方で大人から直接教わったり、傍

に居ることで盗む様に学んでいく。

だから、みんな結構子供のうちから、親元を離れて行くみたい。特に、男の子はね。

ユーリーは、本当に辺境の小さな貴族の出身だけど、今、はっきり言ってもの凄く恵まれた位置に居る。国の中枢に近い立場の人と直に話せる環境なんて、本来ほんの一握りの人間にしか与えられないものだから。

まだまだユーリー自身は、日々の訓練や細々とした仕事をこなすだけで精一杯みたいだけど、ぜひ、この環境を生かして、有能な人材になって欲しいと思ってるんです。こうやって中に居るおねーさんとしては。

すっかり暮れて、あちらこちらの松明以外灯りの無い道を、一の郭の門の傍まで来た時だ。

「誰！」

いきなり誰何（すいか）する声に、三人の足が止まる。

「…姫…」

「アレク様？」

鈴を転がす様な、高い綺麗な声にびっくりした。

――――　女の人？

こんな暗くなってから、いくら王宮の中とは言え、女の人が歩いてるなんて…
おまけに、さっき、アレクってばなんて言った？

「どうして、貴女がこんな所に」
「一の郭のお友達の所に。うっかりして遅くなってしまって…」

アレクとガイの姿が影になって、あたしからは見えないけど、その先に何人かの気配が有る。馴染みのない衣擦れの音は二人…かな？
　王宮の女官かしら？
でも、さっき、アレクってば『姫』って…

「不用心ですね。いくら、王宮内とはいえ、侍女と二人で外出とは」
「サーシャは、これでも護衛を兼ねておりますから…　アレク様こそ、何故こちらに？いつもは隊舎に居られるとお聞きしておりますのに。それに、あの、そちらは…」
「ああ、ご存じでしょう。第二騎士団の団長を務めるガイ・ヒューバー。ガイ。確か貴殿は姫とは初めてではない筈だったな」
「…以前、北の離宮でお目にかかった事がございます」

ザッ…
ガイが、その大きな身体を折って膝を付く。ユーリーも慌てて同じ様に膝を付いて頭を垂れた。

「お久しぶりでございます。ミルヴァーナ様…」

ミルヴァーナ姫？
この人が…！

「お二人とも、顔を上げてください。今は正式の場では無いのです。

そのように為されると、わたくしのほうが困ってしまいます」

軽やかな、優しい声、思わず見あげてしまったそこに有ったのは、

――――――　うわ～～～～…　本物だ…

本物のお姫様って、きっとこういう方を言うんだろう。

アレクも非の打ちどころのない美貌だけれど、この方の面差しは本当に優しげな、昔見たおとぎ話の中のお姫様の様なたおやかな美しさで。

松明の赤みを帯びた光の中に、まるで陽炎のように揺れる金の髪。

横に並ぶアレクとは色合いが違うから、日の光りの下ではもっともっと明るい――――――　おそらくは正真正銘の金髪なのだと思う。

瞳は確か、青。『スーベニアの蒼玉』とかって言われてなかったっけ…？　御年、芳紀十七。背は、アレクの胸のあたり。

横に並ぶと、まるであつらえた様に収まる一対のカップル…

ツキン…

胸が痛む。

美しい人だと、確かに聞いてはいたけれど。

この人がミルヴァーナ姫。

国王の、年の離れたたった一人の妹君にして――――――　あたしの、アレクの、婚約者。

ユーリーみたいな下っ端が、王族にお会いする事なんて有るはずもないから、今まで、どんな人かもわからないままだったけど。

この人が、アレクの婚約者。

……勝てる訳ないよな～……　…勝つ気なんて、はなっからないけどさ。

此処まで綺麗な人だとは思ってもみなかった。
ここまで、お似合いだとは思ってなかったよ。

ツキン…ツキン…
小さく小さく、心臓が痛い。
ユーリーには伝わらない、これは、きっとあたしだけの感情。
決して叶わないって解っていても、やっぱり、好きな人の婚約者なんてものを目の当たりにするのは辛い。
届かないよ。
気持ちさえ、届いたりなんかしないのにね。

「――――　アレク。この闇夜だ。やはりお供の方々だけでは不安だろう。姫を送って差し上げろ」

不意に、聞こえてきたガイの声に我に返る。
今一瞬、あたしの意識はユーリーから離れてたみたい。

「…そうだな。では、ガイ。先に行っていてくれるか？　すぐに帰るから」
「何を言ってる。折角、姫とお会いしたんだ。送ってそのままってのは婚約者としてどうなんだ？　俺はこのまま自分の隊舎に失礼する。竜酒はまた、次の機会に」
「そうか？　…わかった。お言葉に甘えよう」
「いえ！そんな。わたくしは…」
「いえ、是非そうなさってください。…それでは、私はこれで…
アレク、坊主を門まで借りるぞ」
「ああ。ユーリー、頼めるか？」

「は、はい！」
「それでは、御前を失礼いたします、姫」
もう一度、深く首（こうべ）を垂れて。
ガイはそのまま、踵を返す。
「さあ、坊主。邪魔ものはさっさと帰るぞ」
それにならって一礼してから、あたしも慌ててガイの後に続いてその場を離れようとする。
――――――　あれ…？　なにか、変…
何だろう、この感じ…
何か、空気に違和感が有る。
その時、思わず振り返ってしまったのは、ユーリーだったのか、それともあたしだったのか。
松明の灯り。オレンジ色の頼りないその明りの中で、同じ様に振り返ってこちらを見ている人の存在にその時気付く。
闇に揺れる金の髪。その視線の先は――――――
――――――　え…？
見てはいけないものを見てしまった様な気がして、慌てて前に向き直る。横を歩くガイは、真っ直ぐその眼を正面に向けたまま、早足に歩いて行く。

――――　変だ…　変だよ…

らしくない。
こんなガイは、絶対にらしくない。
思わず聞こうとして、絶対に聞いてはいけない事だと悟る。

ミルヴァーナ姫が振りかえって見詰めた先。
それは間違いなく、ガイの背中だった。

その九（後書き）

やっとこさ、更新です…
少し、話が動いたかな…？　ええ。動きました。
本当はまとめて一話にするつもりだったのですが、長くなりすぎましたので二分割。これで、こっちの世界の主要な方々は出そろったのでは…と、思います。
読んで頂いてありがとうございます。
次は現実の世界の話。しばらく、あちらにかかりきり…かな？　これからもお付き合い頂けると本当に嬉しいです。

その十（前書き）

今回少し長いです。

その十

――――――う～～～～ん…

考えても仕方ない事って、有るよね。

――――――う～～～～ん……

でも、それでも、どうしたって考えちゃうことも有って。

「う～～～～ん…」

本当に、いったいどうしたもんだろう…

お昼休み。既にしっかりお昼は食べ終わって。

本当なら、天気も良い事だし、こんな風に事務室で机に向かって頬づえ付いてたりしないんだけど。

だってこの部屋、究極の職場最前線なんだもの。こんなとこ座ってたら、何時なし崩しに午後の仕事に突入するかわかんないの。いえ、マジに。

病院という職場での、これは特徴なんじゃないかと思うけど、基本、病院に勤めている職員は時間に対して非常にアバウトにならざるをえない。

普通の会社とかって、十二時になったらよっぽど仕事溜めてるとかとてつもなく忙しいとかじゃなければ、しっかり昼休みでは有りま

せん?でも、病院――――これは、特に外来と救急に顕著なんだけど――――ってところは、基本的に昼休みも昼ごはんも、取れる時に取る食べれる者から食べるのが当たり前。時間ぴったりに『さあ、皆でお昼!』なんてものは端っから論外な場所なんである。

あたしのいる栄養室は上記の二つほどではないけれど、お昼休憩の時なんぞでも、その場に留まっていれば急に入った仕事やらなんやらに否応なく持っていかれるのが実情で。しっかりお昼休みを取りたかったら、この場に居ないって事がなによりも肝要なんである。

(その分後にずれ込んだりもするんだが…)

居たら使われる。いや、これ本当にマジだから。

そんな事情で、いっつもだったらさっさと近所のショップモールとか公園とかに逃げ出しちゃってるんだけど(この技、習得するまでに、二年はかかったよなぁ…)今日は、なんか、考える事が多過ぎて、ちょっと動く気がしない。

ああ… 近所のコンビニの新作スイーツ、試したかったなあ…

すぐ売り切れるんだよね。帰りで間に合うかなぁ…

ぐだぐだと未練がましく思いながらも、お尻はペタンと椅子に腰を下ろしたまま動かない。

原因は、一つ。

間違いなく、この前、見た夢。それが原因。

相変わらず、夢と言うには余りにも臨場感あふれるスペクタクル(?)な夢だったけど、一週間ばかり前に見た例の夢は、めずらしくも嬉しくも麗しのアレクが思いっきり出ずっぱりで目の前に居らっしゃって、それはそれは満足出来る夢では有ったはずなのだ。

アレクだけでなく、おまけの様にガイまでも――――――― あっちの世界での二大イケメンそろい踏みだったんだよ~! これは、間

違いなくその後一、二週間はそれだけでうきうきしてしまうぐらいの楽しい夢ライフだった筈…　なのに。

その最後。

目覚める前に見た景色。

アレクの婚約者を目の当たりにした衝撃もさることながら。

――――――　あれは、なに？

アレクの婚約者で有る筈のミルヴァーナ姫のあの視線は、一体なんなのだろう…

わかる…んだ。

たぶん、あたしにはその意味が解り過ぎるぐらいわかる筈…

でも。

それを、認めっちゃって、いいの？――――――　いや！　だめでしょう！！

断じて、それは認めちゃいけないでしょう！？　ええ絶対に！

――――――　だって、婚約者だよ？

あのアレクの、婚約者だよ？

あの、おっそろしいまでにイケメンの、男としても結婚相手としても、おそらくこれ以上ないってぐらい完璧な、あのアレクの、惑う事無き婚約者なんだよ、ミルヴァーナ様は！

金と銀。青と紫。一対の、まるで理想が作り上げた様な完璧なカップルだったじゃないですか！

そうよ！　まるでおとぎ話の王子様とお姫様！　そのものだったじゃないの！

あたしでも…
こんなにもアレクが好きなあたしでさえ、「ああ、かなわないな…」と、思ってしまうぐらい完璧な。

……まあ、確かに。
確かにガイもいい男ですよ？　ええ！アレクさえ居なかったら、あたしが夢中になっていたかもしれないぐらいのナイスガイ（…う…シャレじゃないよ…）ですよ！
でも、でも…！
それは、無い！　ありえな――――く、ないんじゃないで、しょうか…？（ああ、日本語の非定形すらわからなくなってる…）

けれど。
あの眼。
あの眼差し。

――――――　う～～～～ん…　考えたくは無いんだけどな～…

あたしが感じた事は、果たして本当なんだろうか…
わかってしまったと思った事は、事実なんだろうか。

口には出せない。
その事を言葉にして、形にしてしまうには余りにも大変な事だから。
そんな事は、この年にならなくたってわかる。アレクの婚約者と言う立場が、どう言う意味を持っているかなんて。
ましてや、相手はガイだ。

――――――　ガイ…

そう言えば、あの時ガイも変だった。
気さくで、アレクに対しても微笑ましいぐらいに自由に振る舞うのがあの人の魅力なのに。
あんな風に。いくら王族相手だと言っても、あれほどまでにへりくだり視線を決して合わせないようにして…

ま…さか、ね。
うん！　それこそ、『まさか』の世界の事！
考えちゃいけない。
きっとこれ以上、この事をあたしは考えちゃいけないんだ。きっと、絶対に。

その証拠に、あの後三回ほどあっちの世界へお邪魔させてもらったけど、アレクはおろか、ガイにも、もちろんミルヴァーナ様にも一回もお目にかかっていない。
寂しいけど、これが現実。
これはきっと、これ以上考えるなって事だよね。
きっと、そうだ。
そうしよう。

だって、あたしがこっちでどんだけ悩んで考えたとしても――――――
――　あたしはあっちで、何ひとつ出来やしないんだもの。
どんなに誰かが悩んでいても、何一つしてあげられはしない。
あたしは見てるだけ。いつも、ただ見てるだけの、傍観者でしかないんだもの。
考えない。
もう、これ以上考えない。
よ～し！もう、絶対考えたりなんかしないぞ～！！
悩んで、考え込むだけ損だ。
どうせ関る事が出来ないんだから、楽しい事――――――　アレクに会

えることだけ考えよう。
そうだ、そうしよう！

でも…
でも、もしも。

もしも、あたしの想像が、想像でなかったとしたならば。
あたしの恋心は、その時何処へ行ってしまうのだろう…

「――――　どうしたの～？　元気ないねぇ、神部ちゃん」
「ああ、深山さん…」

ポン！っと手にしたプリントを丸めて、深山さんがあたしの頭を軽く叩く。
どうでもいいが…あたしの周りには、あたしの頭を太鼓かなんかと間違えてる人が多くないですか？
いや、深山さんのは、決して痛くないから良いんですけどね。ポンポンポンポンやられると、そんな邪推までしてみたくなりますですよ、ハイ。

「変に神部ちゃんが元気ないと気になるわよね～　どしたの？　具合でも悪い？」
「…具合の悪い人間は、お昼完食しませんって」

深山さん、一緒に食べてたじゃないですか。今日は久しぶりのカレーだったし。

大鍋で煮込む此処のカレーは、甘口だけど結構イケるんだな、これが。ささやかな事だけど、食堂のある環境がこんな時は有り難い。

あたしの勤めてる、ここ、坂水病院には、小さいながらも職員食堂なるものが存在する。食堂なんて言っても、配膳室の横に小さな会議室ぐらいの部屋が有って、其処に会議で使う様な長机と椅子が十客ぐらい置いてあるだけなんだけど。

一応、プレートは職員食堂。基本、お昼を職員が食べる為だけにしか使われない部屋なんである。

ここの職員食堂は食券制。メニューは一品日がわりのみ。朝、券を出しておけば昼十一時半にはおかずが揃えて出してあるって仕組み。メニューの日替わりは、実は病棟の一般食と同じなのだ。だって、作ってるのあたしとおんなじ職場のおばちゃんたちなんだもの。メニュー決めてんのはあたしらだし。別のメニューなんて作ろうなんて考えは、はなっから有りませんでしたしね。

入院してる方と同じメニューと言うのも、考えてみれば何なんだが、態の良いモニターと思えばこの値段でこの内容はありがたい。――たまにはずれはあるけどね。献立決めてるあたしたちが言うのもなんだけどさ。

「それにしては溜息が多い。神部ちゃんらしくない…」

いや、確かにそーなんですが。

「もしかしたら、突発性のはやり病？」

「だから、違いますって！」

なんですか、その突発性のはやり病って。

「此処は仮にも病院ですよ。そんなけったいなもんが出たら、保健所行きまっしぐらじゃないですか」
「あら、保健所に関係のないはやり病だって有るんだから」
「は？」
「思いっきり突発で、人を選ばない――――――　ずばり、恋」
「へ？」
「だ～から、恋の病！　…ずばりでしょ？」
「…違います…」

いえ、当たらずしも遠からずでは有りますが。

「ええ～っ！？　違うの！？　絶対絶対そうだと思ったのに！やっとやっと、神部ちゃんにも春が来たと思ってたのに～！！」
「…深山さん…」

頼みますから、両手を胸のあたりで握り締めて力説しないでください…
…って言うか、あなた、今年お幾つでしたっけ…？

「残念ながら、今回は違います」
「今回はって、何時のはそうだったの？」
「何時のって、それは…　――――――！！　み、深山さん！！」

誘導尋問ですか！？

「あら残念…　もう少しで引っかかってくれそうだったのに」

けらけら…と笑いながらおっしゃいますか…
いつまでも、茶目っ毛を失わないのは深山さんの良い所だが…

頼みます。あたしで遊ばないでください。

「でも、本当に変よ。あなた。なんかあったの？」

あたしと向かい合わせ。
自分の椅子に腰をおろしながら真面目な顔で尋ねてくるのは、いつもの落ち着いた上司の顔で。

「いえ。もう、考えてもどうしようもない事考えてるだけですよ」

すみません。ご心配かけました。
ぺこりと頭を下げてみる。

ふざけてるってわかる時は友達みたいにしてあしらえるけど、こんな風にしっかりとした年上の立場で来られると、どうしたって敵わない。
いかんいかん…
本当に、どうでも良いとは言わないが、どうしようもない事で他人様にご心配をお掛けするなど、あたしの信条に反するではないか。
よし！もう、悩まない！
当たって砕けないけど、成り行きを見守っていくしかないよね。

「…ねぇ、神部ちゃん」
「はい？」
「もしかして、山本先生にふられた？」

は……？

「いや、間違えた。山本先生をふっちゃった？」
「はあ？！」

なんか、幻聴を聞いた様に思うのですが…

「え？違う？　てっきり、そうじゃないかと思ったんだけど」

まだ、さっきの続きかい！――――と思って、マジマジと見返した深山さんの顔は、信じられないが真面目な顔で。

えっと、誰が？　誰をフルとおっしゃいました…？

「あ、あ、有り得ないでしょう！！」

って言うか！

「何でそこで、剛史の名前が出るんですか！」
「え？だって、それをあたしに聞くの？」
「だから！そこを聞いてるんですってば！」

あたしが剛史をフルとか、マジ、ありえんし！
しかも、なに？　あたしが、剛史に、フラれるってか！

「それは！　あまりに！　あたしに！　失礼でしょう！」

寄りによって、何であんなのにあたしがフラれにゃならんのか！

「だって、仲いいじゃないの」
「あれの何処が仲、良いんですか！！」

いっつも一方的にケンカ売ってくんのは剛史の方だ！
あたしがそれを、正当防衛で返して何が悪い！

「あたしと奴の間には、これっぽっちもそんな関係はございません！」

そこだけは、しっかり、拳握りしめて、思いっきり、宣言！

目をぱちくりさせた深山さんの瞳が、やがてふわっと微笑みに溶けて。

「…若いなぁ…」

「は…？」

「うんうん。若いって良いねぇ…」

「へ…？」

いきなり手を伸ばして、机越しに頭を撫でられる。

――――――　あ…　こんなの久しぶり…

そう言えば、この頃、あたしはこんな風にされた事なかったなぁ…

…そうか…ユーリーも、こんな気持ちなんだね…

自分がされるのってなんか照れくさくって嬉しいね。いっつも、ユーリーの中でだもんね…

「そんなとこが神部ちゃんの良いとこだけど。でも…」

大事な事を、見落とさないでね。

「大事なこと……？」

尋ねる様に深山さんを上目使いに見ても、深山さんはにこにこ笑ってるだけで。
こんな時はもう、応えてくれないんだよね。
…なんだかなぁ…　意味深過ぎて。ねぇ、どう答えたら良いんですか…？

――――――と、その時、廊下の方から物音が。

パタパタパタパタ…

えっと、これって病院指定の上履きの音だよね。
非常時以外廊下は走るなって院長のお達しが出てるのに…

だれ？と、思う間もなく、バタン！と、事務室のドアが開けられて。

「「え？」」

思わず、深山さんとハモってしまった。何を隠そう、飛び込んできたのはさっきから、話のタネになっている山本剛史先生その人だったから。
えっと、こういうのって、なんて言うんだったっけ？

「頼む！　有里！匿（かくま）え！」
「はあ！？」

そうだ。

『噂をすれば、影』

その十（後書き）

やっと、更新…この頃、このセリフばかりですが。
今回、切りどころがなくて少し長め。その分、次が短くなりそうです。
沢山の方に来て頂いているみたいで嬉しいです。
とにかく楽しい話を！と精進していますが、なかなか…
まだまだ先は長そうです。
どうか最後までお付き合いください。

その十一（前書き）

今回、二話同時更新です。

その十一

「匿(かくま)え！」

――――― って、いきなり人のテリトリーに入ってきておいて、第一声がそれかい！

「やなこった！」

一昨日(おととい)きやがれ！

売られたケンカはかってやるぜ、三倍がけで！

「ちょ、ちょっと神部ちゃん。いきなり『やなこった！』ってのはあんまりでしょう。どうかされたんですか？山本先生」

とりなす深山さんのお言葉が耳に刺さりますが…

あたしとこいつとの因縁は、何度も言いますがもう十年越し。

素直に反省なんぞするには、あたくしも少々トウが立ち過ぎておりまして。

そのままの、思いっきりケンカ腰の姿勢で、飛び込んできた剛史を糾弾する。

「で、なに？一体何の御用？　仕事に関する事以外は、受け付けたりなんぞしないからそのつもりで」

「しょっぱなから、ケンカを売るな！このバカ娘！　聞いてないのか！頼むっつったろうが！　しばらくでいいから、此処に居させてくれって言ってるんだ！」

「は？　なんで」

「いいから！　訳は後でちゃんと話すから！どっか隠れるトコって…ないか？ないのか？！」
「ちょ、ちょっと待て！　そんなでっかい体で何机の下なんかに潜ってんのよ！　それって、隠れた事になってないから！　って言うか、思いっきり見えてるし！」

何なんだ、いったい…
いきなり人の机の下に潜り込もうとするなんて。自分のガタイを考えろって！
いや、もうそれ以上に、情けないから止めてくれ。ナース達の夢を壊す気かい！　一応あんた、この病院では若手ナンバーワンなんだから。

とりあえず話を聞かにぁあ治まるまいと、あたしはしゃがみこんだ剛史の横に同じようにしゃがみこむ。

「いったい何があったってーの？　あんたみたく図太い奴に、怖いものなんてあったっけ？」
「人を人外の化け物みたくゆーな！　俺にだって怖い物や苦手なものはちゃんとある！　――――――　そもそも、何で俺が、こんな風に逃げ回らなきゃならない事態に陥ってると思ってるんだ！　責任取れ！」
「ああ！？　なんで、あたしが責任取んなきゃなんないの！　って言うか！意味不明！　もうちっと、日本語勉強してこい！」
「成績について、お前にどうこう言われる筋合いはない！」
「なんだと！？　やっぱりケンカ売ってんのか、こら！」
「やるか！？」
「やってやる！」

「――――――――　二人とも、論点ずれてるし…」

呆れた様な深山さんの言葉に我に返る。

ヤバいヤバい。
一瞬頭がヒートアップしちまったぜ…（一瞬か？　いや、そこ、突っ込むとこじゃないし）

「で、山本先生。落ち着いて状況を話していただけますか？　こちらとしても、何が何だかさっぱりわからないんですが」
「…深山さん…」

振り返って深山さんを見た剛史の眼はまるで小動物の様。
――――――　なんか、地獄に仏って感じだぞ。本当に大丈夫か？

「すんません。何も言わずに、しばらく此処に居させてください。お願いします」
「それは、まあ、仕事に差し支えなければ、かまいませんが…」

なんとも、歯切れの悪い深山さんのお返事に、剛史が改めて口を開こうとしたその時に。

トントン。
軽いノックの音。

「失礼します」

それと同時に開けられたドアの向こうの人物に、あたしは思いっきり驚いたのだった。

その十二

「――――――　失礼します」

と、ドアを開けて入ってきた人物を見て、あたしは本当にびっくりした。

いや、別に、知ってる人間が急に訪ねて来たとか、会いたくない奴が大挙してきたとかじゃなくて。
入ってきたのはたった一人。
しかも、女の人だったんだけど。

――――――　な…な…な…

なんちゅー、スタイルしとんねん、われ！――――――　い、いけない…　つい、昔近所のテキヤのにーちゃんから習った、関西弁、柄悪いバージョンが出てしまいました。

し、しかし。
そこに、にっこりと立つナース服をお召しになった女の方の風情と言ったら！

ボン！　キュ！　ボン！ってこういうの？
思いっきり飛び出した胸と、張り出した腰のラインの真中で、きゅっと引き締まったウエストが信じられないくらい細く見える。
えっと…この病院。それ系のナース服って置いてたっけ？　え？なに？これ普通の標準服？普通のナース服が、どうやったらこんだけ悩ましくも身体の線を強調してしまうんですか！？
ピ、ピンク…　そう、いっそピンクのナース服でも着せといたら余

りにもぴったりじゃないですか！おねーさん！
しかも、お顔もそれ系に、大人のお色気満載って感じの美人さんですね、あなた…
その美人さんが、事務室の中をゆっくりと見渡してからにっこり笑ってお口を開く。

「こんな所にいらしたんですか？山本センセ。お探ししましたよ。午後の診察の手順など、しっかりお聞きしたくって」

――――――　うわ～～～っ！！

これは、エロい！　まじ、エロい！！
こえ！　こ、声までマジにクる…
いやもう下品で申し訳ないけれど、女でもこれだけきちゃう声ってどうよ！　某有名な泥棒振り回す悪女を彷彿とさせてくれますがな。
一体全体、全身これ、エロ！――――って感じのこのお方は…

「や、やあ。平川さん…　す、すぐに行くつもりだったんだけどね…　俺にも、色々予定が有って…」

――――――　怯えてる…

なんて珍しい。あの剛史が思いっきりビビってる。
剛史、あんた何ヘタレてんの！――――って、気持ちわかるけど。
これだけの迫力で来られたら、なまじの男は引くかも…って、それはそれで情けなくないか？

この美人さんが剛史をその方向で狙ってるってのが、この短い時間でも、ビンビンと部外者のあたしにでも丸わかり。男なら、思いっきり喜んでみんかい！甲斐性無し！

いや、しかし凄い事は凄い。一回とっ捕まったら、もう逃げられないって感じ？
こんなにはっきり剛史にモーション掛けてきた人も初めてだが、それがこんな強烈な方とは。

…でも、いったいどなたさんで？――――って言うか、こんな看護師さん、この病院にいたっけか？

「こんにちは、平川さん。あなた、病棟じゃなかったかしら？」

にっこり笑いながら、自分から声を掛けられるあなたが凄いです！
深山さん！

「こんにちは、深山サン。実は山本先生、午後から病棟担当ですの。ですから、お仕事に少しでも落ち度がない様に、あらかじめ注意点をお聞きしておこうと思ってお探ししてたんです」

まだ、慣れないものですから…

――――　あの～…　言ってる事のしおらしさと、態度と声音が一致しないんですけど～…

「…深山さん、どなたです？」

本当はこそっと聞きたかったんだけど。
でも、本人の目の前で内緒話なんて事は出来ないし。一応同じ職場なのに、名前も知らないままで…ってのはいただけない。…でも、なんで深山さんは知ってんの？
その疑問には、深山さんがあっさり答えてくださった。

「ああ。神部ちゃんは、月曜日ちょうどおやすみだったものね。その時に紹介があったのよ。七月から入られた平川さん。外科病棟の担当になった筈…でしたよね？」
「ええ」
にっこり。
…蛇とマングース…？
にっこり同士のその微笑みが怖いってーの！
「平川さん。こちらはこの病院のもう一人の栄養士の神部さん。よろしくね」
「…初めまして」
「初めまして。平川真由美（ひらかわまゆみ）です。よろしくお願いいたしますね」
またまたにっこり。笑顔になんか含みが有る様な気がするのは気のせいでしょうか…
え～と…これは牽制って奴ですかね。
ご心配なさらなくても、あたしには剛史（これ）に手を出そうなんて考えはこれっぽっちもございませんから――――――　なんて、言ってやる義理もないから言わないけどね。
でも、あれ？
なに…？
なんか、この人、引っかかる…んだよね。
どっかで…　う～ん…どっかで会った事が有る様な…
「さあ、山本センセ。ここではなんですから、場所を変えて、指導していただけますかしら？」
「いや、あの…それがですね…」

おお！　心底剛史が押されてるぞ。有る意味強者（つわもの）――――――　いや、剛史ってばこういうタイプが苦手だったのか？
有る意味蚊帳の外での攻防は、所詮他人事（ひとごと）の外野席。せいぜい楽しんでしまおうかと思ったんだけど。

――――　でも、やっぱり。
うん。絶対あたし、こんな感じ知ってるぞ。
前にも有った。確かに有った…！
え～と…平川…？
平川…ひらかわ…ひらかわ…　…かわ…

「あ～～～～～っ！！」

思い出した！
思いだしちゃったよ！

「エロ川！？」
「なんですって！？」
「やっぱり、エロ川！！」
「なんで、そのあだ名…　え…？　神部…？　神部って…　もしかして、ゆり！？　あの男女（おとこおんな）の！？」
「男女って言うな！」
「そっちこそ、昔の変なあだ名出してくるんじゃないわよ！」

間違いない…間違いない！
こいつ、高校で一緒だった同級生だ！
お互いに所属集団が違い過ぎて、余りにも接点がない…筈だったのに。

有る一点に置いて、あたしは彼女を知ってるし、きっと彼女もあたしを知っている筈。

「なにしてんのよ！こんなとこで！」

さっきまでの甘ったるい声じゃなく、結構ドスの効いた怒鳴り声でエロ川が叫ぶ。

――――――　おねーさんおねーさん。

今までのしおらしさは何処行った？

「いや、それはこっちの台詞。あたしゃ、三年前からここで働いてんだけど」

「え？！　マジ！？　知らないし！そんな事！　何で居るのよ！」

「なんでって、就活して入れたから」

「そんなこと聞いてるんじゃないわ！　なんで、此処なの！」

「それ以外、受けなかったから」

「だから！　そうじゃないって言ってるでしょ！！」

なんか、相手が興奮すればするほど、あたしってば変に冷めてっちゃうんだよね。

「まあまあ、落ち着いて。あんまり興奮すると、化粧はげるよ？」

「だ、誰に行ってるの！」

「あんたにだってば。え～と、エロ川？」

「だから、その名で呼ぶなって…――――――！　あ～！山本センセ！！」

その声にふっと、目線をドアに向ければ、

「そ、そろそろ、午後の回診なんで…　すみません。お邪魔しました、深山さん！」

ぺこりと深山さんにだけお辞儀をして。

「「あ――――――！」」

――――――　逃げた！

逃げやがった。

おい！お前が当事者だろうが！！

「うん！もう！！！　折角捕まえ掛けたのに！！！　いい！？　あんた！罰として今日、あたしに付き合いなさい！！」

「はあ！？」

びしっ！と人差し指を突き付けて、思いっきり高らかにされた宣言にあっけにとられる。

「ちょ、ちょっと！　あんた、何言って…」

「仕事終わったら迎えに来るからね！　逃げんじゃないわよ！　良いわね！」

お邪魔しました！

それでも、しっかり深山さんには挨拶をして行ったのは、社会人として、上出来だとは思うけど…

「…なんなんですか…？」

え？　あたし、今晩あいつに付き合わなきゃなんないって事…？

「さあ、なんなのかしらねぇ」

独り言の様に漏れたあたしの言葉に、律儀に深山さんは応えてくれて。

「とりあえず、今日の残業は無しにしてあげるわね」

後で報告、よろしくね～

「深山さん…」

あたしはこの場合、良い上司を持ったって喜ぶべきなんでしょうか…？

言葉もなく突っ立っているあたしを置いて、深山さんは足音も軽く、午後の業務に出て行った。

その十二（後書き）

今回、同時更新。
また、新キャラです。私的には結構お気に入りのキャラなんで…
この後、結構出てきそうです。
次は、やっぱりノミュニケーションのシーンになりそうです。

閑話　神部有里という女（前書き）

思いあまっての番外。閑話休題です。
剛史からの視点で。

閑話　神部有里という女

――――――――　え～～っと…

「…今、なんて言った、お前…」

俺、山本剛史は例によって例のごとく、居酒屋のカウンターに腰かけて思わず落っことしかけた日本酒のグラスを寸での所で引き止める。

「え～～？だから、その兄弟が…」

「いや、其処じゃなくて！」

「は？　ドラマの話じゃなかったっけ？」

「いや！そうだけど！いや、そうじゃなくて！！」

問題は、其処じゃないだろう！！

「お前！どういう状況かわかってんのか！それ！！」

思いっきり、それこそ一瞬周囲が引くぐらい大声で喚き散らしても、こいつ――――――　有里はきょとんとした顔をして、こっちを見ているばかり。手に持ったビールのグラスは俺と違って微動だにしていない。

「…状況って…あんた、聞いてなかったの？　その時、その双子の兄弟は生きて再び出会えるかどうかの瀬戸際で…」

「誰が、一昔も前のメロドラマの筋書きなんぞ聞いてるか！！」

ああもう！！誰がそんなモノ、こんな必死な顔して聞いてるもんか

！！

「もう一度、聞くぞ…　お前、それ、そのビデオ、何処で、どうやって見たって言った…？」

本当は、恐ろしくて聞き返したくは無かったが…

「ああ、そこ？　言わなかったっけ？　大学一年の時、サークルの先輩の家で、先輩二人と一緒に見たの。あれ、古いドラマだから、ＶＴＲの機械持ってるの、先輩しか居なくって苦労したのよ～　たまたま、その先輩がコレクションの中に持っててね」

…やっぱり、聞き間違いじゃなかったんかい！

「……その時、その家に家族は居たんだよな…？」

「いや、先輩達下宿だから」

「で、その先輩ってのは女…」

「いんや、二人とも男」

ぴきっ！！

「ちなみに聞くが…それは昼間の事だよな…」

いや、昼だから良いってもんじゃないが！

「い～や。授業終わってからだったから…夜？」

よる！？

「七時くらいからだったかな～」

ななじ！？

「ああ、でも、ぶっ続けで見たから九時半には終わって帰った。見逃してた最後の部分だけ見せてもらっただけだから。終電前で良かったよ～」

「～～～～～～～～～！！！！！！！！」

――――よかーない！！

全然全く良くはない！！

声にならない叫びってのはきっとこう言うのを言うんだろう。

「そんなもん、絶対いい筈なかろうが！！」

「え～？なんで？　生き別れになってた兄弟が、お互いのわだかまりを捨てて、いざ手を取り合おうとした時に起きる悲劇！　あれは、今でも屈指の名場面って…」

「だから、誰がドラマの話なんぞしてる！　問題なのは、そこじゃねぇ！」

「え～～？　ドラマの話じゃないの？！　ここからが良いとこで…」

「だから！いい加減、そこから離れろ！このバカ！！」

ぜーっぜーっぜーっ…

息をからして喚き散らして、こっちは疲労困憊だってのに。

その原因の有里ときたらきょとんとしたままで、訳が解らないって顔して俺を見る。

解ってない…　いや、こいつ、マジに解ってない…！？

「お前、その頃幾つだ！　大学一年――――　一応は花の女子大生って奴だろうが！　仮にも女が夜の夜中に男の部屋で、男と二人っ

きりになるなんてありえねぇ！」
「いや、二人じゃなくて、三人…」
「女が一人しか居なかったら、二人だろうが三人だろうが状況は同じだ！！」
むしろ、悪い！
「バカか！お前は！　襲われたらどうするつもりだったんだ！」
「襲われる？」
「そう！」
「誰が？」
「お前が！」
「誰に？」
「そいつらに！」
「――――――　あ、ありえない～～～～～！！！！」
ぶはっ！！っと思いっきり噴き出して、バンバンと机を叩きだす。
「有りえない」って…　――――――　自分で言うか、このバカは…
「あのね～　あんたってば何考えてんの？　あたしだよ？あたし！そんな物好き、居る訳ないじゃん！！」
ひーひーと、息を切らせて机を叩き続けながら有里が言葉を紡いでいく。
おまえなぁ…　言うに事欠いて、物好きとはなんだ、物好きとは…
「自慢じゃないけど、あたしゃ今まで女扱いされた事、一度たりともありゃしませんからね。そん時も、自分でも女だって認識なかったしなぁ～」
「……」

「そういう考え、先輩に対して失礼じゃんか。その辺の見境のない男と一緒にするんじゃないよ、人の先輩を」
「……」
「先輩達にも選ぶ権利ってもんが有るんだかんね。な～に心配してんのよ。ばっかじゃない？　それとも何？　これまで、男の一人も居なかった事で、あたしにケンカ売ってる？」
「……」
…マジか…
心底真面目に言ってんのか、こいつ
「…襲われなかったのか…？」
「はあ？」
「何にもされなかったのか？お前…」
「…なんか、襲われないのが悪いみたいな言い方ね…」
殴っていい？
思いっきり目がマジだろうお前…
こいつのこの、のーてんきな様子からして、それだけは有り得なかったと踏んでるが。
――――――　そうか…変な目には会わなかったんだ。其処だけは思いっきり安堵して、顔も名前もしらないその先輩方に感謝する。よくぞ、このバカに手を出さないでいてくれたもんだ。まだ、一抹の不安は残るが、本人の口からの否定の言葉にホッとしている自分がいる。こういう場面で平然と嘘が付ける様なタイプじゃないのはわかってるから。
一瞬、見たくもない場面を想像して背筋が思いっきり凍ったことなど、絶対にこいつには言ってやったりなんかしない。此処までの無

自覚娘に何言ったって空しくなるだけだと解ってしまっている。
女扱い？　そんなもんをしなくても、こうして普通にバカ話が出来る貴重な女子に、友情以上の感情を持ってしまってさりげなくアタックしてた奴を俺は少なくとも二人は実際に知ってるぞ。それをいつも華麗にスルーしまくってたお前が何を言う。もしかして、全然わかってないのか？と思っていたら――――　やっぱり、わかって無かったな…

こいつ――――　俺の幼馴染にして、親友の妹、さらにこの四月から、目出度く同じ職場に勤める同僚としての立場も手に入れた二つ年下の栄養士、神部有里。
気風が良くて姉御肌で、身長ばっか高いくせに笑うと子供みたいに無邪気な女。

昔っから変なトラブルばっかり寄せ付けて、その癖いつも何もなかったかの様にスルーして。
俺は、いつも心配で心配で気が狂いそうで、でも身内でも同級でもない俺はいつも何もしてやれなくて。

そんな自分が認められなくて、いっつもからかって怒鳴り返すこいつの顔に安心していた。

けれど、なんでこんなにこいつの事が気になるのか、その頃もっともっとガキだった俺は長い間理解できず、傍に居るとあんまりにもイライラするから、いっそ忘れてやろうと思って親の意見をすっ飛ばして遠くの地方の大学受けて。
ずっとずっと忘れたくて、こいつを俺の中から追い出したくて、六年間、こいつから思いっきり離れたトコでしたくもない勉強三昧の

生活を送り（言いたくないが、医学部行ってて、遊んでられる奴は本気で医者になる気がないか、真の天才かのどっちかだ！！）さらにダメ押しで二年――――　研修医としての勤務地も思いっきりここから離れた場所でいそしんできたってのに。

最後に勤務地を決める時、もう大丈夫だろうと思って募集の掛っていた地元の病院も一応見ておこうと思って足を運んで…
廊下の向こうで患者と談笑している白衣姿のこいつを垣間見て、落っこちた。
そうさ！　かろうじて引っかかってた穴の淵からものの見事に落っこちたのは何を隠そう俺なんだ！
ああ！そうだよ！悪かったな！！
その時まで、何の自覚もしなかった俺が悪い。
悪いが――――――　自覚した途端、歯止めが効かなくなっていた。

面接で院長の前に出た途端、堰を切った様にこの病院に勤務する事を熱心に希望し、条件も案件も全てふっ飛ばして内定を取りつけ、その他の様々な事務処理すらも、その日のうちに書類一式持ち帰る程の勢いで実家に飛んで帰り、その足で家族と祐樹にぶちまけた。
此処に還ってくる事を。
あんまりの俺の勢いに、ついでの様に帰ってくる本当の理由まで、しっかりくっきり洗いざらい吐かされてしまったが、自分の気持ちを自覚した俺にはもう言い逃れをするつもりも、そんな余裕も有りはしなかった。

とっ捕まえる。逃がすもんか。
こうなったら、十年分だ。覚悟しやがれ、こんちくしょー！――――
――――　ってのがその時の俺の偽らざる本音で有って。
「まあ、がんばれや」　お前なら、持ってって良いぞ～と、祐樹はあんまりお陰の無さそうな応援を一応俺にしてくれた。「趣味が悪

いな」の一言付きで。

ダメ押しの様に、俺の就職に関しては、知ってるやつ全てに緘口令を引いといた。これまでの事を考えると、これは本当に適切な処置だったと思う。

有里の事だ。逃げやしないと思うが、隠れられたらやっかいだから。

思った通り、職場での初顔合わせのその途端、俺の顔を見て文字通り目の玉飛び出るほどに驚いて、無意識にまわれ右しかけた事はこの際だから忘れてやろう。自覚した俺は寛大なんだ。惚れてしまえばあばたも笑窪（えくぼ）。意地っ張りなトコも、可愛げのないトコも、あまりに昔と変わらないままで――――　かえって一層惚れ直したなんて、絶対言ってやらないけどな。

性根据えて、一から口説こうと思った。

まずは、俺と言う人間をしっかり認識してもらう所から始めて行こうって。

…しかし　…しかし、だ。

余りにも変わらなさ過ぎて、ついつい昔と同じ受け答えをして、毎回毎回怒鳴りあいって事態になるなんて。

おまけに、此処まで人を振り回しておいて、この本人の自覚の無さは何なんだ！

「――――――　おまえ、自分の事、女だと思ってないだろ」

「失礼ね！　あたしにだって、胸も生理もあるんだから！」

「～～～～！！！！」

――――――　だから！

「大声で、そーゆー事を言うんじゃねぇ！！」

思わず見渡した周囲の奴らは、客も従業員も既に我関せずを貫いてこっちをスルーしてくれている。
ありがたい…ありがたいが…
それ以前に、なんか、間違ってるだろう！お前！！

この店に通う様になってもう半年。馴染みの店主もアルバイトの兄ちゃんも、何度か顔を合わせた事のある馴染みの客も、きっともう、その辺の奴ら全部に俺の気持ちはもろバレだろうに。
唯一人。
一番に通じて欲しい奴にだけ、いつまで経っても通じない。

「…有里…」
「あん？」
「お前、もう、女やめろ…」

ここまで、鈍い奴に、女なんて名乗る資格はありゃしねぇ。

「なんですって～～～～！！！」

途端に、ぎゃんぎゃんと突っかかって来る有里をいなしながら、見えない所で俺は大きく溜息を吐く。

意地っ張りで、可愛げが無くて、身長ばっか高いくせに子供みたいに無邪気に笑う。
鈍くて、バカで、お人よしで。ずっといつまでも変わらない。
だから、俺も変われない。

「きっと…」
「はん？」
「いや、なんでもねぇよ」

何でも無い…当り前の事を、もう一度再確認してしまっただけだ。

きっと。
きっと、俺は。
俺はたとえお前が女でなかったとしても。

――――――とっ捕まってただろうな…

必ず、お前に。

本当に、絶対言ってなんかやらないけれど。

閑話　神部有里という女（後書き）

煮詰まって、書けない余りの閑話休題。
少し視点を変えて、山本剛史センセの視点から。
有里ってこんな子なんだと思っていただければ…
ノミュニケーションは次の回で。もうしばらく、現実のお話ですがよろしくお付き合いください。

その十三　－1（前書き）

またしても分割です。
でも、今回は見直す時間が無くて日もまたぎます。

その十三　－1

さて、とりあえず。

「とりあえず、ビール！」

居酒屋でのこの第一声はもはや定番ではないだろうか。
そこに突っ込みを入れてくるのは、今日初めて一緒に飲む羽目になった元同級生。

「それはビールに対して失礼でしょう？　ビールであれ何であれ、好きで飲んであげなきゃ失礼ってもんじゃないの？」
「じゃあ、あんたはなんにすんのよ」
「とりあえず、ビール」
「同じかい！」

いや、こんな所でノリ突っ込みをしている場合じゃないのだが。

深山さんの宣言通りに残業を回避させられたあたしを関係者出入り口で待ち伏せし、さっさと此処へ連れ込んだこのお姉さんは、いまいち状況に適応しきれていないあたしを後目に、メニューを思いっきり広げてそれの吟味に入る。

「焼き鳥と～枝豆と～唐揚げ…　あんたは？」
「焼き鳥追加。ほっけと煮付け…今日は何？」
「石鯛って書いてある」
「じゃあ、それ」

こう言う時のノリは、女同士だと例え親しくなくても一緒なのだろ

うか？
まあ、最初っから猫を捨ててかかる気まんまんだからね、あたしは。
もしかして、そっちも同じ考えなのかい？

「……しっかし、あんた…その格好…」

小汚いとは言わないが、結構年代染みている行きつけの居酒屋のカウンターで、あたしの横に座っているのは、まんまどこぞのエロゲーですか？と突っ込みたくなるようなピッチピチのお洋服をお召しになったボン、キュ、ボンのお姉さん――――――　エロ川こと、平川――――　なんてったっけ…？
いかんいかん…また、名前覚えきれなかった。

これってば本当に直したいあたしの欠点の第一位――――――　とにかく顔覚えが悪いんだ、あたしは。
ダメなんだよね～　人の名前とか顔とか覚えるの苦手でさ～。
絶対営業職には就けないねって昔から言われ続けてきたくらいなんだけど、どうやっても、やっぱり一回や二回じゃ覚えらんない。顔だけ～とか、名前だけ～とか、入れ違いに覚えて呆れられた事だって一回や二回じゃないからね、自慢じゃないけど。
こうして曲がりなりにも社会人である以上、職場でのお付き合いは決して無視できないものじゃない。大事な取引先とかにも失礼ぶっこいちゃうから、出来れば何とかしたいんだけど。

剛史敵前逃亡事件は今日の昼休みの事だから（ああ、なんだって中身の濃い一日なんだろう）この、ミニスカートのおねーさんに確保されてたまま此処へ連行されてきたって事は、また晩御飯ドタキャンじゃないか。さっきかろうじてメールだけは打っといたけど、またおふくろさんの愚痴を聞かなきゃなんなくなるだろうな～
基本放任主義の母親だけど、予定調和を崩されることが耐えらんな

いタイプだから――――――　こう言う土壇場でのキャンセルは後が怖いんだって、あの人は。今さら言ってもしょうがないけど。

おまけに、また、愛用のバイクは病院にて放置かい…　此処まで来て、呑まずには帰るなんてばからしいし。…明日、どうしよう。こうなったら、歩くっきゃないかな。

この頃、妙にこのパターンが多くないっすか？　あたしの周囲。まあ、此処で呑むのは嫌いじゃないんで、良しとしますけどね。

「――――　なによ。なんか文句ある？」

思わず隣を恨めしげに見て、溜息の一つも付いて見せれば、すかさずつっけんどんな言葉が降ってくる。

反応は鈍くないね、おねーさん。

「いえ、文句なんて一つも有りませんが…　周りの視線が痛くない？」

普段、ジーンズにTシャツとか、くたびれたスーツとかのお客しか入らない様なカウンターに妙齢の思いっきり色っぽい女が一人――――　この際、あたしは彼らの眼中には絶対入ってないと断言してやるが。

「有名税よ有名税。スタイルが良過ぎるのも困ったものね～」

うわ～～っ！　そんな事言いながら、足、組みかえるな！足！下着ちゃんと着けてても、思わずドキッとかしちまうでしょうが！…昔、こーゆー映画、なかったっけ？　あんときゃ確か、あの女優ノーパンだったって評判に――――――　いやいや、そうじゃない！

こんな場所で女のあたしでも赤面する様な行動を取るな！　身の

置き所に困るじゃないか！

綺麗なおねーさんも、色っぽいお姉さんも、あたしは結構大好きだけどさ。

それはあくまで、見てる分。遠くから拝察するくらいがちょうどいいんだよ。あくまで遠くからね。

出来ればこんな真横に来ていただきたくない。ううっ…やっぱり早まった…

「…んで、なに？」

「は？」

「わざわざ、あたしを此処に連れてきたって事はなんか、用事が有るんでしょうが」

こうなりゃさっさと用件済ませて帰るに限る。

「あら、わかる？」

「それぐらい、わからいでか。何の御用ですか？エロ川さん」

「…ちょっと待って。その前に、その呼び方をどうにかしなさいよ。不愉快だわ」

「え？　呼び方って…エロ川？」

「そう！それ！普通、そんな呼び方されて喜ぶ女が居るとでも？」

それは確かにそうだけんども。

「……あんたから、普通って言葉が出ると思わなかった…」

おまけにその顔。本気で嫌がってんのが丸わかり。え～と、これは、噂と随分違う様な…

「失礼ね！かえすがえすも失礼ね！　まったくなによ！ゆりの分際で！」
「ちょっと待て。分際ってなんだ？分際って。あたしもあんたに、いきなり呼び捨てにされる覚えはこれっぽっちもありませんが」
「呼び捨てが何よ！　呼び捨てが！大体あんた、昔から『ゆり』って呼ばれてたじゃない！」
「それは、極々親しい奴らだけ」

基本あたしは、名前呼ばれんの実は好きくないからね。

「あんたに、呼び捨ての許可を出した覚えは無い」
「あたしだって、同じよ！　すっごいむかつく！」

その声音の忌々しさに少し驚く。あの当時、確かにそれほど親しくは無かったが、このあだ名を本気で嫌がってたとの印象が、あたしには無かった筈なんだか。

「…もしかして、ほんとはすんごく嫌だった？」
「もしかしなくても、いやだった」
「…そんな風にはお見受けしなかったんだけど…」
「普通に考えて、『エロ川』なんて呼ばれて喜ぶ女の子がいると思う？」
「…思いません」
「だったら、わかるでしょ！」
「…それは、なんとも申し訳ない…」

まずいな～。確かに配慮に欠けちまったか。

――――　そうか、嫌だったんだ。

高校の時、あったり前の様にそう呼ばれてたから、本人も納得してんのかと思ってたんだが。

「あれはね、開き直りよ。開き直り！　何しろ、このナイスバディでしょ？　制服着てても、変に目立っちゃうし、隠そうと思うとかえってバランスが崩れんのよ。そうなるといやらしいエロになっちゃうの！　かえって開き直っちゃうと、健康的なエロになんのよ。その方が建設的まだましってもんでしょ？」

…いや、傍から見たら、しっかりその方面で自己主張してるように見えましたぜ、旦那。男子連中は目の色変えてたし、女子からは嫉妬の嵐…

――――――　そうか～　確かに嫌だよな～

あたしが考えても、それはけっして愉快な状況では有り得ない。

その中を開き直ってきたこの方ってば、実はとっても凄いんではないだろうか。そう思ったあたしは自然に彼女に頭を下げる。

「知らなかったとはいえまことに申し訳ない事をした。今後はしっかり善処させていただこう。…んで、どうお呼びすれば良いのかね？」

「…名字でいいじゃない」

「名字ねぇ～　エ…もとい、平川…さん？でいいのかな？」

「…なんで、そこ、語尾が上がるの…」

「だって、今までの口の慣れってもんが有るからさ。どうしてもエ…平川さんってつまっちゃうんだよね」

あはは～…　なんて、笑ってごまかしてしまおう。悪いけど絶対あたし、これからも、エ…で詰まる。断言できる。

「あぁもう！わかったわよ！じゃあ、名前！名前で読んでいいから！」
「名前？」
「そう！　そうしたら、混同しないんでしょ！？」
「……ちなみにお名前は何とおっしゃいましたっけ…？」

なんで、あたしのハードル上げんの？

「忘れたの？今日の話よ？！忘れたの？忘れたのね！？」
「…すみません…忘れました…」
「まゆみ！　平川真由美！まは真実の真にゆは自由の由！みは美しいの美、よ！　わかった！？」
「わ、わかった。ま、真由美さん、で良いのかな？『さん』付けいる？」
「そこは結構。同級だしね、呼び捨てで良いわ」

ありがたく思いなさい！
つん！と顔をそっぽ向けるエロ川…もとい、真由美の顔は、あれれ…少し赤い？え？照れてる？
名前呼ぶだけでてれるって…もしかして、可愛い性格とか…

「んじゃ、あたしも有里。有里で良いよ。有り無しの有りに、里と書いて有里」
「え？」
「一方通行じゃ、申し訳ないしね。そんじゃ、これからよろしくね、真由美」
「…こちらこそ…」

もごもごもご…と、何か呟いているのが気にはなったが。

まだまだ、赤みが取れてないほっぺた見てたら何だか笑いたくなってきた。

「…何笑ってんのよ…」
「いや～別に」

これは楽しい誤算かも。

「――――――　ともかく！　話戻すわよ！　あたしが聞きたいのはね！」
「あ、ちょっと待て。飯が来た。ああ、すみません。おにぎりも追加で二つ。――――――　とりあえず、食べない？」
「あ、あのね！」
「腹が減ってはなんとやら。きちんと話は聞くからさ～　あたし、お腹減ってると、聞いたことすっかり忘れちゃったりすんのよね。まずは腹ごしらえ…ＯＫ？」
「…おーけー…」

うんうん、いい子だね～
そう言う聞きわけの良い子は、あたしゃ大好きだよ～

その十三　－1（後書き）

とりあえず今日は前半のみ。明日、がんばって後半を…更新する予定です。
もがいた挙句の本当の不定期更新。
この回が終わっても多分しばらくは不定期になりそうで…なんとか、最後まで、持っていけるように頑張ります。ム、ムラが有りすぎる…

その十三　―2（前書き）

はい。予告通り続きです。

その十三　―2

真面目にお腹は減っている。
もう既に、待ったなしって感じまで。

小難しい話はね～　腹ごしらえのその後。さ～て、「いっただきま～す！」――――――　はい。ご挨拶は忘れずに。

ビールも手っ取り早く来て、なんとなく二人で乾杯なんかまでやっちゃって、其処からはただひたすら、もそもそもそもそ、自分の食欲を満たすことに終始する。

「あ！このつくね美味しい…　ちょっとはまりそう」
「ああ、それ？　隠し味にしそが入ってんだよね。あたしも好物…　一つ頂戴」
「一つだけよ。じゃあ、代わりにその煮付けの味見させて」
「これ？　いいよ。食べてみ」
「ん…　う…思ったより食べやすいかも…　あたし、魚苦手だったけど、これならいけそう」
「正直に美味いって言ってみな。天下の石鯛様だぞ。ここのオーナー、魚料理にかけては、ここらへんじゃ右に出るもの居ないんだからね」
「病院の御用達ってのもわかるわ～　近いし安いし、美味しいし…　此処にして良かった」
「此処にしてくれてよかったよ。変なバーとかに連れ込まれたらどうしようかと思った」
「何気に失礼ね」
「いや、思ったまんまだけど」

もぎゅもぎゅもぎゅ…

食べるって行為は、人と人の垣根を少し下げる効果が有るのかもしれない。ついでにそこに適量のお酒が有ればなおさらね。

あたしは基本的に、食べてる時あたしを不快にさせない人間は無条件で好きになる。その定義に従って行けば、思いもかけずこいつってば合格ライン。あたしは、ご飯を美味しそうに幸せそうに食べる人は大好きだ。

「…しっかし、あんた、結構量いけるのね～　ダイエットとかって目の色変えそうなタイプなのに」

「それなりには気を使うけど…　食べる分は運動で消費するようにしてる。この体型維持するの、それなりに気を使ってんのよ」

「いや、気を使ってもらわないと困る。何にもしないでそのナイスバディって言ったら、あたしたち、普通の女の立つ瀬がない――ちなみに、バストのサイズ、聞いていい？」

「…男だったら思いっきりセクハラ発言よ、それ」

「いや、男でも女でも、気になりますでしょう」

「…７０のＥ」

うわっ…やられた…

流石と言うか何と言うか…

「お返しに聞いてあげる、あんたのサイズは？」

「…ノーコメント」

悪かったな。どうせ７５のＢだよ！　自分で話振っといてなんだが、こう言う時は話題を変えるに限る。

「――――　で？そろそろ本題にまいりませうか？」

「本題？」

「あたしへの御用件。一体何の御用でしょうか?真由美サン」

逃げたわね…

あからさまな非難はこの際こっちへ置いておこう。何と言われようとも、自慢できない事を答えるつもりはありませんぜ、おねーさん。

「あらたまって聞かれるとなんなんだけど…　この際だから、聞いとくわ」

はい。なんでしょう。

「有里って、山本センセと付き合ってんの?」

――――――　は?

なんて、おっしゃいました…?

「…え~と、どう言う事でしょう…?」

なんだか、同じ様なセリフをどっかで聞いた様な気もするが…

「どう言うって言葉通り。山本先生はあんたの彼氏かって聞いてるの」

「~~~~~~!!」

本日、二度目の撃沈。

「あ…、あ…、ありえないだろう!それ!!」

今日は何?　なんかの厄日なのか!?

「え？違うの？そうだって聞いたから一応確認をと思って」
「何の確認だ、それ！…って言うか、いったい病棟での会話はどうなってるんだ！」

たしか、これって今日の昼休みにもお聞きしましたよね。ええ。たしか深山さんから、ああもうはっきりと！

「ない！ぜ～ったいにない！金輪際ない！何が起こってもありえない！」
「…おっそろしいまでの否定形だけど、もっぱら病院では評判よ？あんたとセンセが付き合ってるって」
「どこがどうしたらそうなる！」
「だって、良く一緒に呑みに行ってるって」
「弱みに付け込まれておごらされてるだけだ！」

実際は一度もおごった事無いけど。

「よくしゃべってるって」
「どつきあいの口げんかだろうが！」
「名前で呼び合ってるし」
「腐れ縁！　もう十年来の知り合いなんだから仕方なかろうが！」

ぜーぜーぜー…

「奴はね、あたしの兄貴の友達なの！　おかげでもう十何年もしたくもないのに顔突き合わせてんの！　あれは、天敵！　そう！あたしにとっちゃ、紛れもない天敵だかんね！！」

良く言えば腐れ縁。悪く言えば――――――　もう、これ以上有り得

ないくらいの天敵さん。マジ、これ決定。

ああ…もう！何処をどうとったら、そんな話になるんだか…

あたしの平穏を、返せ！　あのバカ！

「――――――　じゃあ、狙ってもいい？」

「はい？」

「あたしが、おとしても良い？」

真顔で、真由美があたしを覗き込んでくる。うわ…

「止めれ…　あんたのアップは女でも落ちそう…」

「うふん。ありがと」

一応褒め言葉と取っておくわ――――――　な～んて、にっこり笑ったお顔がなんか怖いですよ、真由美サン。

初めて、剛史を真正面から狙ってくる肉食女子を拝見しました。

ちろ…っと赤い舌がグロスを塗った口もとから覗いて…

エ、エロいよ！！　マジ、エロい！　流石、エロ川！　絶対に言わないけど――――――　君は凄い！

「まあ、せいぜいがんばって」

どうせ他人事。

「…というか、剛史ってそんなに魅力的？」

あたしはそうは思わないんだけどな～

なんて事が、思わずぽろっと口から零れ出る。その途端、猛烈な勢いで反論を浴びせられた。

「何言ってんの！あの身長、高学歴に高収入！使い古しだけど三高のそのトップに君臨するお医者様よ！　狙わなくってどうするの！」
「…その分、悪食の毒舌家だけど」
「ノープロブレム！そんなもん許容範囲の内でしょう！」

――――――　あ、そーですか…
そーゆーもんなんでしょうか？世の中は。

あいつの性格とか、嗜好とかってのはこの際あんまりかんけーないのんか？
それはそれで、なんとなく、腑に落ちないと言うか、納得いかない様な気もするんだが…

「…でもさ～」

一応、思いついたから言っておこう。

「あれ落とすんなら、あんた少し方向性間違ってるような気がするんだけど…」

――――――　なんでだろ。
言うつもりの無かったこんな事が、思わず口から飛び出した。

「剛史のね～　女の趣味って、あんたみたいなタイプじゃない様な気がすんだけど」
「え？なに？そうなの？何で知ってんの？」
「いや、実際に聞いた訳じゃないけどさ」

口に出してからびっくりする。

こんな事に口をはさむつもりはこれまで全くなかったと言うのに。

「あいつ、兄貴の友達だって言ったじゃん。どうも、似てるらしいんだよね、趣味とか好みとか…」

「だから?」

「だから、えっと、あの…」

うわ…

ヤバい。これ言うつもりなかったんだけど。

「何よ。はっきり言いなさいよ」

此処まで来たら誤魔化しなんて、無しだからね――――――　はい、ごもっともです。

ううう…　近来まれにみる失言だぞ、あたしってば。

「…あのさ。間違ってたらごめんだけど」

こうなったら、洗いざらい言っちゃうよ。

「あたしらが中一の時、当時中三だった神部祐樹――――　あたしの兄貴、追っかけまわしてた東中の平川ってあんたのことでしょ?」

「～～～～～!??」

途端に、真っ赤になって慌てふためく真由美の顔に溜息一つ。

…ああ、やっぱし図星でしたか。世の中って、ホントに狭い。

「な、な、な…　何で知ってんの!」

「いや、あん時、ウチの兄貴、マジ、本気で逃げ回ってからねぇ～　実はとっても良く知っている」

それこそ、あんたが知らない様な事までね。

兄貴が中三になったばかりの5月ごろだったかな。それから、だいたい半年余り。これでもかってくらい追いかけまわしてくれたって話を、実はあたしは剛史から聞いてんだよね。

元々そう言う恋愛関係に全く免疫が無く、思いっきり疎かった兄貴にとって、それは嫌がらせ以外の何物でもなかったって事は…やっぱり流石に言えないか…

兄貴ってばあの時、ノイローゼ一歩手前まで行っちゃってたんだよね。これも絶対言えないけど。

「あんたが『ゆり』って呼んだ時に確信したんだけど。別の中学行ってて、あたしの名前知ってるのって、兄貴関係ぐらいしか思いつかないし」

訥々と、一応言葉を選びながら言ってみる――――　あれれ？　真由美さんてば顔真っ赤。

ううん…　流石に恥ずかしい過去だよな～、これって。

「まあまあ…古い話だし…　ごめんね～古傷抉っちゃって」

きっと、真由美にとっても若かりし頃の暴走って事で、収まってるんだろうから、この場でこれ以上追及しようとは思わない。いや、兄貴にしてみたら、また違う感慨が有るだろうけどさ。

しみじみ一人で、過去の感慨に浸っていたら、やがてポツンと真由美が呟いた。

「……ゆうきさん、元気？」

「へ？」
「…えっと、その…神部さん…今、その…」
「ああ、兄貴？」

少しは悪いと思ってるんだろうな～、これって。
あたしは、少し安心して、聞かれた事に答えて行く。

「兄貴はまだ一緒に住んでる…って言うか、あたしら二人とも、まだ実家に居るし。今はね～なんか、高校の教師なんてやってる。専攻は理科。若い女の子に囲まれてる癖に、年中モテナイって騒いでてさ～」

あはは…
との笑いに、真由美は乗ってこなくって。

あの、すみません。何かしゃべって頂けませんか？
何となく、場が持たないんですけれど…

ごほん。と咳払い一つして、あたしは本来の話題に返る事にする。
今話してんのは、兄貴の事じゃない。剛史の事、剛史の事…　どうやら、真由美の聞きたい事もそれだったようだから。

「――――　ともかく。あの二人の趣味って似てんのよ、どうやら。どっちかって言うとあんたみたく『女』って感じじゃなくてさ。どういうのかな～こう…清楚？とか、つつましやかとかそっち系が好みみたいよ」

正面切って聞いた事無いけど。

「……」

…あの、そんなに本気で考え込まれても困るんだけど。

「ま、まあ？　あたしが言うのもなんだけど、あんた本当に美人だし、色気も有り余るほどあるから…　え～と、剛史は、うん。剛史はね、落ちるかも」

兄貴は無理だけど。

ええ、これも関係ないから口には出さないで心の中で言ってみる。

実は此処だけの話、うちの兄貴がモテナイのは、さりげないアプローチって奴に免疫がなさすぎるせいだとあたしは常々思ってる。そのトラウマの原因が、何を隠そうここにいらっしゃるこのおねーさんの余りにも強引なアプローチの所為だってのは――――――　やっぱり言わない方が良いだろう。

さりげなく少しだけ強引な女の子じゃないと…って、あんたは何処の乙女だって兄貴に突っ込んでしまったのは一回や二回じゃない。理想のタイプが某ラ〇プラスの姉〇寧々さんだってことも――――――　絶対言っちゃいけないよね、これ。

「ま、まあ、とりあえず呑もうか」

「う、うん。そーねー、つきあったげる」

「日本酒イケる？」

「ばっちり」

すみませ～ん、追加おねがいしま～す。

大声で、馴染みのバイトのにーちゃんに声をかける。

なんだかな～――――――――　なんだか、言っちゃいけない事とか、聞いちゃいけない事とか、一杯言っちゃったり、聞いちゃったりし

たみたいな？

「と、とにかく、呑もう！」

「賛成！」

呑んで忘れよう！――――って、出来る訳ないけどさ。

なんとなくなんとなく。

何かが動いた気がする夜だった。

その十三　－2（後書き）

無事、仕上がりました。更新成功！――――　よ、よかった、出来た…

文字数を見てみたら、分けて正解…　すんごく長かった。

次は夢…かなあ…　もう、出たとこ勝負です。宜しくお願い致します。

その十四（前書き）

お久しぶりの更新です。
今回、会話が少なめですが、良ければ我慢して読んでやってください。

その十四

馬は良い。
きちんと愛情を込めて世話をすれば、必ずそれに応えてくれる。
だから、昔から馬の世話は苦にならなかった――――――――　とは、ユーリーの心の声。

今、ユーリーとあたしは、職場兼住居である第一騎士団の隊舎の厩（うまや）に居る。
いつものように――――――――　あたしは、また、夢の中。

前にも言ったことあるかもしれないけど、厩の番をしてくれてる厩番のじいさん（なんていったら怒られるけど）の補助的な役割を勤めるのも、見習いたるユーリーの大事な仕事の一つだ。厩の番をする人間は、それこそ何人も此処で働いてはいるけれど、馬の世話なんて、人手がいくらあっても余る事なんてありゃしない。それこそやろうと思えば仕事など、いくらでも出てくるような環境だ。

此処に居る馬は、それぞれが持主たる騎士が誇る名だたる名馬ばかりであり、王宮の――――　それこそ、王家の厩にも匹敵するほどの規模と威容を誇っている。それを、一手に引き受けて采配しているじいさん（名前？そんなもの忘れちゃった。だって、本人は『長』と呼んでくれって言ってるし、あたしは『じいさん』で通してるもん）は、この厩の中では、誰よりも偉い人なんである――――――
それこそ、騎士とはいえたかだか見習いでしか無いユーリーなど、顎で使ってしまえる程に。

ま、それも当り前か。

こっちの世界には、電車も自動車も、もちろん自転車すらも無いからね。移動は馬か馬車。そうでなければ徒歩。歩くしかないのだ自分の足で。

それを実感した時は、この世界の人の丈夫さに思わず脱帽いたしました。

だって、ただ歩くんだよ。何処に行くにも、ひたすら自分の足だけで。

ユーリーに初めてそれを実践された時、あたしは自分の体力を使った訳でもないのに、精も根もつき果てた思いがしたもんだ。だって、半日以上歩き続けて、それが当り前って状態で。

確かに疲れちゃいるけれど、そうしなければ目的地なんかには着かないから至極当然といった状態で。一日だけの遠足とかじゃなくってね。ただ、何処かへ着く為だけに、歩く。歩く歩く…そうよ！歩く事って、実は紛れもなく移動の手段だったんだわって、思いっきり教えてくれちゃった。

この時ばかりは『負けた…』と思っちゃったもんね。いつもは、あたしの方が保護者みたいな気持ちでユーリーの中に居たからさ。結構マジに悔しかった事を思い出す。

せめて、自転車があればな～なんて、本当に切実に思ってしまった事を思い出す。――――　自転車の原理って、結構あたしなんかでも解りそうな気がしない？

実は、なんとかしてこっちで造れないかと真面目に考えちゃったりしたんですよ、わたくしは。だって、絶対便利だと思わない？！自動車とか電車とかそんな複雑怪奇なのは、流石にあたしの頭じゃはなっから理解するのは無理だとは思うけど、自転車ぐらいならなんとかなりそう…

なんて考えて、我に返ってちょっと待て。
出来る出来ない言う前に、原理の理解の言う前に！
『誰が、どうやって、造んのさ！』――――――と思わず自分で自分に突っ込んでしまいました、その時は。

な～に忘れてんだか、あたしってば。自転車を造るだの造らないだの言う前に、もっと大事な事がある。
そうですよ。そうなんです。
そもそもどうやって、それをする？　あたしは、此処に、居ないだろーが　実際には！！。

――――　忘れてやしませんか？神部さん。あたしは、こっちの世界では何ひとつ動かす事が出来ないんですよ？　物はおろか、人も気持ちも知識でさえ――――――　それこそ、こうしてお邪魔しているユーリーの夢、一つすら。

ああ、なんてもったいない……　とか、その時思ったあたしは罰あたり？
だって考えてもみてください。例え自転車であったとしても。あんな便利な乗用機械、こっちの世界で発明なんてしちゃったら。完全ではなくても、それらしいものが造れたら…

――――――　あたしってば、マジ、凄くない？　天才秀才、歴史に残ったりしませんか？

そんでもって造った自転車、アレクに見せたりなんかして、「これは便利だ」とかって認められたり褒められたりして。あんまり便利だからって、「大量生産出来ないか？」とかって相談されたりなんかして。

そうなったら、もう、工場とか作っちゃって、造り方とか皆に教えて『先生』なんてよばれちゃって。特許とかパテントとか登録商標とか独占して、教える代わりにその対価を払ってもらう事にして。自転車一台に付きいくら、とか。十台造ったら、これだけ、とか。そこまで行ったら、ほっておいても、あたしは見る見る国一番のお金持ち――――　……すみません。余りに即物的過ぎました。

これだからダメなんだよね～　世間ずれした大人って――――いや、駄目な大人はあたしだけか。

ともかくも、遠大な妄想の果てのあたしの大金持ち育成計画は、本当に頭の中での計画だけで頓挫致しました――――――　今思えば、あまりにばかばかしいけれど。

ともかく。

そんな事情の世界だから、馬ってものは今の日本からでは比べモノにならないくらい生活に密着している貴重で大事な生き物だ。特に、騎士とかって仕事は、本当に馬が無いと始まんないしキマらない。

向こうの現実世界で、ファンタジーとか戦記とか読んで、一応理解したつもりだったけど、やっぱり実際にそれを体感するのとは大違い。だから馬は、これ以上ないくらい大切にされているし、値段も高価だ。それこそ、あたしが現実の日本で見る、その辺の車なんかよりよっぽど重要だし、必要だ。

だから、見習いは馬の大切さを再認識する意味も込めて、しっかりその仕事の手伝いをさせられる、らしい。――――――　まあ、あたしが見る所、これって一つの試験みたいに思えるんだけど。

騎士が立派な騎士である為に――――――　自分を支えてくれている人々の力を知ること。ちゃんと、その事に感謝できること。正確に

は騎士の仕事ではないだろうこれらの事を、きちんと腐らずにやりとげる事が、ここに入団して良いと言う隠れた条件――――― って思うのは、あたしの穿ち過ぎかしら。

だって、ユーリーと一緒に見習いとして此処に来たのって、実は後二人ばかりいたんだけど、一か月もしないうちにさっさと別の部署に廻されちゃったりしてんのよ。ユーリー以上に、結構良いトコのお坊っちゃんたちだったのにさ。確かに、何かって言うとすぐサボってばっかしの役立たずのボンボンだったから、いない方が楽って言ったら楽なんだけど。

だから、今現在、第一騎士団で、見習いを続けてるのって実はユーリー唯一人。あたしが言うのもなんだけど、この子は働くことを骨惜しみしたりしないからね。時間はかかってもしっかりきちんとやる様に――――― って、これは故郷の母上様の口癖なんだけどさ。

いや～、実はあまりに良い子過ぎて、あたしだってこの子の中に入ってその感情まで共有してなかったら、思わずその性根を疑ってかかったりしてるかも。

でも、中に居るからこそわかる。
この子は、ただ、一生懸命なだけだって。

馬の世話に関しては、これはラッキーなんだよね。故郷の家に居る時から、馬の世話はユーリーの仕事だったんだもの。一応彼の家にも使用人は何人かいたけれど、主を失くした貧乏男爵家には、それこそ何人も厩番を雇う様な余裕なんて無かったから。

堅い布で馬の背を撫でているユーリーを、あたしは彼の中から彼の目線で眺めてる。
馬って、思ってた以上に綺麗な生き物なんだよね。こうして、傍で見るまで、思ってもみなかったけど。
つやつやと光る皮膚、なびく鬣。あっちの現実世界で、馬とこんなにも近くでお知り合いになる事って普通の生活してたら無いもんね。
慣れている所為で、ユーリーは馬を怖がらないし。怖がらなければ、馬の方でもユーリーに心を開いてくれているみたい。

結構賢いのよ、馬って。自分を嫌ってる人間や、怖がってる人間がすぐわかるんだもの。
あたしだって、最初はほんとに怖かった。思った以上に大きいし、言葉が通じる訳じゃないしね。
でも、流石の野生の本能も、ユーリーの中の規格外なあたしの存在までは気付かなかったみたい。慣れた仕草で接するユーリーに、ここに居る馬たちはあんまり苦労する事無く懐いていったし…
――――――って、気づかれたらそれはそれで大変じゃん。あたしってば、何言ってんだか。

「――――――ユーリー」

世話に没頭していたあたしたちは、不意にかけられた声にびっくりして振り返る。

「団長!!」

――――――アレク～～～～～～!!!!!

いきなりですか!?
いきなり、お目見え?!

厩の戸口、差し込む日の光りを背に受けて――――――　おお！！
絵になる！　カメラ！　カメラがどうしてここに無いの！！
お久しぶりだね、あたしのアレク。本当にお久しぶりでお顔を拝見出来たんだから、この程度のアゲアゲテンション、どうか大目に見て欲しい。
この場合、ユーリー本人のテンションもやっぱり上がってしまってるから、その勢いたるや二人前？
いいの！　だって、ユーリーもあたしも、『団長ＬＯＶＥ』なんだもん！

「お久しぶりです！　お元気でしたか？」

あれ？これってあたしの台詞じゃないよ？

「…お前に、そう言われるほど私は此処に居なかったか…？」
「ああ、はい！　いえ、あの…」

あらら…　そうか。馬に気を取られ過ぎたけど。

そうね。ユーリー自身もアレクと会うのは久しぶり…だね。さりげなく探った記憶の中にも、此処んトコ、隊舎でアレクをお見かけした記憶が無い。

「ここのところ、王宮に詰め切りだったからな。情けない…」

こんな事では、団長失格だな――――――　心底、がっくりと来ているアレクの様子に二人して驚くと同時に焦ってしまう――――――
―　と、あたしが思う前に、ユーリーが焦ったようにその口を開いていて。

「い、いえ！　第一団の団長は、団長以外にはありません！　たとえ、たとえいらっしゃらなくても、団長は、ここの、団長で！　僕…いえ、私は、団長がいらっしゃるからこそ、こうして此処でお世話になれて、凄く、嬉しいですし！　他のお仕事が大変なのはわかっていますから、長い間いらっしゃらなくても団長は団長で…！」

珍しい…

ポカンとした、アレクの顔があたしの視界に入る。

――――――　ユーリー、ユーリー。

いや、聞こえはしないだろうけど――――――　ごめん、突っ込んでいい？

舞い上がって、何言ってるか整理できてないよ、君。

プッ…っと小さく噴き出す音がしたとおもったら――――――　これまた珍しい…　アレクが声をあげて笑いだしている。

「ありがとうユーリー。持つべきものは、良く出来た従者だな」

――――――　うわ……

鏡を見た訳じゃないけれど、ユーリーの顔が思いっきり紅潮して行くのが感覚としてわかっちゃう。

今頃、きっと、真っ赤だね。言いたい事を整理して話すべきだとは思うけど、これ、掛け値無しのこの子の本音だし。

クックックッと、まだ笑い続けてるアレクの様子がなんだかすごく楽しそうだから、この際、あたし的には良しとしちゃおう。アレク

のこんな楽しそうな笑い顔なんて――――…眼福眼福。当分これで、あたしも楽しく暮らせそう。

「ユーリー、今、動かせる馬は有るか？」

「はい。団長の馬はどれでも大丈夫だと思いますが…　何処かへお出かけですか？」

真っ赤な顔のまま、そう答えたユーリーに決して他意は無かったんだよ。

「お出かけか…」

そうオウム返しに呟いたアレクの顔が、一瞬だけ何か企んでいそうに見えた…　なんてのは、きっとあたしの気の所為で…

「そうだな。たまにはそれも良いか」

「は？」

「そうだ。お前も一緒に来い」

「はい？」

「遠乗りだ。少し飛ばして来たくなった。ユーリー、付き合ってくれるな？」

「え？あの、団長？」

忙しいって言ってなかったっけ？　遠乗りって…そんなの行っちゃって大丈夫？

口に出さないあたしたちのそんな問いかけを解ってしまっている様に、アレクは彼にしては珍しい笑みを返してきた。

「たまには私が逃げても罰は当たるまい。馬には乗れるな？」

その、何処かいたずらっ子の様な微笑みに、あたしと――――――
そして、ユーリーが勝てる訳が無い。

「は、はい！」

あたしたちは思いっきり大きな声で返事をして、慌てて馬具置き場の方に駆けだした。

その十四（後書き）

やっとカメ…更新です。
ええ…　やっと、書けました。今回本当に会話があんまり無いんですが…　最後に、ちこっと出せましたので、次回、しゃべってもらおうと思ってます。　どうしてこう、説明文が入ってしまうのか…
おかげで、ＰＶ１０万アクセス突破いたしました。来て頂いている皆様、ありがとうございます。次は、もう少し早い目の更新を…頑張りたいです。

その十五

厩番のじいさんに許可を取り付けて――――――　まあ、アレクの言う事に、此処で逆らう人間はいないんだけどさ。アレクの乗るいつもの馬と、もう一頭――――　本来ならユーリーごときが乗っていいものかわからないぐらい立派なアレク所有の馬に鞍を置いて、外で待っているアレクの元へ引いて行く。

新緑の光りの中、木陰で待つアレクは本当に夢の中の王子様の様にキラキラで。

「ごくろうだったな、ユーリー」

ユーリーから手綱（たづな）を渡されるやいなや、アレクはひらりと軽々馬に飛び乗ってしまう。慌てて、ユーリーも手綱を握り締めて、もう一頭に飛びかかる様にして乗り込んだ。

あたしたちが鞍に腰を落ちつけたのを見届けて、アレクは自分の馬に鞭を当てる。

「行くぞ！　ついてこい！」

――――――　え？　いきなりのトップスピード！？

なに？ちょっと、いきなり、早いってば！！　心の準備…　うわおっ！

わたわたしているあたしなんかほっといて、ユーリーも掛け声とともに馬を駆った。ぐん…と身体が後ろに引きずられる様な感覚。それを押さえつける様に、ユーリーは馬の背に身体を伏せて手綱をきつく握り締める。

……う…速い……！　シャ、シャレになんないくらいに、速い！
いきなりこのスピードは……怖すぎます！　すみません！止めていただけませんか！？　ここに、初心者！初心者がいます！！っての！！

そんなあたしの叫びなんかやっぱり誰にも届かなくて。一瞬止まったのは、王宮の北の門の開門を頼む時だけ。後は、ただひたすらに走って走って…

ちょ、ちょっと待って！　なんなのよ、これ！　前を走るアレクに置いて行かれない様に、必死でユーリーは馬を操ってるんだけど。
ひえ～～～～！！！　た、たしか、馬って自動車より絶対遅い筈だよね！　百キロとか出てないよね？！なのに！

――――――　なに？　この速さ…！

体感速度が半端無く速過ぎる！
前に居る筈のアレクが、多分凄く飛ばしてるんだろうけど。
ついて行ってるって事？　このスピードで、ついてってるって事だよね！？
な、慣れてるね？　慣れてるよね？　慣れてるんだよね、ユーリー！？　君、こんな速くて大丈夫なの！？

手綱を握る彼の手に迷いが無いから、大丈夫、と信じたいが…　うわ～っ！　ひえ～～～！！速いよぉ！！　今まで馬に乗ったこと、無かった訳じゃないけどさ！　いっつも並足、速くったってギャロップ程度だったじゃない！　こんなん、聞いてないぞ！速過ぎる！
ふっと一瞬、前を走るアレクが振り向いて笑った様な気がしたけど、こっちはそんなもん見てる余裕なんぞない！

こんなスピードの馬になんか、乗った事無いんだもん！これ、下手なジェットコースターより怖いって！！

一生懸命馬を駆るユーリーの、その中であたしはさんざっぱらに叫び声を上げ続け――――――　どのくらい経ったかな…　いい加減あたしも、叫びつつけるのに飽きてきて。

――――――　人間、どんなことでも慣れるもんなのね。しかも、けっこう短時間で。

あたしが思ってたよりユーリーの手綱さばきは正確で、なんかこう、安心感みたいなもんまで出てきちゃって。

ユーリーに全て預ける感じであたしは身体の力を抜く。確かにこの子は馬好きで、小さい頃から田舎の野っぱらで、自分ちの馬、乗り回してたって事は記憶をたどってわかってはいたけれど。

思っていた以上に馬に慣れている。これは少なからずの驚きだ。馬も確かに良いんだろうけど、この子も思ってた以上にやるじゃんって感じ。

お陰で、あたしは少しだけ周囲を見渡す余裕が出てくる。あくまでも、ユーリーの視線の中に映るものだけだけど。

アスファルトなんて無い土埃の上がる道。雨上がりの碧の森。耳元を凄い勢いで通り過ぎて行く風。馬蹄の音が規則正しく耳を叩いて、目の前に、駿馬を駆る銀の髪。

――――――　…これは、結構気持ちいいかも。

視界は揺れるし、まだ少なからず怖いけど。

有体に言えば、バイクを思いっきりかっ飛ばしてるような感じ？

やった事無いからわかんないけどさ。

一種、何とも言えない爽快感が体全体を駆け巡る。
二頭の馬は、休むことなく走って走って…

一時間ぐらい走ったのかな…？
時計が無いからわかんないけど、ユーリーの感覚があたしにその事を告げてくれる頃、小高い丘を上り切った所でアレクが馬を止める。
それにならってユーリーも危なげなく馬を止めて、アレクの少し後ろに馬を寄せた。

「なかなか、上手いな」
「…ありがとう…ございます…」

でも、息が切れ気味なのは御愛嬌って事で。
ユーリーのその様子に、アレクは何故か凄く嬉しそうに微笑んでくれる。頑張ったって事だよね。うん。アレクが、認めてくれるぐらいには。凄いぞ、ユーリー！

あたしたちの息がようやく整いかけた頃、アレクの落ちついた声があたしたちを促す。

「――――――　見てみろ」

――――――　うわ……！

アレクが、手にした鞭で指し示したもの。それは色付いた麦の穂が見渡すかぎりに揺れる大地。
緩やかに傾斜を繰り返しながら、なだらかに何処までも続いて行く麦の波。ところどころに点在する森の碧は青く、こうして目にする

だけで、その大地の豊かさが解る。

「…こ、ここは…？」

「パンドア平原だ」

パンドア平原…？！　ここが？

ユーリーはおろか、あたしでさえ聞いたことが有るそれは、余りに有名なこの国の北方に広がる肥沃な大地の名。この国だけでなく、近隣諸国からも垂涎されるほどの一大穀倉地の事だ。

「初めて見るか？」

「は、はい！」

「素晴らしいものだろう。これが我が国の宝の一つだ」

淡々としたアレクの声に、思わずユーリーの身が引き締まる。

「我がスーベニアが、アランドア大陸一の国力を誇っていられるのは、国王陛下のそのお力に寄る所が確かに大きい。――――しかしそれを支えるのは、多くの民の食料を賄えるこの豊かな大地が有ってこそ」

「……」

「民を飢えさせて、どうしてその国が立ち行ける。この大地は、神が我らに与えた大いなる恩寵だ」

それが今、目の前に有る。

「この大地の向こうにイアニスがある」

手にした鞭で、アレクが指し示す彼方。

イアニス――――――　スーベニアの北方に位置する巨大な軍事国

家。昔から、色々な因縁でこの国の歴史に名を刻む隣国。どうしてもきな臭さを覚えるその名を、アレクがどうして此処で口にするのか。

「…取られる訳にはいかない」

此処を、渡す訳にはいかない。

「絶対に、だ」

「…団長…？」

強く――――――　アレクにしては珍しいその口調に、思わず端正なその顔を見返してしまう。いつもなら、日に透けて煙るようなその紫の瞳が、強く、意志を秘めて、遥かな何かを見晴るかす。めったに見せない、堅く引きしまったその表情は、何処かあたしたちをざわめかせる厳しさを其処に宿していて。

……何か、あった…？

何か、あたしの――――――　ユーリーの知らない所で、起こっているの？

こんな時は、ユーリーの目線でしかこの世界を知ることのできない自分が恨めしい。何が有っても、何が起こっていても、あたしたちはそれを知る様な立場には無いから。

……そう言えば、前もどっかで聞いたよね、イアニスって…

『イアニスの竜酒』

そうだ。前にガイが来た時の…

ツキン…

思い出して、少しだけ心臓が痛い。
あの日起こった出来事は、まだあたしの中に微かな棘となって残っている。

聞きたい。
アレクに聞きたい。
何を聞きたいのか解らないくらい聞きたいことは山ほどあって――
――――― でも、絶対に聞けなくて。

――――― あの…！

「…団長！」
「――――― どうした？」

どうした…？
聞き返されて、一瞬、この子の意識が白くなったのを感じる。

……ユーリー。

ユーリー。あなたは何を聞きたかったの？

その時のユーリーの心の中は面白いぐらいに何も無くて、無意識に言葉を発していたんだってあたしは状況を理解する。
無意識…　無意識？
確かに、この子は無意識だったけど。けれど、その中で、言葉を発しようとしていたのは――――

――――― まさか…

まさか、ね。
まさか、あたしの意思が、この子を動かす筈は無い。

「いえ、なんでも」
何でもありません。
「…おかしな奴だな。白昼夢でも見たのか？」
「いえ、あの…！」

微かに、笑いを含んだ様なアレクの声音に、ハッと、我に返ったユーリーの頬が、かーっと赤くなっていく。

「す、すみません…　僕…いえ、わたしは…えっと…」
「ああ、いい。何の予告も無く引っ張ってきたからな。悪かった。疲れたか？」
「いえ！　連れてきていただいて嬉しかったです！」

ありがとうございます！

そう、すんごく嬉しかった。あたしもユーリーも――――――　ほら、今、あたしはアレクと二人っきりだもの。
これって……デート…かな？　デート、だよね。
アレクはそのつもり全然ないだろうけど――――――　あ～…　…凄く、嬉しいかも。

「素晴らしい所ですね！」
「…ああ」
「がんばります！　もっと、がんばって、団長と一緒に、この国を守れるようになります！」

――――――　もう…　まったく…！

ユーリーってば、真っ直ぐ過ぎ。
自分の妄想に浮かれ切ってるおねーさんが、落ち込んでしまうではないの。
アレクも、一瞬だけ息を止めて。
その後、声を上げて楽しそうに笑いだした。

「期待していいな？」
「はい！」

何度目かの、それはユーリーとあたしがアレクに惚れ直した瞬間だった。

その十五（後書き）

なんとか、一週間以内に更新出来ました。
よかった、よかった…って、まだ終わってません。こっから先が長いです。
どこまで、このペースでいけるのか。
まだまだ、不定期のままだと思いますが、どうか気長にお付き合いください。

その十六（前書き）

もうしばらく、夢のお話が続きます。

その十六

目の前に大きな門。

あっと、これは…

前に、一度みた事が有る。これはシュロスの市街地の南に有る第二騎士団の隊舎の門。

えっと…――――――　って事は、今晩もこちらにお邪魔って事？

おお…！　二日ぶっ続けってのは珍しいかも。

ちょっとだけユーリーの記憶の中を探ってみる。……な～るほど。今日は、こちらへのお使いですか。はいはい。アレクからガイへの手紙を持って。珍しいわね、手紙なんて。ガイに必ず直接渡すようにって厳命付き。…って事は、密書とかって奴？　おお！これって凄く信頼されてるって事だよね。何時の間に…って言うか、凄いじゃん！

少し気合いをを入れて、もう少しユーリーの記憶を探ってみる。アレクと一緒に遠乗りに出てから…　そっか。五日ばかり経ってんのね。あの後、アレクとユーリーの帰還を見届けずにあたしはそのまま目覚めちゃったけど、どうやら無事に二人して帰ってきてたみたい。いや、帰らないと問題だから！

なになに…？　帰ったら、隊舎に宰相閣下がいらしてて、そのままアレクを王宮に拉致して行った…とな？

わっはっは。本当にお仕事から逃げてきてたんだ、アレクってば。

珍しいって言ったら珍しいけど、アレクのそんなトコ見れたのは、

これはこれで超ラッキーだったかも。

あの後、目覚めた現実世界でのあたしはと言えば、日曜日にありがたくも頂いた筈の貴重なお休みを、丸一日何故かかーさんの掃除に付き合わされる羽目に陥って疲労困憊ぐでぐで中。

かーさんってば、時々、思いだしたように掃除に目覚めんだよね、普段は呆れるほどに大雑把な癖してさ。その度、運悪く家に居たものはその大掃除の犠牲になるのが宿命で。

今日はあたししか居なかったから、もう大変だった。家中――――――

――それこそトイレから風呂場から廊下の隅の柱まで、文字通りピカピカに磨き上げるまで許してくれなくて、へとへとになったあげく夜九時にはもう寝ちゃったんだよ、あたしってば。

九時就寝って、どこぞの幼稚園児かい！って突っ込みたくなるけれど。疲れたんだよ！もう限界！

――――――――　でも、今回は早く寝て良かったな～～～！！

昨日から今日に掛けて、二夜連続。

アレクにガイ。イケメンのそろい踏みですな。

前にも言った事が有るけれど、二人とも本当にもの凄く忙しい人間だから、こっち来てても会えない事の方が当り前。お使いを頼んだ時のアレクには会いそびれたけれど、やった～～！！ガイに会えるよ～～～！！　おお！テンションアゲアゲ！！

――――――って、いえ、あの、そのですね。一応確認。あたしの本命はあくまでアレク、だかんね。

…でも、ガイもカッコいいんだもん！　やっぱり会えると嬉しいじゃん！！　このぐらいの役得は許容範囲だよ～！！　――――――

なんて、ユーリーの中であたしはただひたすらに自己弁護。だ～れも聞いてないっての！　でも、一応、自分自身にね。

門の所で番をしている騎士に用件を告げて、そのまま案内の人と一緒に中へ。

うわっ…此処の中は初めてかも…

石造りの強固な壁が、まるで要塞の様にぐるりとまわりを取り囲む。その中に有るのは、第一騎士団の隊舎に比べると簡素、剛健って感じの余り色のない建物。本当に質素な外観は名だたる騎士団の隊舎にしては余りに色が無さ過ぎる様な気もするけれど、その大きさは半端無い。まあ王宮の、その全体の大きさに比べると確かに小さいんだろうけど、一騎士団の隊舎としては、ユーリーが暮らす第一団に比べると遥かに大きい。

これはもう隊舎とかじゃなくて、一つの砦のレベルではないだろうか。流石、首都の防衛を一手に引き受けるだけの事はある。確かに人数も半端無く多いしね。市街地の中に入り切らないで、こんな外れに立ってるのもわかるな～。中心街にこんなもんあったら、大変だ。でも、確か駐屯地みたいなものがあちらこちらに有った筈。うんうん。ユーリーの持ってる知識に思わず大きく頷いちゃう。ちゃんと勉強してるね、えらい。

向こうに見えるだだっ広い広場は、いわゆる練兵場とかそんなもんかしら？　あんな広いトコに騎士が一斉に整列なんかしたら圧巻だろうな～　そのまんまどっかの映画のワンシーンって感じよね。

その騎士達を統率するのが、ガイ。――――――　う～～ん…　かっこいい…

確かガイってば、鎧や外套が黒で統一されてたよね。本人の黒目黒髪と相まって…

おお！　黒衣の騎士ってか？　……マ、マニア受けしそう――――――っと言うより、あたし受けしそうよ、それ！

ユーリーが物珍しそうにきょろきょろしてくれちゃうから、あたしも期せずしてあっちこっちをこの眼に収める事が出来る。君のその好奇心が実にありがたいわ、ユーリー君――――――　でも、仮にもお使いがそんなに落ちつきの無い態度でどうするよ。

「――――　どうした？　そんなに珍しい物でもあるのか？」

いきなり背後からかけられた声に、文字通り飛び上がる。

「ヒュ…ヒューバー、団長…？」

振り向いた回廊の柱の前で、クスクス笑っているのは…ガ、ガイ！？び、びっくりした～～～！！！何？なになになに？え？

この柱？　柱の影に隠れてたの？！

気配とかって無かったじゃん！！ってか、そんなもん気付くか！！

「どうした？　坊主がこんなトコ来るなんて珍しいな」

案内してくれた従僕――――――　ユーリーと違って、年配の穏やかそうなおじさんに目線を向けてガイが問う。

おじさんはきちんと、ユーリーがアレクからの親書を携えている事を伝えてくれて。

「…そうか。此処からは俺が連れて行く。ご苦労だったな、トマス」

そうか、トマスさんと言うのか。
トマスさんは、きちんとあたしたちにも退去の挨拶をして下がってくれる。
ユーリーが慌てて案内の礼を返すと、にこりと笑って今来た門の方へ帰っていく。

――――――流石(さすが)…

と言うか何と言うか。

こんな小僧っ子のユーリーにも、きちんと客人への対応をして、卑屈にならずにさりとてこんな凄いトコで働いてるからって傲慢にもならずに。

これって、きっとガイの目が、この隊舎の隅々団員の一人一人にまで行きわたってるからだろうね。
ユーリーが所属している第一団も、けっして目下の者を無下に扱ったりって事は無いんだけど、貴族により近く、王宮内に有るからこそ、あたしには見えているものもある。

騎士団の内部ではなく、その周囲に蔓延(はびこ)る、嫌なものが。

現在、唯一人の第一騎士団の従僕であるユーリーには、有形無形で向けられるものは確かに好意ばかりではないのだ、残念だけど。だから。

――――――凄いよ、ガイ…

この大所帯の中で、この雰囲気。

流石に、此処で団長を務めるだけの事はある。

「おい坊主！　……と、ユーリーだったか？　こっちだ」

「は、ハイ！」

ありがたくもかしこくも、団長直々のご案内ですよ。こ～れはレア！　ゆったりと歩くガイの後姿を見ながら歩くなんて…　――――――　ふっふっふっ…　昨夜に引き続き、今日もなんてついてるんだろう、あたしってば。

ガイは相変わらず黒っぽい服で全身を固めているけれど、王宮で見かける時より、その生地は慣れた感じで印象が柔らかい。いつもはきちっと上まで止めている胸元も、軽く鎖骨が見えるくらいまでくつろげてるし、いつも下げている剣だけが騎士だってことを教えてくれる。

これは…　ヤバい。

これは、別の意味でヤバいですよ。マジ、凄くカッコいい…

……だ～から！　元々の好みからしたら、あたしはガイ（こっち）にひっかかってもおかしくないんだもん。王子様系よりワイルド系？　ちょっとイケてるおじさまとかに弱かったんだって。

いかんいかん。此処で自分を見失わない様に。あたしが好きなのはアレク…アレク…アレク…

…って、何、お祈りしてんのあたしってば！

大丈夫。そんなことで揺らぐような気持ちじゃないもんね。でも、カッコいい物はカッコいいの！　どうせ相手に解る訳じゃないんだし…　いいじゃない！　もう、こうなったら目の保養！目一杯楽しんでしまおう。うん。

「――――　で？　アレクがなんだって？」

そうこうしている内に、奥に有る一つのドアをガイに開けてもらって（…だ～から、あんたは此処の団長だってのの！！）中に入り、さっさと奥の椅子に腰を下ろしたガイの前にたって、礼をする。

「…いちいち、そう改まんなくたって、かまわないぞ」
「いえ！　そう言う訳には！」

めんどくさそうなガイに、ユーリーが生真面目に返答する。
そうだよね～　さっき、従僕の鏡みたいな人にお手本見せてもらっちゃったもんね。

「コールター団長から、ヒューバー団長へ。確かにお渡しいたします。詳細は中に」

大事に懐へしまいこんでいた封書を差し出す。
おもむろに受け取って封を破り、中の紙を取り出して読んでいくガイの眉が一瞬だけ動く。

「――――――　で？」

――――――　で？って、あんた…

「お返事を、いただいてこいと…」
「……お前、この中身知ってるのか？」
「いえ。ただ、お返事を…とのことです」

あれ？なにかな？　ガイってば凄く真面目な顔…

でもね、実際この子、その手紙の中身なんて知らないし――――
いや、知らなくて良かったんではないですか？　この状況は。

「――――　どうも、直接話した方が良さそうだ。……坊主。ユーリー、だったか？　一緒に来い」
「え？」
「奴と直接話した方が早そうだ。今日は居るのか？」
「はい。今日は午後からは隊舎に居られるとお聞きしています」

だから、返事もらって来いって言われたんだけど。

「返事が歩いて行ってやるよ。こっちも色々聞きたいこともあったしな。俺はこの後、どうとでもなるからついでだ。案内しろ」

案内って…　一緒に、来るって事ですか？

「で、でも！自分は歩きですし！」
「馬には乗れるんだろうが」
「ハ、ハイ！　しかし…！」
「こっちの一頭貸してやる。一緒に乗ってこい」
「は、はい？」
「一応着換えるから、先に厩に行って鞍を置いておけ。案内はさせる」
「はあ？！」

えっと、あの…　なんか、変なこと言ってませんか？ガイさん。一緒に乗って…って、乗馬？　また乗馬ですか？

「あの！　一緒にって…ヒューバー団長とですか！？」
「他に誰が居る」

そんな、いかにも当然みたいに言わないで。
え？　まじっすか？　マジなんですか？
厩って、厩って…　此処の馬だって、そんじょそこらの駄馬じゃないでしょーが！
また、不相応な名馬に乗るの？！

「あの！わ、私は歩いてまいりますから！　是非先に行かれててください！」

高級外車に、初心者が続けて乗るなんて～～～！！
確かに、名馬の名馬たる所は、昨日乗って見てユーリーにはすごく理解できたみたいだけど（すみません！　あたしにはわかんなかったわ）いつか自分もこんな馬に…とかって、確かにあの時、思ってたみたいだけど！

まだまだ半人前なんだよ～　また、なんか言われちゃうじゃないか。
絶対阻止！　声張り上げちゃうこの子の気持ちを察してよ！
部屋を出て行きかけていたガイが、ユーリーのその言葉に振り返る。

「返事を持って帰らなきゃならないんだろ？　俺が返事。一緒に行かなきゃ意味が無いだろうが」

いや、それは余りに正論ですが。

「でも！」
「それに…」

一瞬、わざとの様にガイは言葉を溜める。
……あれ？　なんか企んでる？　目が変なふうに光って見えるのは

気のせいですか？
ニヤッ…と笑ったね！　今！！

「第一騎士団の団長様の馬に比べたら、此処の馬なんて大したもんじゃねぇよ。そんなに畏(かしこ)まるなって」
「……！！」

――――――　なんで、知ってんだ～～～！！！

五日前の遠乗り。知ってるね、知ってるよね！

「じゃあな。着替えたらすぐ行く」

先行ってろ。
気軽に言ってくれちゃうわよね！ガイってば！
どうすんのよ！　この子――――――　ユーリーが、パニック起こしちゃったじゃない！
大人は子供をからかっちゃいけないんだぞ～～～～！！！！

――――――　そんなこんなで。

はい。
乗ってきてしまいましたよ。第二騎士団所属の、しかも団長専用のお馬様に。

ガイってば、もう面白がってるとしか思えない。自分は何時も代え馬にしてる方に乗りやがって、あたしに、常に戦場に連れて行くって評判の自慢の黒鹿毛寄越しやがった！

「おお。無事に着けたな。大したもんだ」

気軽に言って下さるじゃないの！団長さん！！

こんな…こんな上物…

乗ってるだけで、どんだけユーリーがビビりまくると思ってんの！！

王宮まで、多分二十分はかかんなかったと思うけど。ユーリーの精神的疲労は並みじゃなかったわよ！

ああ、振り落とされなくてよかった…

馬って人を見るって言うじゃん。たまにいるらしいのよね、認めた人間以外は絶対にその背に乗せない気難しい名馬って奴が。

今、ガイに鼻頭を撫でてもらって喜んでるこの黒鹿毛君。

どうだ！――――――　みたいに見えるから、一応良く言い含めておいてくれたんだろうな、ガイが。お陰で、ユーリーの手綱さばきにも、しっかり従ってはくれてました。大変良い馬でした、確かにね。

でも、なんの対抗意識か知らないが、マジ、やめて。

あたしとユーリーの精神が持たないから。

王宮内は基本乗馬禁止だから、乗ってきた馬は、門の傍の、詰め所の中に有る厩に預けておく。

あたしたちが乗ってきた黒鹿毛は、この後今度はガイが乗って帰るらしいから、もう一頭、今ガイが乗ってきた馬は、第二騎士団への

伝言を頼んだ兵士に乗って帰ってもらうらしい。

なんか申し訳ない…　申し訳ないから歩く！　今度からは絶対歩くからね！

とりあえず、
それでも自分の仕事を果たさなきゃなんない。
生きた『返事』であるガイを先導して、そのまま第一騎士団の隊舎に向かう。午後からは隊舎に居るって言ってたから、アレクもいるだろうし……って事は。

今日も、会えるって事？
二日続けて、麗しのアレクにお目に掛れるってことか！

うわ～～～～～っ！！
やったぜ！　この前のアレクの様子が少し気がかりでもあったし、やっぱり大好きな人の顔を拝めるのはありがたいです、はい。

こうなったら、一緒に来てくれたガイに感謝？　…いや、この人が此処まで来なくても、ユーリーは返事をアレクに届け無くちゃいけなかった訳だから、結局会う事は出来た筈だし…

やっぱり、これってガイの独断で遊ばれたって事だよね？　確かにユーリー（このこ）はこういった時遊ばれやすいかもしれないけど…

ううう……
子供で遊ぼうとする大人なんて…（いや、あたしもいい大人だけんど）

嫌いだ～！と叫べないとこが残念だね、ユーリー。

いや、まったく。

その十六（後書き）

やっと更新です。…ここのところ、このぐらいのペースでしか更新が出来ない…

ゆっくりと参りますので、どうかよろしくお願いいたします。

お陰さまで、ユニーク３００００を超えさせていただきました。少しでも、楽しんで頂けるものを書いていきたいと思っています。ご訪問、本当にありがとうございます。

その十七（前書き）

もうしばらく、夢の中です。

その十七

王宮内を、ガイと二人で歩く。

一応、ユーリーがガイを案内する形だけど、ガイ本人も何回となく通っている道だろうからその足取りには何の不安も無い。いや正直、案内なんていらないんじゃないかと思うんだけどさ。

「お前はお使いの帰りだろうが」

返事を持たずにどうやって帰るつもりだ。

なんとなくユーリー（このこ）も気になった様で、そう問いかけた時のガイの答えがこれ。

完全に面白がってますね、ちくしょ～～～！！

頭上に張り出してくる、枝の緑が目に眩しいじゃないの。こうやって有名人――――　ガイのことね――――　と一緒に歩いてるトコを目撃されるのは、出来れば避けたいんだけどね。いろんな意味で。

王宮内とは言え、此処は建物の中では無い。まるで、森の中の道の様に周りは木で一杯だ。でも、この道で正しいの。

実は、スーベニアの王宮って王族方がお住まいになっている奥の宮を中心に二重構造になっている。あたしたち、日本人の感覚で言う所の『王宮』はこの奥の宮の方が近いと思う。堅牢で華やかな、本当にお城って感じなのが奥宮（こっち）の方。それ自体の大きさも結構なものなんだけどね。

その奥宮を、もう一回り程高い石造りの塀がぐるりと取り囲むように造られている。門とか見張り台があるこの塀の中が、こちらでは

全て王宮と呼ばれてるの。

この王宮、実は半端無い程の広さが有る。
入っちゃいけない所とかもあるし、奥宮を守る形で色々な建物が入り組む様に建てられてたりするから、正直あたしにもその広さは今一把握できていない。現実(あっち)では当たり前の航空写真でもあれば簡単に見取り図でも作れるんだろうけど、ただ、地面を歩きながらの計測だからね。ある程度の目星が付けられるぐらいかな。
でも、まあ一つの大きな街が有る様な感じ――――――と思ってもらったらいいかも。
大貴族と呼ばれる人たちの屋敷なんかも此処にはあるし、それこそ練兵場とか、我が第一騎士団の隊舎も丸ごとこの中に入ってるくらいだから。

だから、基本王宮内を歩くと言うと、その建物へ続く回遊式みたいな回廊を通るか、結構しっかりと整えられた庭を通って行くことになる。アレクが居るだろう第一騎士団の隊舎は、他の建物からは少し離れた場所に立っているから、あたし――――――ユーリーとガイは、針葉樹が人の高さほどに整えられた庭を、二人して歩くことになっている。此処を通って行くのが、一番隊舎に近いんだもの。

そろそろ初夏の風も一層熱を帯びて、本格的な夏の気配がこんな閉鎖された庭にも感じられる様に思う。

こちらの世界にも一応四季が有る様で、常春とか、常夏とか、そんなとんでもない気候じゃ無かったってのはあたしにとってはもっけの幸いだったね。あんまり違和感無く馴染めたもの。でも、日本よりはもう少し四季の温度変化は緩やかな感じかな？　結構過ごしやすくって、これはこれでとってもありがたい。

もうすぐ、隊舎の建物が見える――――　と思った所で、その、見慣れたその建物の前に、不釣り合いな柔らかな色彩が有ることに気が付いた。明るい夏の日差しに光り輝く金の髪。緩やかで華やかな薄いブルーのドレスがサラっと動いて…

「…姫…」

思わずと言う感じでガイの口から零れ出た言葉に、ユーリーは彼を見あげて、さらに慌てて前方にもう一度目線を合わせる。

「ヒューバー様…！」

こちらに気が付いたのだろう、ぱっと顔を輝かせて、その体が軽やかにこちらに一歩を踏み出す――――――
その途端、ざっと跪き掛けたガイにあわててあたしたちも見習おうとしたんだけど、それをまるでくい止めるかのように声が降ってくる。

「どうか…！」

ああ、この声…
間違いない、ミルヴァーナ姫の声だ。

「どうか、そのような礼は取らないでください。ヒューバー様。ここは正式な場では無いのです。わたくしは、今日はあなたに助けていただいた唯の娘として此処に居るのですから」
「…姫…しかし…」

「貴方が、あくまでも臣下としての礼を取られるなら、わたくしは王族として貴方に『礼を取らぬように』との命令を出さねばならなくなります。どうか、わたくしにそのような命を出させないでください」

言っている事は、結構強引な様な気もするけど、ミルヴァーナ姫のその声音は、どこか懇願する様な必死な声で…

綺麗な人の、この声を無視できる奴がいるならお目に掛りたいわね。女のあたしでも、今クラっときかけたもん。

改めて日の光りの中で見たミルヴァーナ姫の、その綺麗な事と言ったら…　もう、どうしよう…って感じ。輝く様な金の髪は、前に思った通りアレクのそれよりはもっと濃い本当に鮮やかな金の色。真っ直ぐにこちらを見るその瞳の青さと言ったら――――――　スーベニアの青の宝玉とは良く言ったものだ。サファイアよりももう少し青い…ブルートパーズかな?この色は。

なんてうらやましい…　本当に本当のお姫様が此処にいらっしゃるわ。この間、夜にお会いした時も綺麗だと思ったけど、こうやって明るい光の中で拝見すると、もう溜息しか出なくなる。

ほら、流石のガイも、しぶしぶだけど、膝を折る事を諦めたみたい。この瞳には…なんか逆らえそうにないな～　美人って、それだけで威力があるよね。

ガイが立ったままって事はあたしも立ってて良いのかな?　でも、あたしはまた立場が違うよね…

やっぱりしゃがんだままの方がいいのかな?　う～ん。ユーリーも迷っちゃってるよ。どうする?

あれ?　少し向こうに、紺色の地味目のドレスを着た黒髪の女の人

がこちらを見守る様に立ってらっしゃる…　え～と、この状況からして、あれってきっと姫の侍女サンだよね。
彼女が立ってるって事は、あたしたちも立ってて良いのかな？

ようやっとユーリーもどうするか決めた様で、ガイと姫から二メートルほど離れた場所に、立ったままで控える事にした。なんかお邪魔の様な気もするけど、此処通んなきゃ隊舎に行けないし。ここに二人っきりでほっておくのも、それはそれで問題があるのではないだろうか…――――　いや、ユーリーは其処まで、考えてやってる訳じゃ無いんだけどね。

少し距離はとったけれど、ガイとミルヴァーナ姫の声はしっかりと聞こえる場所。まるで何かに急かれるように姫の声が言葉を綴り始める。

「お忙しい所をお引き留めして申し訳ありません。けれど、どうしてもお会いしてお返ししなければならないものが…」

そう言って、彼女がガイに差し出したのは小さな布――――　あれって、ハンカチかな？

「いつか必ずお返ししなければ、と思いながら、こんなにも時間が経ってしまいました。申し訳ありません」
「…返して頂く様なものではありません。それだけの為にわざわざ…？」

差し出された布を、困惑したように見詰めるガイの口から言葉が零れ出る。無意識だろうか、少しだけ後ろに下がろうとしたガイを、引き止める様に姫が一歩を踏み出して。

「いえ…　いいえ」

ギュ…と一度、手の中の布を握り締めて、もう一度その青い瞳が真っ直ぐにガイを見あげる。

「これも、あなたにお返しするべきものではないでしょうか…？」

そっと、その白い細い指が掌の布をめくって。

その中から出てきたのは――――――　石？

宝石、かな？　碧色の鈍く光る親指ほどの大きさの石。一つだけ開けられた穴に皮の紐の様なモノが通されて、ネックレスのように見える。

それを目にした途端、ガイの顔が真剣なものに変わったのがわかる。

「これは…！」

ガイは思わず手を伸ばしかけて、慌てたようにその手を握り締める。

「やはり、ヒューバー様の物でしたでしょうか？」

「……失くしたと思っておりました。これを何処で？」

「…あの折、このハンカチをお借りした時に落とされたのだと…」

「ああ…そうですね…」

――――――　あの折？

あの折って、どの折だ？

「紐が切れてしまっていましたので、勝手ですが取り返させて頂きました。…きっとあなたの大切なものだと…　早くお返ししなけれ

ばと思いながら、こんなにも遅くなってしまいました。申し訳ありません」

そっと…

本当に、どう言ったらいいのか。

そっと、まるで名残が惜しい様にハンカチごと石がガイに手渡される。そっとそっと、その布の手触りすら惜しむ様に。

――――　ああ、やっぱり。何が有ったのかは知らないけど。

ミルヴァーナ姫は、ガイの事が好きなんだ。こんなにもこんなにも――――――　その人の、持ち物にすら思いを込める程。

渡されて、そのまま離れ掛けた姫の手をガイの大きな手が包み込む。

「…お持ちください」

「え…？」

「貴女が持っておられた方が良いでしょう」

もう一度、石を布ごと姫の手にしっかりと握らせてガイが告げる。

「南の――――――　アドリアスの海の先に有る、トーラの国から伝わる守り石です。これがあなたと…――――――　あなたと、コルフィー子爵のこれからを守ってくれる筈です」

「……」

「一足早い、結婚祝いとでも思っていただければ光栄です」

コルフィー子爵って…確か、アレクの事だよね。まだ、正式に公爵家を継いだ訳じゃないから、公の場では確かにアレクはこう呼ばれるけど。

ガイが、アレクの事を、この名で呼ぶのは初めて聞いた。瞬きすらしないでガイを見ているミルヴァーナ姫から、一歩で大きく距離を取ってガイは深く首を下げる。

「わざわざ、ありがとうございました。もうお会いすることも無いかもしれませんがどうか、お健やかで有られますよう…　――――――　それでは、御前、失礼いたします」

まるで、何かに打たれたかのように身動き一つしない姫の横を、擦り抜ける様にしてガイが歩き出す。
ユーリー（あたし）は慌ててそれを追い駆けるしか無くて。

お付きの侍女の傍を通る時、ガイが確かに言った、「姫を頼む」その言葉だけが妙に心に残って離れなかった。

その十七（後書き）

七月最初の更新です。
前よりは…早かったかな？　とはいえ、いつも通りのムラ更新で申しわけありません。
少しずつ少しずつ、一応お話は動いて行っております。
最後まで、なんとか頑張っていきたいと思っています。

その十八（前書き）

まだまだ夢の続きです。

その十八

隊舎の扉を開けて、中に入る。
なんとなく、無言で足を進ませていく。

「あの…！」
「……なんだ？」
「ト、トーラの国って…」
「――――――　ああ、それか…」

きつく、難しい顔をしていたガイの視線が和らぐ。
ホッとすると同時に、思わず突っ込んでしまいたくなるのを押さえきれない。

――――――――　聞くに事欠いて、そこか～～！！

ユーリー、ユーリー。前から、そうじゃないかと思ってたけどね。
君の天然ボケなトコは、いっそ称賛に値するよ！
あの、どうにも気まずい雰囲気はものの見事に払拭（ふっしょく）されたけど、もっともっと聞きたい事――――――　もとい、聞かなきゃなんない様な事は他にも一杯あるでしょうが！
……いや、どうしたって、そこは聞いちゃいけない様な気もするんだけど。

「トーラは俺の故郷だ」
「え？」
「ガキのの時分…　七つぐらいまで俺はトーラに居たんでな。どうしても、故郷って言うと、俺にとってはトーラって事になる」
「トーラって…アドリアスの南の方の国ですよね。確か常夏の…」

「常夏って程じゃないが、確かにあっついとこだ。俺の祖母はトーラの出でな。まあ、色々事情ってもんがあって、その縁でガキの頃はトーラでばあさんに育てられてたんだよ」

知らなかったのか？――――――――　はい。初耳です。そんな事、聞いたこと無いですし！

確かにガイって何処か異国風の――――――　なんて言うか、エキゾチックな独特の雰囲気が有るとは思ってたんだ。所謂（いわゆる）ハーフ？　いや、クオーターか。今更ながら、納得。でも、

「事情…？」

ってなんだろう？

聞くつもりは無かったのに、ユーリーは口に出してしまってたみたいで。

「まあ、その辺はだな…」

苦笑しながらガイが軽く自分の髪をかき混ぜる。

うわっ！　やばい！！

「あ！　すみません。不躾な事を…！」

「いや。そんな大した事情がある訳でもないんだが…」

やばい～、やばい～！

あたしが口にしちゃった訳でもないけど、やばいよ～

プライベートだもんね。聞いちゃいけないよね、ユーリー！

わたわたと、失言にうろたえまくるユーリーに同情してくれちゃったのか何なのか、苦笑したその顔のままで、ガイがあたしたちの頭

をポンポンと叩いてくれる。

「おい。落ち着けって。そんな大した話でもないんだから」

そう、恐縮しなくてもいいって。

そんな風に言ってくれると何かますます身の置き所が無くなっちゃうんですけど。

「す、すみません…！　僕…いえ、わたしは…」

「別に秘密でも何でもねぇし、坊主が知らなかったって方が驚きなんだが…　…まあそのなんだ。俺の両親（ふたおや）の結婚ってのがいわくつきで。ざっくばらんに言ってしまうと、俺のおふくろの方の家が、結構しつこくお袋とオヤジとの結婚を許さなかったとか、それに業を煮やして二人で駆け落ちしたとか、まあ、色々とな」

「か、駆け落ち！？」

「オヤジは言っても、混血だったからな～　そんなこんなで一騒動。どさくさの中で俺が生まれちまったもんだから、落ちつくまでばあさんが預かってたって事」

な？　良くある話だろ？

――――――　って、ガイさん。

そんな話が其処らへんに転がってたら、大変です。ユーリーが、どう答えて良いのか、思いっきり迷ってるじゃないですか！

だって、駆け落ちって、ちょっとこっち（こっち）では早々有り得ない話なんじゃないですか？　それを、そんなに軽く言わないでくださいな。

だって、夢の世界って、今の日本とは比べ物にならないくらいに保守的…と言うか、色々な意味で縛りが多いじゃないですか。特に婚

姻とか、結婚とかって文字通り個人個人の問題じゃなくて、家と家との結びつきの方がものを言うって感じでしょう？
だから、恋愛結婚なんてほぼ皆無。大体は生まれた時からの許嫁とか、家同士の約束とかって結婚相手は決められるみたいだし。特に、貴族とか豪農とかって、大きな家をしょってる人程その傾向は強いから…

……えーと、えーと。
ガイは確か生粋の貴族って訳じゃ無かったとは思うけど。でも、結婚を反対されたから駆け落ちとかって話になるって事は…

「…ヒューバー団長…　団長のお家って…」
「ああ。一応父親が、ゼリアの街の顔役やってる」

か、顔役…って…　もうちょっと言い方有るでしょうが…！

ゼリアは、スーベニア最大の港町。アドリアスの海に面した貿易港だ。スーベニアの中でも南の方は合議制の自治組織が貴族よりも力を持ってるって確かどっかで聞いた気がする。
そこの顔役？　それって、下手なその辺りの下級貴族なんかより実力的には凄いってことではないでしょうか…？　うう…　実はガイって結構凄いお家の生まれって事？　やっぱりこんな風に気易くお話させていただけるような立場じゃない様な…

「おいおい。なんて顔してんだよ。俺の家なんぞ、お前のトコの団長さんに比べりゃ、唯の商売人の家だぞ」

うわ…　そんなにも顔に出やすいのか、ユーリーは。

「い、いえ！　でも！　あ、あの、その…」

でも、この子の気持ちは解る。なんとなく、すっごく遠い人になっちゃったような気がするんだよね。ガイは特に、その性格が凄く気さくで話しやすかったりするから。

そんなこの子の心境を解っちゃってるみたいに、ガイは一つ溜息を落とすと、足を止め、その大きな身体を屈めるようにしてユーリー(あたし)の顔を覗き込んだ。

「――――――――!!!」

う～～～!!　突然のアップ！　止めて～～～!!

「だ～からな。俺は俺。此処に居る俺は、家やオヤジたちとは何の関係もねぇし」

どきまぎしてるあたしたちの何もかもお見通しみたいな顔をして、ニヤッ…と笑うガイは、いつも通りの見慣れた自信あふれた騎士団長の顔で。

「ま、強いて関係が有るとしたら、この髪と目かな？」

「髪…ですか？」

「そう。あんまり見ねぇだろ？黒髪なんて」

そう言われれば…　確かにそうだ。

スーベニアは決して単一民族の国では無いらしく、髪も目も、色々な色をした人たちがいる。アレクの様な銀に髪から、金の髪。ユーリーの茶色の髪まで。目だって、青とか、碧とか、茶色とか…

でも、どちらかと言えば色素の薄い、淡い色合いの組み合わせが多い中で、ガイのこの混じり気の無い黒の髪はどちらかと言えば異端

のほうだろう。

「この黒髪に黒い眼もばあさんからのもらったもんだ」

トーラの民は、そのほとんどが黒髪に黒い眼だからな。

そう告げるガイの口調は、むしろそのルーツを誇るかのようで。

「南の、アドリアス海の方へ行けば、こんな組み合わせも珍しくは無いんだが――」

「確かに、貴殿の黒髪は見事としか言いようがないからな」

いきなり、重なってきた声に驚く。

慌てて振り向いた先には、穏やかに微笑む紫の瞳、典雅な美貌。明かり取りの天窓から零れる日の光りに映える銀の髪――

「団長！！」

「アレク、脅かすんじゃねぇよ」

「…そう言いながら、貴殿は少しも驚いてくれていないだろうが」

「俺じゃないだろ。お前の大事な従者を、おどろかすんじゃねえよ」

そう言いながらも、ガイの顔が綻ぶ。

何時の間にか、あたしたちを出迎える様な形で、アレクが扉を開けてその前に立っていた。

何時の間に――――っていうか、話に気を取られてる間に、しっかり此処ってば団長室の前じゃん。

ホントにホントに何時の間に～～～！　って、ほら！　あたしたちってば本当は案内も兼ねてなきゃいけないんじゃないのかい？

ああ、またやってしまった…　情けない――――って言うか、声か

けられるまで、アレクの存在に気が付かなかったってのも、問題あるんじゃないか？　騎士見習いとしては！

「確かに、貴殿のほど見事な黒髪は余り見かけないからな。その黒曜石の様な瞳の色もだが」

「男相手に変にきらきらしい形容を付けるな、気持ちが悪い。おまえこそ、白銀のごとき淡い銀糸にアメジストの瞳の美丈夫だろうが」

そう返されて、アレクのその美貌が、少しだけ嫌そうに歪む。

「……確かに、男に言われてもあまり嬉しくは無いものだな…」

「そこ、いちいち納得するんじゃねぇよ」

軽く、笑いながらアレクの開けたドアから入っていくガイに、さっきから全身に張り巡らされていた様な緊張感はもう無い。

迎え入れるアレクの顔も、いつも通りの穏やかな表情で。

なんとなく――――――　いや、本当は凄くホッとする。

姫との――――――　さっきのミルヴァーナ様との邂逅は、きっとガイにとって、凄く…　その、なんて言うか、もの凄く重い出来事だったと思うから。

ユーリーとのいつも通りと思えた会話の中でも、微かな違和感はまだ、ガイの中にあったように思う。なんだか、いつも以上に饒舌…だったように思うから。

今、いつもと変りの無いアレクの様子に、一番ホッとしてるのは誰だろう。あたしもだけど、ユーリーも、詳しく理解しないままに、緊張していたみたい。

尊敬する団長の顔を見て、ユーリーの気持ちが落ち着いていくのが

こうしてひしひしと感じ取れる。
そして、ユーリーだけでなくあたし自身も――――――
アレク！　会いたかったよ！！

その十八（後書き）

ようやく更新です。
まだ夢の中でうろうろしてます。
しばらく更新が出来なかった間に、お気に入り登録、３００を超えさせていただきました。本当にありがとうございます。
ムラ更新が続きますが、どうか気長にお付き合いください。

その十九（前書き）

連続更新です。やれば、出来る！

その十九

アレクが扉を開けてくれた団長室は、前にガイと入った時のまま。
あの時も、確かアレク自らに扉を開けさせちゃったんだったような…

うう…　かえすがえすも情けない…
お願いです。従僕の仕事、取らないでください。

「ユーリー、御苦労だった。伝令の役目、確かに果たして来てくれたようだな」
「は、はい！　遅くなって申し訳ありません！」

ユーリーってば心からの良い子のお返事。しかも斜め９０度、思いっきりのお辞儀付き。
だって、にっこり笑ってアレクにこんな風に言われちゃうと、もうそれだけで良くなっちゃわない？
この気持ちってば、あたしだけじゃないのよ。しっかりユーリー（このこ）も団長命！だもんね。
もう、末期。いいのよ、ほっといて。恋愛（？）症状、末期なんだから、あたしたちって。
ああ、もう本当に――――――　アレクってば、やっぱりなんてかっこいい…

「でも、あの、お返事ですが…」
「ああ良い。わかってる。生きてる返事が一緒に来たがったのだろう？　かえって迷惑をかけたな。これのお守りは大変だったろうに」
「い、いいえ！　ヒューバー団長には、大変良い経験をさせていただきました！」

ありがとうございました！

こちらにも斜め９０度――――――　ユーリー…　君って本当にいい子だけどさ…

「そんなにこれを庇う事は無いぞ。どうせ、無理を言って付いて来たに決まっているのだろう？」

「……あんな手紙寄越しといて良く言うな。あれを見たら早かれ遅かれ俺が来ることなどお見通しだろうが」

「騒動を起こせとは言っていないが？」

「あんなもの、騒動の内に入るかよ。次代を担う若者に、少し鍛錬（たんれん）を施（ほどこ）しただけだろうが」

「アルシャインに乗せたって？」

「…この地獄耳…　さっきの今だぞ？」

「あれだけ門のあたりで騒ぎを起こせば、すぐ知らせが来ることなど貴殿にはお見通しで有ろうが。

…まったく、私の大切な部下を、変な騒動に巻き込むのは止めてもらえないか？　何か起きたらどうする気だ」

「アルはあれで主人の言いつけには忠実でな。絶対に落っことすなと言い聞かせておいたから心配はない。現に、こうやって坊主は五体満足だろうが」

…やっぱり、言い聞かせてくれてたのね…

いや、良かったのか悪かったのか。確かにユーリーは五体満足でしたけどね。

あの黒鹿毛（くろかげ）くん、アルシャインって言うんだ。

アルシャイン――――――で、アル、ね。うん。なかなかいい名前じゃん。すっごくカッコいいし、やっぱりセンスあんのねガイってば。

もう乗せてもらう事は無いと思うけど、今度会ったら名前呼んでみ

たいな～――――――　って、あたしが呼べるわけじゃないけどね。

でも、ガイが凄く楽しそう。相手がアレクって事もあるんだろうけど。まるで親友にお気にいりのおもちゃを自慢してるみたい。こっちでの馬の重要性は解ってたけど、それ以上に主人との関係って深いみたいね。

「坊主。お前自慢して良いぞ。俺のアルに乗った事が有る奴は他に居ないからな」

ほら、そうやって自慢げに。受け答えしてるアレクだって、こんな風に言葉の応酬をするのはあたしが知っている限りガイぐらいしか無い所為か、行ってる事とは裏腹に凄く楽しそう。

うん。男の人のこう言うトコって可愛いよな。こうなってくると年上も年下もあんまり関係ないし…

――――――　って、良く考えれば、ガイやアレクってあたしと同い年じゃなかったっけ？　確かアレクはユーリーより十年上だったし、ガイはアレクと同年代だと聞いてるから――――――　おお！　タメ、ですか？　わ～～い！同級生じゃん！　じゃあ、可愛いとかって言っちゃってもいいのかな？　こっちの人ってどうしてもユーリー目線でしか見た事無いから、皆ずいぶん年上だって思ってたけど、あたしから見たら同い年なんだ。　今さらだけど、ちょっとびっくり。んでもって、これは嬉しいかも。

「ユーリー。ガイの甘言を余り信じるんじゃないぞ」

「甘言とはなんだ、甘言とは。俺は事実しか言ってないぞ」

「確かに、一人でアルシャインに乗せてもらったのはユーリーが初めてだが、貴殿に乗せてもらった者もいるだろうが。そんな風に言うと、その者が泣くぞ」

軽く。本当に軽くアレクがそう告げた途端、一瞬、ガイの全てが止まった。

「――――　何の事だ？　俺は誰も乗せた事なんぞ無いぞ」

「…そんな風に言ってくれるな。確かに緊急時の事で本来ならあってはならない事だったが、姫にとっては初めての事だったのだから」

「姫…って、ミルヴァーナ様、か…？　……もしかしてあの時の事か？　あれは、決して他意は――――！」

どうしたの？

ガイが…　あのガイが動揺してる。

ユーリー（あたし）の解るくらい――――　いや、アレクが驚くほどに。

「いや、咎めたりしている訳ではない。すまない。言葉が足りなかったか」

「アレク！　あの時の事は内密の…」

そう言った途端、ガイのその射抜くような視線があたしたちを貫いて。

ビクッ！！

思わず身体が硬直する。

何…？　何が有ったの…？

ユーリーのその動揺はそのままあたしに伝わって、胸が、心臓が苦しい。

こんな視線、ガイに向けられた事無かった。

「…あの…」

あの…

それ以上、ユーリーは言葉を続けられなくて。
居ちゃいけなかった…？　えっと。あたしたちは此処に居ちゃいけなかったのだ、きっと。

「ああ、ユーリー。結局君を巻き込むことになってしまったか…これは私の失態だな、すまない」

そんなあたしたちの動揺を、救いあげてくれたのは何時ものガイでは無くて。

「このままではお前も気になってかえって変に勘ぐるかもしれないな。――――――　一応、これから言う事は他言無用だ。誓えるか？」

アレクのその言葉は、ユーリー（あたし）に言うよりは、むしろ殺気を孕んだガイを静める為のもののようで。
あたしたちとしたら、こうなったらこう応えるしか無いじゃないですか。

「は、はい！」
「何に？」
「だ、団長に…アレクシーズ・コルフィー第一団長に誓えます！」

本当に、本心から。

「…其処まで大げさな事では無いのだが…」

そう言って笑ってくれたアレクに少しだけ気持ちが落ち着く。
怖くてさっきから見れないガイの気も、少しだけ落ち着いたみたいでホッとする。
いったい何が有ったって言うんだろ。どうやら、ガイと…やっぱり

ミルヴァーナ様との事みたいなんだけど。　所謂、『あの折』の事かな？　アレクは何が有ったか知ってるの？

「毎年、夏になると王家の方々が北の離宮に避暑に行かれる事は知っているな？」

声を出さずに頷く。

首都シュロスの北、馬車で半日ほどの所にクレイド湖がある。水の美しさで有名なその畔（ほとり）には王家の離宮が有って、夏になると王家の方々がお忍びで避暑に行かれるのは有名な事だ。

ただし、警備と予定とか色々な面を考えてか、何時行かれるとか、何日滞在されるとかは極秘になっている。まあ、当然の配慮と言えばそうなんだよね。スーベニアはわりと穏やかに安定している国だけど、それでも暗殺とか、不審死とかそんな事例が無い訳じゃない。

これはあくまで噂だけど。

「昨年、その道中でミルヴァーナ姫が襲われた」

「――――――！」

「いつも通り、日程やその他、道筋などはごく一部の信頼できるものにしか知らされていなかったのだがな。賊は、行き当たりばったりの山賊などでは無く、確実に姫を狙ってきていた」

……ヤバい…

これは、マジに聞いてはいけない事ではないのだろうか…

王家の姫の暗殺…？　そんなもん、国家の一大事でしょうが。何で極秘になってんの！？

「護衛は倒され、寸での所で姫も危うかったのだが…」

ゴクッ…と自分の喉が鳴るのが解る。

…アレク、ここで、言葉を溜めるな！

「たまたま通りかかったガイが、かどわかされそうになっていたミルヴァーナ姫をその場からかっさらってくれたのだ」

――――――か……？

「かっさらった…？」

いきなり、口調が軽いですよ、アレクさん！

「……人聞きの悪い。その場からお連れして逃げただけだ」

「いきなり単身、馬で乱闘の中に乗り込んで、一度も馬から降りる事無く姫を抱きあげて連れ去っただろうが」

「……月に一度の野外演習の日だったんだ。団員たちはもう少し先のマルシアの丘に居たんだが、俺は所用で一人遅れてな。たまたま近道をしようと思った所でその場に出くわしたんだ。団員達が一緒だったら、その場で賊を制圧出来たんだが」

「その判断のお陰で、大事にならずに済んだ」

にっこりとアレクがガイに微笑みかける。

「賊はどうやら、姫のお命を狙ったのではなく、その御身を何処かへ連れ去ろうとしていたらしい。その後かなり執拗に、姫を連れて逃げるガイを追ってきたようだが」

「――――　姫が一人増えた所で、アルはビクともしないからな。引き付けるだけ引きつけて、出来ればマルシアの丘まで持っていきたかったんだが」

「それは流石に無理と言うものだろう。だが、貴殿が引き付けてくれたおかげで、付いていた者たちの犠牲も最小限で済んだ」

図らずも、絶妙のコンビネーションでその時の状況を説明してのけてくれるこの二人の事は置いといて。
だから、それって、もの凄く大事じゃないですか！　もっともっと大々的に捜査とかあってもおかしくないんじゃない？　なんで、ユーリー(このこ)が知らないの！

「……その時の賊は？」
「三人、ガイが動けなくしておいた者がいたが、追捕の者が捕らえる前に自害した。あとの者は――」
「異変を感じた俺の所の奴らが、様子を見に現れた途端に、あっという間に引きやがった。せめて一人なりとも、生きて捕らえたかったんだが」
「…？」

心底悔しそうなガイの口調に、ユーリー(あたしたち)は二人とも思いっきり首をかしげる。

「…解らないのか？　まだまだだな、坊主。生きて捕らえてこその事だと言うのに」

舌打ちをしそうなガイに、アレクが不自然な程穏やかに言葉を重ねる。

「賊は姫の行動を、正確に把握してその警備の隙を付いてきた」

この意味がわかるか？

「そもそもごく少数、信頼できるものにしか伝えられていない筈の事を、どうして賊が知っている？」
「――――！」

……いや、それはまずい。まずいって言うか、ありえない！
本来あり得ない事が起こるって、それってつまり…

「…密偵が、入り込んでいるって事ですか…？」
「その可能性が高い」

軽く両手を組み合わせて、静かな表情でこっちを見詰めるアレクの顔には、何の憂いも無いみたいなのに。
さらり…と、そんな大事な事を何の感情も見せずに告げる事が出来る。そして、傍に佇むガイも、さっき一瞬だけ見せた感情の発露はもう無い。
冷静に、感情すらもコントロールしてしまう。そんな世界にアレクたちは居る――――

「今は変に騒ぎたててネズミを巣穴に潜らせるより、もう少し泳がせて確実にその尻尾を押さえる事に徹したい。…先ほどの誓いを守れるな？」
「は、はい！」

穏やかに、まるで何かお使いを頼む様に――――――　でも、これって絶対に他言無用って事だよね。
信頼されてるって事……　嬉しいけど、嬉しいけど。大丈夫か？！
　ユーリー！

「――――――　この状況下で、姫がむやみに出歩かれるなど有り得ないだろうが…」

ポツリ…と、それは決して誰かに聞かせる為の台詞では無かったと思うけれど。

「ああ、ちゃんと会えたのだね。入れ違いになるかと心配はしていたんだが」

しっかりとそのガイの呟きを受け止めて、アレクがニッコリと微笑んで言った。

「…どう言う事だ…？」

「一度、どうしても貴殿に会いたいと姫に懇願された。今日はもしかしたら会えるかもしれないとお伝えしたまでだ。姫も僅かな時間しかこちらには来られないとのこと、どうかとは思っていたのだが」

「…アレク…いったい…」

「どうしても、返さねばならないものが有るとおっしゃっておられた。無事に、受け取れたか？」

微笑みをたたえたまま。そのアレクの顔に、あたしは穏やかな思いしか汲み取ることは出来ないけれど。

告げられた内容は、きっと、ガイにとっては余りにも重い。

微かに強張りかけたその表情を、果たしてユーリーは、アレクは気付いているのか。

「……こんなむさくるしい男に会ったって、なにもいい事なんぞ無いのにな。律儀なお方だ…　流石にお前の婚約者だけの事はある」

「褒め言葉に聞こえないが、そう取っておこう」

「……もしかして、俺をこっちへ来させようとしたのはそれだけの為とは言わないな？」

「当然だ。もし、時間が許すなら、色々と話さなければならない事がある。付きあってもらえるか？」

「付きあうつもりがなきゃ、こっちへなんぞ来てねぇよ。――――――　仕切り直しだ。酒を取ってくる。ちょっとこの坊主を借りるぞ」

ぐいっとガイに頭ごと引っ張られる。

「あ、あの！　酒宴の準備ならわたしが一人で…！」

「ついでになんか食いもん見つくろって来たいんだ。良いから付き会え」

そう言って強引に団長室を出て行こうとする。

「アレク」

「何かな？」

「もう少しミルヴァーナ様に付いて居て差し上げろ。いくら昼間、王宮内だろうとたった一人の護衛だけでは心許ない、また何かあったらどうするんだ」

「腕の立つ信頼の出来る者を侍女として付けてある。さりげなく、影も付いている筈だ」

「それでも、もし…」

「せめて、王宮の中だけでも、自由にさせて差し上げたい。形だけで、あってもな…」

初めて、アレクの声音の中に微かな感情が混じる。

それは、確かに彼の姫への彼の確かな思いがあるように思われて…

――――――　ツキン…

覚えのある痛みが心臓に走る。

それを感じるのは、きっとあたしだけじゃない――――――

無言で、ガイが踵を返す。その背に、穏やかな声が掛る。

「ガイ」
「…」
「姫を…ミルヴァーナ様を救ってくれた事、心から感謝している」
ありがとう。
そう告げたアレクを、あたしは思わず見返して絶句した。
なんて…なんて顔してんの…
今まで見てきた笑顔が、もうすべて帳消しになるくらいの。
穏やかなだけでは無い。綺麗なだけでは無い。
清濁を呑みこんで、何もかもその胸の中に納めて。
それでも、何かを求めて闘う事を止めない、清冽な微笑みが其処にあった。

その十九（後書き）

二日続けての更新です。
こねくり回したあげく…なんとか、書けました。
ここで一度、夢から離れて、次回からは現実に戻ります。

その二十（前書き）

久しぶりに現実へもどりました。

その二十

日々、これ是々非々。
良い事はどうしたって良い事だし、悪い事はどっから見ても悪い事。
その理論に従って、感情ではなく道理に基づき適切に冷静に物事を判断――――――なんて、出来るか！！
今のあたしの心理状態は、あっちもこっちも、あれやこれやで大騒ぎ。
それもさ～　全部…とは言わないけど、本来なら逆立ちしたってあたしなんかが関係して良い話じゃ無いはずなんだよね～
まったく、なんだってこんな知らなくてもいい事を知っちゃうんだろう。しかも、中途半端に。

夢の中。
あたしの理想郷で有るべき世界は今、まさしく混沌の様相を呈している。
そもそも、こんなややこしい事態になるなんて、いったい誰が想像していただろう。いや、誰も――――って、あたし以外、あっちに行ってる人間は居ないんだけどね。

ともかく、状況を最初から整理してみよう。

あたしは現実では無い夢の世界で恋をした。この無謀すぎる恋の相手は、銀髪に紫の瞳の紛う事無き絶世の美丈夫たるアレクシーズ・ユノ・コルフィー様――――　略してアレク、ね。でもアレクには、既に美しいお似合いの婚約者がいらっしゃって、この方こそが『スーベニアの蒼玉』と謳われる王家の姫君ミルヴァーナ姫。しかし、ミルヴァーナ姫は実はアレクでは無い人に心を寄せていて、それが

アレクの親友と言うべき第二騎士団団長のガイ・ヒューバー。そんでもって多分ガイは――――――　これは絶対、姫の事を憎からず思っている。

この辺は女の勘だけど、多分間違いないと思う。むしろ、それぐらい解らんでどうする！？って感じですかね。――――――　でも、たった一人。多分全然わかって無いお子様にとり付いてるんだよね、あたしって。

まあ、年齢以上に純粋でお子様なユーリーだからこそ、ガイもあんな風に感情を隠そうとしないで話してくれてるのかもしれないけれど、そんな純真な青少年の中に、こんなヒネこびたおねーさんが入っているなんて、流石のガイも、きっとこれっぽっちも思ってないんだろうな～　なんか、世の中の不条理を感じるぞ。

徒然なるままに、思わずメモ書きしてしまった手元の紙をじっと見る。矢印が一方通行の様に並ぶメモの中で、両思いなのはミルヴァーナ様とガイだけだ。

しかし、彼らの恋は前途多難。何しろ相手は正真正銘のお姫様で、しかも親友の婚約者――――――　お互いがお互いの気持ちを知らないってトコで、まだ、恋じゃないのかもしれないけど。

少なくとも、ガイからどうこうしようって、簡単にできる相手じゃない。姫のほうだって、まだ、二度しかお目に掛った事無いけれど、あの感じじゃ、良くあるわがままな何にも考えてないお姫様って方ではなさそうだから、立場を弁えず自分から動くなんてことは出来ないだろう。

つまり、どう転んでも実りそうにない恋なのだ。しっかり両思いで有る筈なのに。

このままの状態なら、きっと、この二人の恋は実らないままだと思うのに、何故か一つだけとんでもない不確定要素が出てきてる。
――――――　アレク。そう、問題はアレクなんだよね。
この人が読めない。どうやっても、あたしでも読み切れない。
どうやら、ユーリーには相当気を許してるみたいで、色々な顔を見せてくれてはいるけれど、肝心の所はあの美貌が造り出す微笑みの影に隠れてしまう。まるで、天使の様なあの微笑みに――――――

ああ！　思いだしてしまったではないの！　あの顔は、やっぱり凶器よ！　凶器！！
特に、昨夜見た最後の微笑み。あれは、壮絶なまでに美しく力を秘めた、まさにとんでもない顔だった。
天使は天使でも、慈悲深いとか包み込む様なとか、そう言った柔らかなものでは無くて。
戦う者。魔を払う者。
そう言った意味合いでの天の御使い。刀をその手に捧げ持つと言う大天使（アークエンジェル）もかくやと思わせるような、凄絶にして華麗、峻烈にして清廉。あんな顔で、にっこりと微笑まれたりなんかしたら……

きゃあ～～～～～！！！！！　もう、あたしじゃなくったってその場で卒倒、間違いなし、ではありませんか！
問い詰めるとか、問いただすとか…そんなもん、出来る筈が無いでしょうが！！

……はい、え～っと、ごめんなさい。本当にぶっ倒れてしまったのかどうなのか、実はあたし、アレクの微笑みを見た後からの記憶が無いんだよね。その後、すぐ目覚ましが鳴って飛び起きたから、多分ちょうど現実（こっち）へ帰ってくる時間だったんだと思うけど。
でも、実際本当にぶっ倒れてたとしても驚かない。それぐらい凶悪

な（？）顔だったぞ、あれは。うん！あたしは絶対悪くない！
でも、そんなことになったら、ユーリーはって？
ご心配ありがとう。実は全然大丈夫。
たとえあたしがぶっ倒れても、あたしが居るのはあくまでユーリーの意識の中だけだから、あたしはその中でぶっ倒れ様が、叫ぼうが、ユーリーには何の影響も無いのさ、えへん。一応、曲がりなりにもユーリーは男ですからね。アレクの超強力微笑み光線も、ぼーっと一瞬見惚れるだけで、ぶっ倒れたりする前に我に返ってると思う――――多分。
実際あたしの意識がない時でも、ユーリー（あのこ）の時間は普通にしっかり流れてるから、心配無い…と思うけどな。うん、多分大丈夫。ええ、きっと！　ユーリーまで一緒になってぶっ倒れたりなんかしてな…
…いと思う。た、多分…

…今度、あっち行く時がちょっとばかし恐ろしいな…

「――――さん」
「……」
「…べさん、神部さん」
「――――へ…？」
「神部さん、大丈夫ですか？」

いきなりのどアップ。可愛い丸顔があたしの鼻先十センチの場所にある。
え？え？え？　あれ…？

「え？　よーこちゃん？　え？あれ？」
「どうしたんですか？　もうすぐお昼休み終わっちゃいますよ」

慌てて周囲を見回す。そんなことしなくても、わかってる筈。此処は、あたしの職場の事務室に決まってます。
こーゆーのって人間の変な習性かしら。わかっててもこうやって確認したくなっちゃわない？

「あ、ごめん。ぼーっとしてた」

そう言いながらさりげなく手元のメモを隠す。いや、人が見たら意味不明だと思うけど、それでもね、うん、なんとなく。

「珍しいですね～」

神部さんがぼーっとしてるなんて。
不自然なあたしの動きとか、きっと解って無いはずないのに、コロコロと笑って陽子ちゃんが応えてくれる。

ああ…　よーこちゃんのこの笑顔も、癒しだよね。なんか向日葵の花を見てるみたいにほんわかまったりしちゃうんだもん。それでも、その笑顔でしっかり意識を日常に取り戻す。いかんいかん。此処、職場だよ。いっつまでも、どうしようもないこと考えてたらダメじゃない。シャンとしないとシャンと！

だって、思わずトリップしてしまうくらい昨夜のアレクは凶悪だったんだもん。当分、白昼夢を見そう。
お陰で…と言うか元々と言うか、昨夜はアレクに何の質問も出来なかった。（当たり前だけど）
だからあっちの世界の問題は、こうしてあたしの中で棚上げのまま。
ああ、歯がゆいったらありゃしない。
例えなんにも出来ないにしても、もうちっとこう、事情と言うか、

状況と言うか、そう言うモンが解ってれば気持ちの持っていき様もあるじゃないか。不完全燃焼にもほどが有る！

いっつも思うんだけど、ユーリー以外の目線でもあっちの世界が覗けたら、もっともっといろんな事が解って動き様もあるのにな～普通、ファンタジーっつったら、もうちっと親切なモンでない？誰だ、一体こういう事態を引き起こしたのは。

改めて言おう。
絶対、あたしの本意じゃないぞ、この状況！

「――――　有里！！」

思わず、両の手を握り締めたあたしを狙った様に、バン！と思いっきり音を立ててドアが開く。

「有里！匿（かくま）え！」

――――　また、あんたかよ…

声聞かなくても解る。こんな事するバカは、この病院（ここ）には一人しか居ないんだから。

「剛史！静かに！　もうちっと、大人しく入ってこられないの！唯でさえあんたは図体がでかいんだから、力一杯ドアなんぞ開けたら、そんなもろいドアノブなんぞ一発でやられちまうじゃないの。大体此処は、あんたの為の避難所じゃないのよ！　一々一々、逃げてくんな！」
「ふざけんな！　ここ以外に、誰が匿ってくれるっていうんだ！」

大真面目に――――――　言ってて情けなくないか？　それ…

コンコン！

あたしたちの怒鳴り合いを抑える様に、いきなり響いた軽やかなノックの音。

おお！　これって、デジャブー？。

「失礼します」

涼やかな美声と共に入ってきたのは――――――　あれ？　真由美じゃないの？

「山本先生。レファレンスのお時間が迫っています。一緒においで下さいますか？」

にっこり。

わおっ！　これはこれは、何とも知的な雰囲気美人さんではないの。

え～と、この方は…

「生方（うぶかた）さん…　い、今行こうかな～と…」

しどろもどろの剛史の声に、思わずそうだったと手を打ってしまう。

確か、外科外来の…え～と、主任さんじゃなかったっけ？　外来とはあんまり接点が無いから、どうしても名前がうろ覚え…　そうか。生方さんとおっしゃるのか。よし。これを機会に覚えておこう。

「お急ぎくださいますか？　午後から橋本先生がお出かけになられますので、それまでに済ませてしまいませんと」

「は、はい！　すみません。すぐ行きます」

「では、ぜひご一緒に。どうせ同じ方向ですもの」

こんな美人さんを道行きですか？　剛史の奴め、なんてうらやましい…

と思いつつ、見返した奴の顔は――――　あらら、まるでどっかへひったてられる悪ガキの様ではないの。

「それでは、失礼いたします」

最後まで、完璧なご挨拶を残して生方さんは剛史をひったてて（うん。なんかそんな感じだった）鮮やかに退場して行く。

コンコン！！

「失礼します。山本先生はこちらに…って、いないの？」

なんで？

――――　いや、何でも何も。

「真由美、何であんたまで此処に剛史が居るって思うのよ」

「え？其処つっこむトコ？　ここに居るに決まってるじゃない――――　で、居るの？居ないの？」

ちょっと真由美さん。そのセリフ思わず突っ込み返しをしたくなったんだけど。

「…今さっきまでいたんだけどね」

「ほら。やっぱり居たんじゃない。で、どこ？」

「居た事は居たけど、ほんの二・三分前に、外科外来の、なんとかって美人さんに拉致された」

――――― って言っちゃっていいよね？　あの場合。

「え？　一足遅かった？！　くやしい～～～！！　あそこで、あの患者さんに掴まんなかったら、ゲット出来たのに！」

――――― おいおい…

ゲットって、奴は珍獣か何かなのか？　身もだえしながら悔しがるもんでもないだろうに――――― しっかし、相変わらずフェロモンぶっちぎりだね、あんたってば。

「外来もついに参戦か…　これは性根据えてかかんないと駄目ね。――――― 有里！　あんたはあたしに協力してくれんのよね！？」

「…そんな約束したっけ？」

「もう！　まったく友達甲斐がないったら！　――――― と、ヤバい！　昼休み終わっちゃう！　有里！　また後で！」

バタバタバタ…

なんて慌ただしい登場なんだか。まったくいくら夏だからって、台風でもあるまいに。

「……いったい何が起こってんの…？」

――――― ええ、確かに。真由美が剛史を狙ってるってのは解ってたけどね。

それ以外？　え？　なんか、他の人たちまでがこんなに騒がしいの？

何ともいぶかしげに首をひねり続けるあたしを見て、よーこちゃんがクスクスと笑いだす。

「それはですね～　あの、神部さんと平川さんの所為(せい)です～」
「え？あたし？」

真由美は解るけど、あたしも？

「あのですね～　山本先生は今まで、神部さんのものだって暗黙の了解が有りまして～　看護師さんたちもおおっぴらにアプローチしてなかったんです～」

――――――　ど、ビックリ…

「も、もの？」
「はい～　売約済みって事ですね～」
「ば、売約済み…？」

って、いったい誰が、誰の！

「もちろん、山本先生が神部さんのです～」

どっかん！

だから……

――――――　どこをどうしたらそんな話になってんだ！

「でも、平川さんって神部さんと仲良いじゃないですか～　一緒に呑みに行ったりしてるって聞きましたけど～」

…確かに、あの後何度も呑みには行った。あたし的には、真由美は

決して嫌いじゃない。

「平川さん～　それでも山本先生追っかけてるし～　で、神部さん～　そんな平川さんと仲良くしてるから～　やっぱり山本先生はフリーなんだって事に病院内ではなりまして～」

……やっぱりも何も、奴はずっと、少なくともあたしからはフリーだが！

「看護師さんたち、本気になっちゃったみたいなんです～」

……なに…？　なんですと…？　これまでの剛史のあのモテっぷりで？

「…いままで、みなさん本気で無かった…？」

「はい～　その通りです～」

ニコニコニコ。語尾にハートマークがついてるような。

……よーこちゃん、あんたの笑顔がなんか怖い

「今までは～　まあその、アイドルみたいなもんで～　本気で落とそうって人はいなかったみたいなんですけどね～　でも平川さんで～　解禁？　みたいな？」

……なに、その、鮎の解禁日みたいな言い方は！

「大変みたいですよ～　山本先生」

もう毎日、すっごく逃げ回ってるみたいで。

「モテルのも大変ですね～」

にこにこにっこり。止めの笑顔。

人畜無害な顔をして。…よーこちゃん、もしかして誰かさんと同類ですか？

しっかし、それってまさしく。

「――――――　ハーレム状態？」

それはなんて、うらやましい…

「――――――　山本先生がその気にならなきゃ、ハーレムなんかにならないわよ」

背後から突然かかったお声は、さっき思わず思い浮かべてしまったこの部屋の司令官殿のもの。

「深山さん」

「もう、仕方が無いわね、若い子たちは…　まあ、仕事に支障が出ない限りは注意する必要もないし」

かる～く、まるでわざとの様な溜息一つ。

「これは、山本先生に頑張ってもらうしかないわね」

「そうですね～」

にっこり。そしてよーこちゃんと二人して、深山さんは微笑みあう。

うわっ…　やっぱりダブルで怖い…

「…一体、なに、がんばるんですか？」

恐る恐る、それでも一応お伺いを立ててみる。

「え～？　もちろん、捕まらない様によ」

「そうですよ～　これは、絶対条件ですし～」

「だから、なんで？」

だって、そこがわからない。

剛史は今フリーなんだし、人間モテてる時が花って言うもんね。いい年なんだからこの際、可愛い彼女の一人や二人…

「作ったっていいと思うけどな」

いや、これは真面目に――――――　で、何で二人して、其処で溜息を付くんですか！

「…鈍い鈍いと思ってたけど、まさか此処までとは…」

「なんか、別の意味で尊敬しちゃいます～」

…お二人とも、何言ってらっしゃるんですか？

「ま、こればっかりは神部ちゃんばっかりが悪い訳じゃないしねぇ」

「そうですね～」

まったく、だらしないんだから。

そう言いきった深山さんのエールは、いったい誰への言葉だろう。

――――――　でも、こうして好きな人に好きって言える。自由に自分でアプローチできる。その事がどれほど幸せなことか、皆わかっているんだろうか。

好きとすら口に出せない。
傍に居る事も出来ない。

ガイは、ミルヴァーナ姫は、今、どんな気持ちでいるんだろう。
そして、彼は――――――

アレク。
あの微笑みに、気持ちの全てを隠してしまうあの人は、誰を思っているんだろう。
いま、誰をその心に住まわせているんだろう。

そしてそれは――――――

あたしでは、有り得ないのだ。絶対に。

その二十（後書き）

沢山の評価並びにお気に入り登録ありがとうございます！
本当に久しぶりに現実を書いた気がします。
この後ですが、少し更新が伸びるかと…　詳しくは活動報告かブログにて。ゆっくりですがこれからもよろしくお願いいたします。

その二十一（前書き）

思ったより時間かかってしまいました。再開いたします。

その二十一

「――――――で？」
「で？」
「どうなってんの？そっちの状況ってば」

そう言いながら、手にしたジョッキを一気に煽る。
くーっ！　駆けつけ一杯のビールは最高！　五臓六腑に染みわたるってこういう事を言うんだよね。
すきっぱらの胃にダイレクトに来るもんね。あんまり身体にや良くないって解ってても止められんないわ。

「う～～ん…　こんなにもライバルがいるとは思わなかったってトコ？」

結構苦戦。
そう言いながら、同じ様にジョッキを一気飲みしているのは此処のところ、妙にお仲間じみている平川真由美サン。場所は言わずと知れたいつもの居酒屋。

「――――――て言うか。最初に思ってた以上にあっちからこっちから、邪魔なのがうじゃうじゃうじゃうじゃ出て来てるって感じ？　山本センセってモテんのね～　今さらだけど」
「……それは、あたしもビックリした」

確かに、奴が最初に赴任してきた時から、こりゃ～ヤバいかな？とは思ってたんだけどね。
昔から見慣れ続けた顔の造作はともかくも、たっぱはあるし若いし、曲がりなりにもお医者様。三拍子、いや四拍子ぐらいは配偶者とし

ての条件は整ってるもんね。しかも病院はどちらかと言うと女の比率が高いって相場は決まってるもんだし。

「此処の所にフィーバーぶりはちょっと半端無いわね。改めてびっくりって感じ？」

「…あのね…」

バタン！とわざとのようにテーブルに突っ伏した真由美から、低―い声が降ってくる。

「今更、あんたがそれを言う…？」

座っていたカウンターの椅子の上、くるりと身体を廻して真由美はあたしにその指を付きつける。

「いっとくけど、そんな事へーぜんと口にしてんのはあんただけだかんね！　まったく、この鈍チンが！」

おいおい。人を指さすのはマナー違反なんじゃないのんかい？

「第一フィーバーって何よ、フィーバーって。あんた、言語センス古過ぎ！」

…其処突っ込む？　って言うか、

「だって、剛史だよ？　あの剛史」

まったく、あんなのの何処が良いんだか…

独り言の様にジョッキに消えたあたしの言葉を、耳ざとくも拾い上げたらしく、真由美が思いっきりの溜息を付く。

「改めて、なんであんたにこんな事言わなきゃなんないのか、あたしにはそっちの方がわかんないんだけど！　――――　いい？　山本先生ってば凄いのよ。地方とはいえ国立大の医学部にストレート合格。さらに、しっかり医師免許も一発合格。研究室じゃ抜群の器用さで様々な実験に関った挙句、残ってくれって懇願する教授陣を後目に臨床を希望するや、研修が終わったらその全てを振り切ってさっさと地元への就職を決めてリターンしたって話じゃないの！」

「え？　そうなの？」

「そうなの！――――――　ってか、マジ、知らなかったの？！」

「えっと…」

ははは…　全然存じ上げません。

「…それって、ホントに剛史の事？」

「ホントもホント！　なに？其処まで信用無いの？！」

え～～っと…　ごめんなさい。真面目にありません。

……結構凄かったんだね、剛史ってば。

「で、何でそんな事あんたが知ってんの？」

「これはね！　常識の範囲なの！常識の！！」

――――――　そうか。個人情報がこんなにも流れてしまうのは常識の範囲なのか…

妙な所で今さらながら感心しているあたしは、結構この時点で酔っちゃってるね、きっと。

そんなあたしを後目に、真由美は一人でヒートアップ。

「しかも、顔だちはそれなりで、性格も言う事無し！　腕も良いから患者の評判も悪くないと来た日には、これでモテなかったらそれはそれで変でしょうが！」
「顔と性格に反対票一票」
「どんだけ面食いなの！あんたってば！！」

ぜーっぜーっぜーっ…
息、切れてますぜ、おねーさん。

「別にあたしゃ面食いって訳じゃないと思うんですが…」
「自覚が無いからなお悪いわ！」

いや、自覚はしてますってば…　――――――　でもね。あたしはあのアレクに見慣れてる人間なんですの。あの人間離れした凄まじいまでの美貌を、此処一年ばかし身近で拝察し続けてきた人間なんですってば。アレクのあの月さえも裸足で逃げだす様な美しさに比べれば、たとえどんなイケメンだって…

――――　ああ見せたい！　写真持って見せてやりたい！　それこそ、全世界中にでも見せびらかしてやりたい！！　これがね～　これがあたしの好きな人なんだよ～って！　そ、それが出来ればこんな苦労は…！！

一人、とんでもなく不可能な事を、思わず知らずつらつら考えてしまったあたしを見ながら、真由美が大きなため息をまたひとつ。

「――――――　あ～あ。ま～さか、こんな事になるとはねぇ～　センセ落とすより、周りのライバル蹴飛ばす方が大変なんて思ってもみなかったわ」

ぐびっ！
おい…　何時の間に日本酒なんぞ注文してんだ。しかも冷酒。小さなグラスにガラスの徳利から少し黄色がかった透明な液体が惜しげもなく注がれる。

「それ、なに？」
「久保田」
「ずるい！　大将！あたしにもグラス！」

ぐびっ…
ううー…　美味しい…
水よりもまったりとして、しかもさらっとのどを焼く様な呑み口が…　れ、冷酒、さいこー！

その二十一（後書き）

ようやく更新出来ました。今回は少し中途半端…と言うより前振りです。この次からこのターンのメインへ入ります。
でも、頑張った…と思う。思いたい。一応予告通り五話分…なんとか、なりそうなところまで持ってきました。
この後８／３０．９／１．９／３．９／５に一話ずつ更新していく予定です。とりあえず、きりのいいところまで…
５日の分以外は、後書を付けずに更新していくつもりですので、ここで、注意書き。シリアス…とまではいかないと思いますが、精神的にキツイシーンなど出てくると思います。どうかご了承ください。
何時の間にか、ユニーク４００００超えさせて頂いてます。また、お気に入り登録や評価。凄く凄く嬉しいです。本当に励みになります。ありがとうございました。

その二十二

ぐびっ…ぐびっ…っと差しつ差されつ。こうやって、誰かと呑むお酒って、実に美味いんだよね。もちろん、美味しい肴が一緒にあって、だけれども。

どうやら此処いらへんの波長が、真由美とはぴったりと合うんだよね～　どうやら、あっちもそう思ってるみたいで、少しだけとろんとしたその顔は実に実に色っぽいのだけど――――　この顔は、どうやら仲間用の顔なんだよね、真由美にとって。いっつもの造った色気顔よりあたしはこっちの方がすんごく可愛いと思うんだけどな～　ほんの少し目じりが下がって――――　そんでもってそのお口が凄く軽くなるんだ、この人は。

「…しっかし…」
「え？」
「あんまりじゃない～？」
「ん～？　な～に～？」
「『な～に～？』じゃないわよ～！　き～てよ！　き～てるでしょ？　あたしの！あたしのライバルが増えたって理由！　此処んトコへ来て、思いっきりライバルが増えた理由！　その理由が、あんたと、こうして差しで呑んでるからなんだって……　可笑しくない？」
ほいほい。本当に酔ってきてますね、おねーさん。軽いだけじゃなくて、絡んできてますよ…

「……そこんとこは心底、本当に同意する。あたしゃ、こうやってあんたと呑むの辞めるつもりはないんだけど…あんたは？」
「恋とお酒は別でしょう！　あたしは美味しく呑みたいの！」

「それは重畳。さしで付き合える呑み仲間は貴重だもんね」
「そうそう！　美味しく呑まなきゃお酒に失礼だもの！」

決して、『友情』とかって言っちゃわないのがこの際お互い様ってとこだけどね。

「……しっかし、あたしとあんたとケンカしないだけで、剛史がフリーで解禁ってどうよ。いったい、どう思われてたの？あたしたちって」
「え？　今さらあんたがそれを言う？」

真由美サン…　お願いだから、心底ビックリした顔しないで。

「だって、剛史だよ？」

あたしと奴との間にあるのは、ホントに唯の腐れ縁。

「確かに、あいつと兄貴は今でもしょっちゅうつるみまくってる悪友同士だけどさ。あたしと奴の間にあるのは良く言えば幼馴染。悪く言ったら――――――　不倶戴天（ふぐたいてん）の敵同士？」
「ふ、ふぐ？　フグが敵ってなによ！」
「いや、その河豚じゃなくて。――――――　言わば、どうやったって相いれない間柄…ってとこ？」
「……いったい何時の時代の人間なのよ、あんたってば…」

え～～！？　そんな呆れた風に言わないで。
こう言う言葉って、もう、本当に使わないのかな～　確かにあたしゃ、時代劇とか時代物の小説とかが大好きだけど、まさか通じなくなってるとは思わなかった。結構便利なのにな～　『ここぞ！』って時に凄く使いやすいセリフって多いんだぞ！　通じなかったら意

味無いけどさ。
そんな風にぶつぶつ言語の不備を嘆き続けるあたしを生緩い目線で撫でながら、真由美が大きく息を吐く。

「あのね。そうやって、何の遠慮も無く口ゲンカしてるって事がもう既に問題でしょうが」
「え？なんで？」
「そんな風に、何の遠慮も無く言いたい事を言いあえるなんて、よっぽど仲がよくなきゃありえないでしょ？　普通」
「いや、これは、昔からの習慣で…」

だって、ほっといたらいっつまでも言いたい放題言われっぱなしなんだもん。

「自己防衛よ！自己防衛！　そんな良いもんじゃないってば！」

思わず力一杯力説したってのに…　――――――　なに？その生ぬるいままの眼は。

「あんたがどう言うつもりで言ってたとしてもね～…　――――――ぶっちゃけ、山本センセとあんたってば、それこそ十何年連れ添った夫婦みたいなもんだわよ、傍から見たら」

だ～から、今まで誰も手ぇ出さなかったの。

「……」

…なんかもう、反論する気も起きやしない…

「夫婦ってなによ、夫婦って…」

好きも嫌いもすっ飛ばして夫婦ってか…？

「あたしの意志とか好みとか、そーゆーのは何処行っちゃってんのよ…」

誰ひとり聞く気も無いんかい。あたしにだってちゃ～んと好みってもんが…

「あのさぁ、一度真面目に聞いてみたかったんだけど…」

思いっきり溜めてから、真由美が言ってのけたのが。

「あんた、本当にセンセの事好きじゃないの？」

「す…！」

…きじゃない！　って、思わず言いかけたんだけど。

「…なんで、そーゆー話になんの」

そうよ…！　あたしと、あいつはそういう風な艶っぽい間柄では絶対なくて！

「あれは敵！　あたしの天敵！」

そう。唯の腐れ縁！　お知り合いでしかないんだから！

力説しまくるあたしを、真由美は心底胡乱な眼付で眺めてくる。

「――――――　もしかして、あんたってそっち系？」

「……聞きたくないけど、そっちって？」

「ゆり」
「は？」
「百合って言ったら、あれでしょうーが。薔薇の反対？」
「ば、バラって…まさか…」
「おお！そっちはわかるのね。あっ！そう言えば、あんたの名前もゆりだっけ？　もしそうなら、『名は体を表す』？　だって、あれだけの物件にあんなにアピールされて、なびかないって普通有り得ない！」
「ア、アピールなんてされてない！！」
何処で！　誰が！　アピールなんかされてんの！？
「まあ、それは置いておいて。……ホントに違う？　そっち系」
――――――　それは、余りに、失礼だろうが！
「絶対に、ぜ～ったい、ありえない！！」
「――――――　そうよね～　なんたって、このあたしを口説いてこないんだもの。そっちの筈は無いわよね～」
コロコロコロコロ…　軽やかな笑い声が木霊する。どんだけ自分に自信が有るんだ、あんたは…
「でも、だとしたらますます不思議。山本センセでもダメ。あたしでも無いとすると…　もしかして、あんたって人外？」
――――――　それはあんまりな言い方ではないのんか…？
「あ、あたしにだって好きな人は居るんだから！！」

だから、思わず大声で叫んじゃった。
うわっ！ヤバい！　真由美が目の色変えて食いついてきたじゃないか！

「ほう！！　だれ！？」
「い、言わない！」
「良いじゃないの。聞かせてよ。あの山本センセに落ちないあんたの思い人。すんごくきょーみ、あるわ～～」

そんな興味、持たんでいい！

「い、や、だ！　あたしの事なんてほっとけば良いじゃない！」
「此処まで聞いたらほっとけない。それぐらい、あんただってわかるでしょうが」
「わかるか！　そんなもん！唯の野次馬根性でしょうが！」
「まあまあまあまあ、そのとおり。…で、だれ？　だれなのよ～誰にも言わないってば、教えてよ。放射線の高島さん？　ＭＲの鈴木さん？　それとも検査技師の…」
「だから、病院の人じゃないってば！」

あんたって、いったいどんだけ情報持ってんのよ！

「ＭＲなんて、薬局か医者以外、顔も知らないのが普通じゃないの！」
「だから、この程度の事は常識だって。何回言わせんのよ、まったく」

常識か？常識なのか？　こうやって並べられたって、顔と名前が一致しない、あたしみたいな人間だっているんだぞ～！

「んで、だれ？　何処のどなたなのかな～？　あんたみたいなのが惚れる男って」

にこにこにこ。…真由美サン…　…誰かに似て来ちゃ居ませんか？　その笑顔…

「…この辺の人じゃないもん」

「この辺の人じゃないって…あたしの知らない人？」

コクン…　これは本当。真由美だけじゃないよ。あたし以外は誰ひとり、知ってさえいない人。

「どんな人よ。いい男？」

「もっちろん！」

あの人は、あたしが大好きなアレクは。

「強くって、優しくって、背が高くって、頼りがいがあって、すごく、綺麗な人…」

そう。凄くすごく綺麗な人。

ああ、そうか。嬉しい…――――――　あたし、今、すごくうれしい。あたし、言いたかったんだ。誰かに知って欲しかったんだ。自分が、誰かを好きな事――――――　あたしが大好きなアレクの事を。

「あらら、ベタぼれね…」

呆れた様な真由美の顔も、自然、ゆるんでいくあたしの顔を止められない。そうだよ。あたし好きなの。あの人の事が大好きなの。

「でもね、ダメなの。婚約者がいるから」

にっこり、笑いながら。思わずそこまで言っちゃったあたしに、真由美が目を見開いちゃうのが解る。

「はあ？　どういうことよ、それ」

「だからね。その人には、もう婚約者がいてね」

「え？ちょっとなに？それって片思い…まあ、どんなもんでも最初は片思いだけど…え？なに？　全然見込みが無いって事？」

「うん。そう」

まあ、見込みが無いのはそれだけが理由じゃないんだけどね。

「その婚約者って、金の髪に銀の髪で、目は蒼くって凄く綺麗でね。アレクは銀の髪だから二人並ぶと凄くお似合いで…」

「ちょ、ちょっと待った！」

調子に乗っていたあたしは、真由美の声に目をぱちくり。

「金髪？」

「うん」

「青い目に銀髪…？」

「うん…」

「アレクって…？」

「あ…」

しまった…！！

真由美の視線の余りの冷たさに我に返る。初めて他人（ひと）にアレクの事話す事が出来たからって、ついついついつい調子にのっちゃたよ～

！！

こ、こんなこと、聞かされたら普通は…

「…有里…ちょっと聞くけど、もしかして俳優とかって言わないわよね？」

「ち、ちがう！」

「…手が届かないって、言う所の二次元とか、漫画とか、まさかと思うけどアニメのキャラクターとかって言わないわよね！怒るわよ！！」

ああ、やっぱり～～～！！

「違う！違うって！　ちゃんと生きてる人だし、会話もだってしてるもの！　向こうだって、きちんとあたしの事知ってるし！」

いや、正確にはあたしの事を知ってる訳じゃないけれど。

「――――　どう言う事よ」

「…」

「有里」

「…言いたくない」

これ以上、言いたくない。

どう言ったって、どんなに言葉を尽くしたって――――――――　きっと、わかってなんかもらえない。

当り前じゃないもの。

普通じゃないもの。

それは、誰よりもあたし自身が解ってる――――――

「…わかったわ。聞かない」

「え？」
「あたしには相手が誰かなんてわかんないけど、とりあえずあんたは真剣なのね？」

コクリ…
真由美の言葉に頷くしか出来ない。え…？　何で…？

「あの…真由美…？」
「実らないって解ってんなら、もう少し現実見なさいって…ホントなら言うべき何だろうけど――――――　あんた、本気そうなんだもの」

――――――　驚いた…
まさか、こんな言葉が返ってくるなんて。

「解るの…？」
「それぐらい解るわよ。まだ、納得してる訳じゃないけどね」

くいっ！
忘れられてて少し温もった冷酒を、真由美が一口煽る。
綺麗に赤く彩られた唇が、ほんの少しだけ濡れてその形を変える。

「だって、相手がどんな人であれ、好きな気持ちは変えられないでしょ？」
「うん…」

それは、紛れもなく笑みを浮かべていて。その笑みが、もの凄く切なくてあたしは思わず顔を伏せる。

「…気持ちが変えられたら楽なんだろうけど…」

「真由美？」
「こればっかしは…　引きずっちゃうよね」

何を…？――――――　これって、聞いちゃいけないんだろうな。
解ってもらえると思わなかった。理解してもらえると思わなかったけど、もしかして…

「――――――　でも、どうせ失恋するって解ってんのに、あんたもばかよね～」
「――――――！　バカって言うな！」
「もしかして、M？」
「誰が、Mか～～～！！」

あの、空気が消える。
でも、きっとこのままでいいんだろう、あたしたちは。

「完全に失恋した時は言いなさいよね。しっかり相手の事吐かせた後愚痴ぐらいは聞いてあげるから、あんたのおごりで」
「こんの鬼畜！」
「なんとでも」

クスッ…と笑った真由美の顔は、いつも通りの色っぽい何処か挑戦的なままの笑みで。

だからあたしは安心した。
自分の気持ちに安心した。

その二十二（後書き）

ＭＲ～メディカル・リプレゼンタティブ（Ｍｅｄｉｃａｌ　Ｒｅｐｒｅｓｅｎｔａｔｉｖｅ）の頭文字をとったもので、医薬品メーカーの医薬情報担当者のこと。

その二十三

呑んで食べて騒いで。
たった二人だけど、女同士の飲み会なんてきっとそんなものなのだ。
おとなし過ぎる洒落たバーなんて、いらない。美味しい料理とお酒があったら、そこで何時間でもおしゃべりして居られる。だから、適度に騒がしいこういう居酒屋の方がいいんだよね、飲み会は。
――――――な～んて。どっかの小説に出てくるようなデートに相応しいトコなんて言った事無いんだけど。う～ん…　ヘタしたら、男とデートなんてした事の無い、あたしみたいな女のやっかみと取れない事も無いか。
まあ、よいよい。今日も楽しく呑めたことだし。
「も～いっけんいく～？」
「いや～もうむりっしょ！　あしたもしごと～」
けらけら笑いながら言う真由美は、いっつもの女を寄せ付けないようなお色気むんむんのおねーさんの風情はない。いや、別の意味で、寸ごく色っぽいけんど、でも、この色っぽさは柔らかくって可愛くって、あたしゃ、大好きだね。女一人が見物するには勿体ないくらいの可愛さなんだが…　奈何せん、こいつの男に関するレーダーは半端無いからなぁ～　あ～誰かに見せびらかしたい！　あたしの綺麗なおねーさん好きの血が騒ぐ！
こんなことを真面目に考えている辺り、あたしも相当酔ってんだろう、自覚ないけど。
只今、しっかり午後十一時。流石にもう、同じ場所で粘り続けるっ

て訳にもいかなくなって、あたしたちは思いっきり長っ尻になってしまった居酒屋を後にする。常連だからって、こう言ったお目こぼしが有るからほかの店行けなくなんのよね～　喋り出したら、長いんだから女は。

まだ宵の口っちゃ宵の口なんだけど、八時くらいからだから…もう、流石にね。いい加減アルコールにも飽きようかってとこだ。

「かし～かえるなら～あまいもんがいい！　パフェ！　パフェ、食べたい！」

お酒の後は甘いものでしょう！　まだ、話足りない感じもあるから、思わず真由美を誘っちゃう。

「じょーだん！　こんな時間からそんなもんたべたら、しぼういっちょくせんじゃない！きゃっかよ！きゃっか！！」

「え～？なんで～？　あたしはともかく、あんたにだいえっとなんてひつようないじゃん！」

「それなりに、メンテナンスはひつようなの！」

あ～そ～だった～…　美人は美人なりに、ちゃ～んと管理が大変だって前に言ってたっけ。

気にしなくて良い様なナイスバディの方が気にして、気にしなきゃなんない筈のあたしみたいなのが無頓着って…　あ、そうか。無頓着だから、ナイスバディになんないのか。納得、納得。

しっかし、真由美。あんたなんか言葉がひらがなっぽくない？　酔ってるね。酔ってるよね。

「んじゃ、しょーがない！　帰りますか～　…で、どーする？」

「ど～するってなにが～？」

「帰りよ帰り～　もう、この時間なら…タクちゃん呼ぶ～？」

タクちゃん――――――　この場合はタクシーね。

「え～！？歩いてかえろ～よ～」

「いや、あたしはともかく、あんたを歩かせんのはヤダ！」

「なんで？」

「おおかみさん、食ってくださいって言ってるようなもんだもん！危なっかしくてやってらんない！」

ほら、あたしってばちゃんと帰りの心配してるぞ！真由美程には酔ってないぞ～　えへん！

「でも～！　もったいない、もったいない！！　バスで～歩く～！」

「だ～め！　まいかい、ごねるな！　ダメったらだめ！　あんたんち、町はずれじゃん。なんかあったら寝覚めがわるい！」

「危ないのはあんたもいっしょ！」

「あたしは、い～の！」

「だ～め、だめ！　いっしょだよ～ん。あんたも乗ってくんじゃなきゃや～だ～」

「あんたんちと、あたしんちは、思いっきりの逆方向。いっしょになんて、むりだよ～ん」

「んじゃあ、二台。二台捕まえる。大通りに出れば、捕まるでしょ？」

「じゃあ、真由美～先に乗ってくんだよ～　あ～たの方が危ないから」

「だ～から、いっしょだってば！　ひとりでおいとけないし！」

「だいじょうぶ！　こんなあかるいし！」

「いっつもより、おそいの！」

今日は、真由美がすごく気にするな～　たしかに、いつもより、遅

い時間だけどさ～

「だいじょうぶだって。だって、あたし…」

「――――――　お前は俺が送っていく」

――――――――　へ？

あたしだよ～と言いかけたセリフを遮るように、いきなり低い声が被さってきて驚く。反射的に振り向いた視界の中に背の高い黒い影。一瞬ビクリとしちゃったけど、すぐ気付く。余りに見慣れたシルエットだ。

「剛史、ビックリすんじゃないの。なんでいるの？」

「…そこで呑んでた」

そこ？　其処って…同じ店？　あらら…全くすっきり気が付かなかったじゃん。

「や～だ～！　声ぐらいかけてくれたらいいのに～　な～に？　秘密ぶって、や～らし～」

は～い。ごめんなさ～い。酔ってま～す。絡み酒って程じゃないけど、絡んでま～す。とまりませ～ん。

「…こいつは俺が責任もって連れて帰るから。平川さんはタクシーひろって」

「は、はい…」

え～と…　なんかおこってる？　声、かたい…かな？――――――

と言うか、いっつものヘタレ具合が嘘の様に、人に命令を下す声…

に、なってる…
医者の声？　…なんというか、逆らえないって感じ…

大通りのこの時間になっても途切れないライトに向かって、言われた様に真由美が手を上げる。数分も待たないうちに、すーっと一台のタクシーが目の前に横付ける。

「じゃあ、これタクシー代。お釣りは良いから」
「え？　あの山本先生？」
「お疲れさまでした平川さん。また、病院でね」
「は、はい」
「お前はこっち」

有無を言わさない口調で真由美をタクシーに押し込んで、思わず一緒に乗ろうとしたあたしの腕はグイッと強く剛史の方に引っ張られる。

「い、いたいいたい！」
「どいてろ。あぶない」
「そんな引っ張んなくったって…　あ～真由美！気を付けて…」
「平川さんなら、お前よりよっぽどしっかりしてる。大丈夫だ」
「なんつー事言うのよ！　あ！あ！あ！…あ～ん。行っちゃったじゃない！」
「だから、大丈夫だと言ってる。お前はこっちだ」

ぐいぐい。力を込めて右の二の腕を引っ張られる。い～たい！いたいよ！バカ力！

「な～に？　なんなの～　そっち裏通りじゃん。そんなとこにタクシーなんて…」

「歩く」
「へ？」
「家まで歩いて送る。付き合え」
歩くって…　ええ？家まで…　家まで？
やだ！　徒歩二十分！！
「た、剛史！　剛史！　どうしたの？　あ、歩くって…　とお…とおいよ！　やだ！　お金…お金無いなら、あたし…」
「バカか！」
あ、地雷？
「話が有る！　歩きながらでいい。つきあえ！」
医者に、言っちゃいけない一言だったかも…
話が有ると言いながら。
あたしたちは無言で夜の街を歩く。
昼間なら、何回となく歩いた事のある街並みなのに、暗く闇に沈んだ家並みは、何処か違う街の様で。
等間隔に並ぶ街灯の灯りは、決して完全な暗闇を造り出す事はない

けれど。だからこそ、人口の灯りと闇の境界が薄ぼんやりと浮かび上がる光景は、紛う事無くあたしにとっては非日常だ。

徒歩二十分の道なりは、決して遠いものではないけれど、こんな夜、あたしひとりだったらやっぱり怖くて歩けない。そんな道を剛史を二人歩いている。

話が有ると言っておきながら、車道側を黙々と歩く剛史を横目でちらっと盗み見る。

何だろう。何考えてるんだろう。
普段はそれほど感じない剛史の顔だちのきつさが、今は何の覆いも無いままその眼が真っ直ぐに前を見ている。

強い視線。いつもは押され気味だった筈の真由美すらも従わせた声音。

――――――男だ。

此処にいるのは、間違いなく一人の男だ。

あたしはこの時初めて、横に歩く幼馴染を男の人だと認識した。

その二十四

夜の街を剛史と歩く。
てくてくてくてく…ただひたすら歩く。
すぐ傍にいるのに、なんにもしゃべらずに。
てくてくてくてく…
ただひたすらに二人して歩く。

世間ではもう夏休みも終盤で。真夏の暑さはまだまだ空気の中に残っているけれど、時々流れる風の中に微かに秋の涼しさが混じっている様な気がする。夏は別に好きじゃないけど、こんな時は無性に夏が惜しくなる。

夏の終わりの宵闇の中を、ただ二人して歩く。

――――――　話が有るって言ってたのにな…

何ひとつしゃべってくれない剛史にいつもと違う気づまりな、居心地の悪さを感じてしまう。歩いている内に、あれほど飲んだ酔いもあらかた冷めて、妙に冴えた頭だけがこの事態を変に冷静に捕らえている。

そう言えば、剛史と並んで街を歩くなんて初めてかも。病院の中でだって、同じ方向むいて歩くなんて無かったもんね。
いっつも、怒鳴り合って、ののしり合って。ケンカ腰の言い争いばっかしだったから、こんな風に沈黙が続くと、困る。

――――――　気まずい…

何とも言えず、気まずい空気が、あたしを落ち着かなくさせる。
そんな空気に改めて考えてみれば、いつも切っ掛けを造るのは剛史の方で、あたしはそれに反発してさえいればよかったから。だから奴に黙りこまれると、あたしはもう、どうしていいか解らなくなる。だからと言って、あたしから話しかけるには剛史の顔が余りにも険しくて、今は声をかける事が良い事なのかすらわからない。

…おこってる？　――――――　怒ってるね。
でも、なんに？　あたしに？
あたしに、おこってんのかなぁ…　この状況だとそうみたいだけど、でも何で？
だって、今日はさっきとっ捕まるまで、職場でだって会う事無かったし。この前のケンカって言っても…　いつもの事しか思い浮かばない。

そうこうするうちに、余りにも見慣れた道筋にぶちあたる。
何時の間にか二十分経ってたみたい――――――　この角を、曲がればあたしんちだ。

「有里」
「は、はい！」

いきなり低く呼ばれた声に、条件反射で返事してしまう。

「やめろ」
「は？」
「やめろと言った」

――――――　な、なに？　何を言ってるんだ？　この男は。

「眼ェ覚ませ。くだらない事に捕われるのをやめろ」

低く告げられる言葉に見返したあたしを、向きを変え真正面から見据えて、奴は吐き捨てる様に怒鳴りつけた。

「いい加減大人になったらどうだ！　お前、もう二十五だろうが！」

「な…！」

なに！なんなの！　いきなり…いきなりなによ！

「なに…　何の話よ、いったい！　あたしは、あんたにそんな事言われるような筋合いは…」

「何が金髪だ！青い眼だ！　何時までも、子供みたいな夢見てんじゃねぇよ！　俳優だかなんだか知らねぇが、現実に居ない架空の人間追い駆けてどうする！　そんなもん疑似恋愛してるだけだろうが！」

「――――！」

――――　ま、まさか…

「あんた…　何言って…」

「いい加減、現実を見ろ！このばか！」

「な、何で…！　どこで！」

思わず叫んだ途端に気付く。

『其処で呑んでた』

其処で――――　おなじ、店で。

かーっ！と頬に血が上るのが解る。居たんだ…　あそこに、あの店に居たんだ…！

初めて、真由美にだけ打ち明けたあたしの秘密。聞いてた…？　聞いてた！　ひどい…　ひどいひどいひどい！

「盗み聞き…　盗み聞きしたのね！？　ひどい…ひどいじゃない！」
「あんな大声でしゃべってて、聞こえないはずないだろうが！」
「それでも、盗み聞きは盗み聞きよ！」

そう！　絶対に絶対に、誰にも聞かれたく無かったのに…
誰にも、知られたく無かったのに、寄りにも寄って、なんで――――！！

「卑怯者！　セクハラ！　卑劣漢！　そんなの…　そんなの男のする事じゃない！！」
「聞こえてきただけだって言っただろうが！　聞いて良かったよ！
まさか、まさかお前がまだそんなガキだったなんてな！」

強く――――強く、両方の腕を掴まれる。
けれどその痛みは、今はあたしには届かない。ただひたすらに卑怯な奴の顔を――――　見たくもない剛史を顔を見あげる。

「そんなモノ、どうせ、本気じゃないんだろ？　そんな、見てるだけで良いなんて生半可な感情、本物なんかじゃねぇよ！　いつまで、そんな夢みたいな事言ってんだ！　バカか！お前は！」

本気？　本物？　生半可…　ばか？
なんで…なんで、こんな…

「いいか。気持ちなんてもん、相手にわかってもらってこそのもんだ！　見込みがねぇってわかってて、いつまでもそのまんまで構わないなんて嘘だ！　見てるだけなんて、そんな綺麗ごとが言えるよ

うな気持ちが本物だと!?　まやかしだ!　そんなもん、本当の恋愛なんかじゃねぇ!」

声が、でなかった。

……いたい…

いたい、いたい…

からだが、きしむ…　こころが、きしむ…

ゆがむ…

なにもかも、ゆがんでいく…

あつい…

あたまが…からだが…むねが…

あたしのぜんぶが、しんじられないほどあつくなって…

「――――――　ゆり…？」

ぽた…

てのひらに、こぼれおちた雫で気付いた。

涙が。

涙が、あたしの眼から流れ落ちていく。

「…どうして…」

「…有里…」

「どうして、わかるの…？」

あたしの気持ちが嘘だって。

あたしの想いがまやかしだって。

「…どうして、決めつけるの…？」

どうして、あんたが…

「どうして、あんたが、あたしの気持ちが嘘だって決めつけるの！！！」

有り得ないほどの感情があたしの中で渦を巻く。

悲しいとか、辛いとか、苦しいとか、そんな言葉では言い表せない感情。ぐるぐる渦を巻いて、あたしの中で爆発するように熱くなる。

「わかってる…」

「有…」

「言われなくたってわかってるわよ、そんなこと！！」

こんな不毛なことない。こんな意味の無い気持ち、きっと恋なんて

言っちゃいけない。

あたしが好きな人は、あたしの存在さえ知らない。
あたしは好きな人に、声をかける事も、触る事も、何ひとつ出来はしない。
俳優？　現実に居ない架空の人間に疑似恋愛してるだけ？
じゃあ、この気持ちはなに！この、どうしようもない気持ちはなんなの！！

あったかくて、嬉しくて、哀しくて苦しくて切なくて。
心の奥底からどうしようもなく溢れ出してくるこの気持ちは幻だと？　あたしの体すら支配する感情を、無かった事にして忘れろとでも！

出来ない…
もうそんなこと、あたしに出来る訳がない！！

「好き…」

「好きなの…」

あたしは、ただ、あの人が好きなの。
それだけ…
ただ、それだけなのに…

「わかるもんか…」

「あんたなんかに、わかるもんか！！」

涙で歪む視界を、振り払う事もせず目の前の剛史を睨みあげる。何

時の間にかこんなにも高くなった視線。でも今は、そんなことも構ってなんかいられない。

わかる訳が無い。

この一年余りの時間、あたしがたった一人で育んできたもの。

何度も何度も、振り返って、バカみたいだって自分で自分を罵倒して、それでもどうしても捨てられなかった思い。

諦められなかった。失くせなかった。大事な、大事な感情。

「あたしは、アレクが好き！」

好き――――――　そうよ、好き、だけじゃない。

甘やかな感情の裏にあった、大きな不安と焦燥。抉りだされた認めたく無かった感情。

あんたに…

「あんたなんかに、言われるまでもない…」

ギリッ…と強く唇を噛む。そうしないと、もう、立ってなんかいられない。

わかってるんだ。

何もかも…　何もかも、わかってるんだ、あたしには――――――！

「はなしてよ…」

「有里…！」

「放せ…　放せ放せ放せ！！」

泣き叫ぶあたしは剛史の大きな身体を渾身の力で押しのける。引き剥がした力をそのままに家へ――――――自分の逃げ場所へ走る。

慣れた仕草が動揺を押さえつけて、迷うことなく鍵を開けられた事に感謝する。
ピシャ！
振り返る暇なんてないまま、引き戸を思いっきり音を立てて閉めた。
ガタっ！
戸に外から手が当たるのを感じて大急ぎで鍵を掛ける。

「帰れ！」
「有里！」
「帰れ帰れ帰れ！！」

何度も何度も剛史があたしの名を呼ぶ声がしたけれど、あたしは無視して階段を駆け上がる。
勢いよくドアを開けて、飛び込んだ部屋にも鍵を掛ける。夜の夜中だって事も、家族の迷惑も考えれない。逃げる…　ただ、逃げたい…
ドンドンと打ち付けるのは、自分の心臓の音なのか、剛史があたしを呼ぶ声なのか。荒れた息もそのままに、声が喉の奥から込み上げた。

悔しかった。
情けなかった。
悲しかった。
辛かった。
今まで抱えてきた全ての感情を爆発させるようにあたしは大声を上げる。涙が、後から後から流れ落ちてくる。

好き。
アレクが好き。

否定なんてしない。

無かった事になんか出来ない。
あたしの感情を、あたしが認めてあげなかったら、いったいあたしはどうなってしまうのか…！

「アレ…ク…　アレク、アレクアレク…」

呼んでも、決して応えてはくれない、この世界にすらいてくれない人の名前を呼ぶ。

閉じたドアの前にずるずるとしゃがみこんで。
あたしはただ、アレクの名前だけを呼びながら、泣き続けた。

その二十五

日差しが眩しい…

ああ、もう、緑に映える日差しがなんて眩しいんだろ…
眩し過ぎて――――――　二日酔いの頭に思いっきりこたえるじゃないの。

いや、違うな。
泣いて泣いて泣き疲れて。そのまま風呂も入らないで布団に潜り込んだりはしたけどさ。夢の中で二日酔い…　これはない。絶対にない。
第一、どんだけ呑んでも意識だけは失わないってのが両親揃ってウワバミの家系のあたしと兄貴の信条だから、二日酔いなんて――――
――　ああ…でも。眩しいものは眩しいね…　眼に、痛いぐらい。
きっと、これは状況の所為。決して酒のせいではない。うん。

まさかとは思ったけど、あたしは夢に来てしまってる。どんな状態でも、あたしの意志に関係なく来てしまうのが、この夢のままならない所ではあるけどね。今夜ぐらいは来たくなかったなぁ～　あの精神状態で、しっかり寝てしまえるのがいかにもあたしらしいけどさ。泣き疲れて気が付いたら朝――――――　とかってシチュエーションの方が王道でしょ？　いったい何処まで王道を外す気なんだか…　言っても思っても仕方が無いけどさ。

あたしの意識はふ～らふ～らと思いっきり揺れているのに、あたしの体――――――　もとい、こちらでのあたしの体や器官、感性や感覚、その全てをつかさどるユーリーは思いのほかご機嫌で、今はせっせせっせと剣の手入れの真っ最中。

ふ〜ん…そー…　いよいよ、本物の剣での練習を許可されたっと…
それはそれは良かったね〜　…なになに？　『お前は案外筋が良い』
って隊長に褒められた？――――――　あたしの知らないとこで、ア
レクに会ったんかい！――――――　それはそれは、ようございま
した！　おめでとうございますです。はい！

――――――　ええ、やさぐれてます。もう、きっぱりくっきりやさ
ぐれてますですよ、心から！
あたしがやさぐれて、何が悪い！　今キレなくて、いったい何時キ
レろって？

『どうせ、本気じゃないんだろ？』
『そんな、見てるだけなんて生半可な感情、本物じゃねぇよ』
『ガキか！　いつまで、そんな夢みたいな事言ってんだ！』

夢だ。
夢だよ。
どうせ、どうしたって何も出来ない、絶対に叶わない夢だよ。
――――――　だからって、何であんたなんかにあんな風に言われな
きゃなんない？　あんな風に追い詰められなきゃなんないの！

……わかってる。わかってるわよ、本当は。
腹を立てたのは、それが正論だから。
正論――――――　違うな、それが、事実だから。

叶わない恋は恋だけど、何も出来ない恋は、やっぱり誰が見ても本
当の恋じゃないのかも。

其処に有るのは、あたしの『好き』と言う感情だけ。それ以外は、何一つないんだもの。

ユーリーは、一心不乱に手にした剣を磨いている。だからあたしも、その動きを感覚だけで追いながら、あたし自身の気持ちの中に潜り込む。

あたしは、アレクが好き。それは、絶対の真実だ。

でも、それを知っているのは――――――　わかっているのはあたしだけ。アレクの居るこの世界には、『あたし』と言う存在は何処を探しても存在せず、あたしが暮らし存在する現実に――――――あたしにとっての現実の世界には、きっと何処にもアレクはいない。

何処にもいない人を思う事は、その感情すらも現実のものではないのだろうか。あたしはただのまやかしで、その感情すらもまがい物でしかないのだろうか。

だとしたら――――――　そもそも、あたしは、いったい、何なのか。なぜ、あたしは此処にいるのだろう。

こうしてユーリーの中に居て、その感情も思いも、その感覚すらもこうして共有してるのに、彼は絶対にあたし自身では有り得ない。ユーリーが触れるもの、見るもの、食べるもの、聞くもの、その全てをあたしは自分の感覚として感じ取れるのに、でも、最後の最後で、あたしは決してユーリーと同じ人間ではない。

あたしは動かない。決して動けない。あたしの意思は、こちらの世界には絶対に反映されない。

ならば、あたしは。あたしはいったいなんなのか。この世界にあたしが要る意味はなんなのか。

確かなものは何一つない。目覚めれば消える。残るのはあたしの中

の記憶だけ。
なのにどうしてあたしはここに居る。この場所に来てしまう。動けず、何も残せず、こちらには記憶すらも残らない。

――――――　あたしはなに？
　　なぜここにいるの？

初めて、あたしは自分がこの夢の中に迷い込んだ事を後悔した――
――――――

自分にはまだ荷が重いであろう大剣を、ユーリーはせっせと磨いて行く。
せっせ、せっせ…
額に滲む汗を時間が惜しいとばかりに服の袖で拭いながら。
せっせ、せっせ…
それでも、彼の剣を磨く手は止まらない。

余りにも無心なその行為に、少しだけ切なくなる。あたしの記憶はあたしだけのものだけど、ユーリーの記憶は、全てあたしの中にあるから。彼の言葉も行動もその意味も、しっかりわかってしまうから。

……いい子だね。うん。ユーリーは本当にいい子なんだ。とにかく素直で、純粋で純朴で。まだまだ、子供だしずいぶんドジな所が有るから、指導の上官とかに思いっきり叱られたりもしてるけど。
今時の日本じゃ考えられないくらいにまっとうな、これこそ理想の『男の子』って感じ。こんな子供がいたら、良いだろうなと思う様

な。

こうして一緒に過ごしていると、このユーリーと言う男の子が、もう可愛くて可愛くてたまんなくなってくる時が有る。今もそう。心は自分の事で手一杯の筈なのに、どうしてもユーリーの事を考えてしまってる。つらくない？くるしくない？さびしくない？大丈夫？

――――――　なにが、出来る訳でもない筈なのに。

この子にこうして会えただけでも、あたしがこの世界へ来た意味が有るのかも。

あたしは、こうやってユーリーの中に居てこの子の目線でしかこの世界が見えないけれど、こうして取り付いてこの世界を見るのなら、やっぱり、ユーリーの目線で見れて良かったと、何となくそう思う。きっとユーリーは、自分の中に、こんなへんてこなおねーさんが居るなんて、これっぽっちも思ってなんかいないだろうけれど、君に会えて、君と一緒に世界を見れて、やっぱり、あたしはうれしいんだ。本当に。

眠っている間だけ来てしまうこの世界。きっと誰ひとり信じてなんかくれないだろうけど。

あたしは、こうして、君と居る事が嬉しい。君の目で、この世界を見ている事が、やっぱり凄く楽しい。たとえこうして、泣く様な事が起こったとしても。

「――――精が出るな」

と、背後から掛った声にユーリーが顔を輝かせて振り向く。

「団長！！」

声で、あたしにも解ったけど。
わ…わわ…　今日はいきなり？　だめだよ～　まだまだ今日は心の準備が…――――――　って、聞いてないよね、二人とも。

「剣を磨いていたのか…　お前にはまだ大き過ぎるようだが…」

見あげたアレクの顔は、眩しいほどの日の光りの中で、まるで太陽の様に輝いていて。

「見せてもらっていいか？」
「あ、はい！」

両手を添えて捧げる様に、ユーリーは磨いていた剣をアレクに差し出す。アレクはそれを受け取って、構えて、ヒュン…と一度振ってみる。

「銘や刻印は無いが、技ものだな…　重さの割に手になじむ。良い剣だ」

指摘されて、ユーリーの頬に軽く赤い色が上る。きらきらとおそらく輝きだしたであろう瞳は真っ直ぐにアレクを見ている。

「これは？」
「父の剣…形見の品です。故郷（くに）を出る時、母がこれだけは持っていくようにと」
「父上の…　お前、確か姓はコールターと言ったな？　コールター…もしかして、先の大戦で、勇将と惜しまれたあのコールター卿か？」

さっすが団長、お見通しって奴よね。

「父をご存知ですか？！」

「ああ…　私が子供の時から、良く聞かされた。イアニスの戦いで殿(しんがり)を務めあげられ、絶体絶命の前国王を無事に敵陣から救い参らせたと…」

――――――　そう。その通りだ。先の大戦――――――　北の隣国イアニスとの五年にわたる戦いは、先の国王の治世を傾かせるほどの激戦で。ユーリーの父は騎士として、その大戦に従軍し、命を落としている。

ユーリーの両親は遅い結婚だったから、その時ユーリーはまだ母の胎内に居て、この世に生まれてすらいなかった。顔を見合わせた事すら無い父の――――――　肖像画でしか見た事のない彼の父親の、唯一つの形見の剣を、ユーリーが騎士見習いとして王都に出てくる時、彼の母は彼に託した。まだ、まともに振るう事も出来なかった息子に。その記憶は、ユーリーの中で、一番大事な所にしっかりと収まっている。

ユーリーが出来た事を殊のほか喜んだという父。まだ見ぬわが子の平穏を願って、戦場で果てた父。

「…そうか…」

そうか。

そう言って、ユーリーを見やるアレクの顔は、何だかとても辛そうで、見ているこちらが痛くなる。

そっと、差し返された剣をユーリーが受け取ると、そのままアレクの手が少年の頭に伸びる。

「強くなれ」

くしゃ…と、髪と一緒に頭をかき交ぜる様に撫でられて。

「強くなれ。…そして、死ぬな」

不器用な仕草と共に贈られた言葉は、少年には余りに大き過ぎて。

「はい！」

はい…！と、潤みそうになる目を、ユーリーが一生懸命にガマンしているのが解る。

こういう時は結構辛い…

あたしの感情は、この子には伝わんないみたいだけれど、この子の感情――――――　少なくとも、喜怒哀楽、好き嫌いはあたしにダイレクトに伝わってきてしまうのだ。

……やだな…　あたしまで、泣けてくるじゃない。良かったね…

良かったね、ユーリー。お父さんの事、覚えた人がいたよ。ちゃんと、覚えていてくれた人がいた。

アレク――――――　もう、なんなのよ、あなたって！

やっぱり、どうしようもないくらいに良い男なんだもの。

嫌いになんかなれない。どうしたって好きになる。

こういう気配りが有ってこそ、本当の大人の男って感じよね――――

―　どっかの誰かさんとは大違い。

どうしてくれんのよ。ますますます惚れちゃうじゃないの。

――――――　あ～あ…　仕方無い。

もう本当にしょうがない。

あたし、やっぱりアレクが好き。どんなになっても、この人が好き。

この気持ちは、絶対に嘘じゃない。まやかしでも、幻でもありゃしない。

うるうると、零れ落ちそうな涙をこらえるユーリーの頭を、くしゃと撫でつけてくれる大きな手。

あっ…そう言えば初めてだ。アレクが、ユーリーの頭を撫でたのは、これが初めてだ。

あたしと同時に気が付いて、驚いているユーリーの気持ちは、その嬉しさと共にあたしの意識とぴったりと重なって。くすぐったくて、くすぐったくて、もの凄く温かいものが心の奥の方から染みだす様に湧き上がる。

この感覚は、ユーリーのものでありながら、間違いなくあたし自身が感じるもの。この確かな触れ合いを、あたしには無かった事になんか出来はしない。思う気持ちを捨てたくない。初めて――――初めて感じた大切な感情を、あたしはやっぱり大事にしたい。

くしゃくしゃと、アレクが続けさまにユーリーの頭を撫でる。少し髪が引っ張られて痛いのは、きっとアレクがこんな仕草に慣れていないから。その事実すら、くすぐったいほど嬉しくて。

ああ、いいな…

なんだかすごく、きもちがいい。

ふわふわとした夢見心地の気持ち良さに、何時の間にかあたしの意識が解けて行くように薄れて行く。

意識が…　ああ、意識が吸い込まれる…

これは目覚め。夢の終わりの合図。
残念…今日は此処までか…

またね…
またね、ユーリー。そして、アレク…

目覚ましの音が鳴り響く。
タイムアップ。

――――――　またね、あたしの大好きな人。

その二十五（後書き）

なんとか無事にここまで更新できました。
読んでくださって本当にありがとうございます。
この後、また少し、更新まで時間をいただく形になると思います。
この間、ＰＶ２０万を超えさせていただきました。ありがとうございます。できるだけ早いうちに次へいけるようにしたいと思ってます。

その二十六（前書き）

大変お待たせいたしました。

その二十六

病院に休みは無い――――――　いや、正確には言うならば、普通診療はちゃんと日曜日はおやすみなんですが。

地域密着を掲げる二次指定救急病院には一年三百六十五日、一日たりとも本当の休みなんぞありはしない。一番大変なのはやはりローテーションを組んで患者に対応する医師や看護師だけれども、入院患者がいる以上、一日三食、食事は必ず配膳されるべきものなので（いや、あたりまえなんだけど）それの対応も兼ねて、あたしたち栄養士もローテーションを組んでいたりなんかする。

今日は連休の日曜日。本来なら天下晴れてのハッピーサンデー休日中日の筈なのだが、あたしはしっかり当番で、ついでにとばかりにためていた事務処理を思う存分やっつけてしまったりしたもんだから、その日、家に着いたのは、もう午後の八時もしっかり回った時間だった。

「たっだいま～」

玄関先で放り投げる様に靴を脱ぐ…ととと、やばい。しっかり治しておかないと。

こういうトコうるさいんだよね、うちの母上は。結構がさつで大雑把の癖して、変な所でマナーにうるさいから、『靴はきちんと揃えて上がる』『畳の縁は踏まない』『挨拶は大声で』と、時には遠慮なく張り手付きで叩きこまれてきたもんです。お陰で、およそのお宅に伺った時やこうして社会に出てから、変な恥をかかないで済んでるからそれはそれで感謝はしてるんだけどね。

今日も剛史に会わなかった。

あれから一カ月。あたしたちはろくに顔すら合わせてない。

あたしがなるだけ事務室に籠っていた所為もあるけれど。あいつも事務所に来なかった――――　まあ今日は、当直じゃ無かったのかもしれないけれど。どうあがいても、所詮小さな病院の中、気配というかそんなものは確かに感じることはあるけれど、ほんの少し――――　ほんの少しだけあたしが上手く立ち回れば、顔なんてこうして会わせないままで過ごしていける。

こうして考えてみると、あたしと奴の接点なんて、実はそんなに有りはしないんだ。どちらかが避けようと思えば、こんなにも簡単に顔すら合わせないで生活していけたりなんかする。……でも、こんなに長く奴の顔見ないのって、あいつがこの病院に勤めだしてから始めてかもしれない。

まだ会えない。会いたくない。だから、きっとちょうどいい――――　そんな風に思ってしまうあたしは、結構意固地な人間なんだろうか。『好きなものは好き』。開き直ってみたけれど。あの日突き付けられた現実を、もう一度目の前で確認するのはまだ痛すぎる。

「ああ、おかえり。遅かったね。ごはんどうする？」
「もちろんいただきます……って、兄貴は？」

手と顔を洗い、しっかり置いてあるテーブルを後目に一年中家族の食卓と化している居間を覗けば、パリパリとせんべいをつまみながらわが母上様が声をかけてくる。蒲団を剥いだ置きっぱなしの家具調炬燵の上にはもうあたしの分の箸しか置いてないから、他の人間の食事はもう済んでしまったみたいだ。この時間に珍しいと思いながら聞いてみる。

「ユウは今日は部活だろ？　遅くなるからついでに食べてくるって。お父さんも今日はゴルフ行くっていってたじゃないか。そのまま呑むって話だから悪いけど先にあたしは済ましちまったよ」
「それはいいけど…　――――　誰か客だった？」

ぽてんと定位置の座布団に腰をおろして、聞くともなく聞いてみようと思ったのには理由がある。何時もなら、新聞や読み掛けの本やら家族全員があれやこれやと持ち込む物品が、それこそ山のように平済みしたままの炬燵周りが今日はやけに片してある。おまけに居間から覗けるテーブルも、いつもならすっかり物置と化しているのに物が無い。

「もうちっと早かったら、お前にも相手させてやったんだけどね～」

服装すらも、いつもより少しばかり整えたおふくろ様が一人分の夕食を準備しながら話しかけてくる。少しばかり疲れてるのを言い訳にちゃっかりそれに甘え、いただきますと手を合わせ茶碗を持った状態になってから問い返す。

「え？だれに？」
「ふっふっふっ…　誰だと思う？」

ちろん…とこちらを流し目で見て、含み笑い。…お母上様…　そのお顔、思いっきり怖いんですが…

どさっ！
食べかけた食事の先に、何冊かの冊子がまとめて降ってきた。

――――――　げげ…っ！

この色、この紙、この厚さ。

「お前にだよ。見合い写真」

「げーっ！！　やっぱり光子おばさんか！？」

「当たり。あんたの大好きなみっちゃんだよん」

――――――　にまにま笑うな。この魔王！

「半年前ので諦めたんじゃなかったの？！」

「甘い。そんなんで引くみっちゃんとお思いかい？　リベンジだってさ」

「げ～～～！」

これは食事どころの騒ぎじゃない！　ご飯、喉に詰まったらどうしてくれる！

みっちゃん――――――こと、光子おばさんは、正確にはあたしのおばさんという訳ではない。あたしの死んだじい様の妹の娘だから、この、目の前でにまにま笑ってる母親の、実は従姉に当たられる。破天荒なうちの母親と、本当に血が繋がっているのかと疑いたくなるくらい、面倒見の良い、親切な、実に出来たお方ではあるのだが。

――――――　うわっ…　タイミング、最悪…

思わず頭を抱えてしまう。いかんせん、光子おばさんのこの頃の趣味があまりにもありえなさ過ぎるから。

光子おばさんは、もうすぐ六十になろうかというのに、老いを感じさせない非常に若々しい人なのだが、自分の子供たちが結婚し、旦那さんに当たる人が定年退職して悠々自適になった途端、その余っ

た時間を、彼女の大好きな方面の社会奉仕に活用する様になってしまった――――――　つまり、私的な仲人に勤しみだしてしまった訳だ、これが。

変に人が良く、おまけにこれ以上ないほど親身になって間を取り持ったりなんかしちゃうから、ほとんどボランティアでの活動な事も相まって、結構な成婚率を誇っている――――――　らしい。　いや、マジに。

この少子化の時代、結婚出来ない独身が多い中で実に結構な余暇の使い方ではあると思うのだが、その矛先が自分に向くとなったら話は別。

「リベンジって、母さん…　あんた、話、受けたんかい」

「うんにゃ。写真預かっただけ。そうしないと帰りそうにもなかったからね～」

もぐもぐもぐ…

会話が途切れる合間に、物を咀嚼する音がする。どうしたって空腹に勝てなかったあたしは、食べかけの食事を再開する。

だって、お腹すいてるし。第一、すきっぱらで聞いたりなんかしたら変な方向に走りそう。

「だからって…　あたし、まだ二十五だよ？　お見合いすんには早すぎね？」

「みっちゃんの基準で言うと、女の子の適齢期は二十四までなんだって。遅すぎることはあっても早すぎることはないんだと」

「まだ、働きだして三年目」

「共働きでもかまわない相手、見つくろったって」

「実は面食い…」

「男は中身」

「――――　かーさん！」

あんたはあたしの敵なのか？　そーなのか？

「結婚させるんなら、あたしより急がにゃならんのが一人いるだろうが！」

「祐樹かい？」

「そう！　その通り！」

兄貴の方が絶対先じゃん！

この際、大事な兄貴だろうがなんだろうが、人身御供に供しちゃる。

「心配しなさんな」

どさっ！

「――――　何これ…」

「さっきのはお前の分。んで、こっちは祐樹の分だとさ。見るかい？　結構可愛いのも混じってるよ」

「え～！？ほんと！？見たい、みたい！…じゃなくて！」

あたしのと同じくらい――――　いや、それ以上の高さに積み上げられた写真の束に一瞬戦く。

――――　何て手回しのいい…

やるなおばさん…　いや！　ほめてる場合じゃないってば！

これってやっぱり年の功？　……いや、人間的な度量の差かしら…

「みっちゃんに取っちゃあんたは可愛い娘みたいなもんだからさ～

『絶対、あたしが良いお婿さんを！』って意気込んでたからね～
昔から」
「……可愛がってくれたのは感謝してるし、あたしもおばさん大好
きだけどさ…」

そう。光子おばさんの所は息子ばっかし三人で。ずっと娘が欲しい
って言い続けてきたおばさんは、殊のほかあたしを可愛がってはく
ださった――――　それについては、本当に、もの凄く感謝はし
てるんだけど。

「こればっかしはね～…」

う～～ん…　だってねぇ…？
今、あんまり、乗り気じゃないっていうか…　今じゃなくても乗る
気は無いっていうか…

「まあ、この前の時は思いっきり逃げ切ったから、あっちも意地に
なってる部分が有るんだろうけどね」

パリン。
手にしたせんべいを齧りながら、おふくろ様が言ってくれる。
ぐっ…　そこ突かれると弱いんだけど。あの時の事は、確かにやり
すぎたかな～とも思わなくもないんだよね、実は。

その二十六（後書き）

長くなったので、二つに分けました。
明日、続きを更新いたします。

その二十七（前書き）

昨日の続きです。

その二十七

半年前、やっぱり同じように我が家にお見合いを持ち込んだ光子おばさんに、正面切って立ち向かえなかったあたしは、姑息にも絡め手を使って逃げられるもんなら逃げてしまおうと思ったのだね。とりあえず写真だけは見て。その上で、お相手と目された男性を好みそうな独身の知り合い（女性）に、それとな〜く声をかけて、話を進め…――――た時は、こうなるとまでは思ってなかったんだけど。

「あれで、みっちゃんのプライドが揺らいじゃったからねぇ…」
「だから、あそこまで行っちゃうって思ってなかったんだって！」

いや〜、まさかまさかで、どんぴしゃりだったんだな、これが。あれよあれよという間に、その二人の間で見合いが成立し、思った通りというかなんと言うかその場で意気投合をしてくれちゃったりして。挙句の果てに光子おばさんの成婚率をアップさせることにまでなってしまったんだね、これが。

「結果オーライでいいじゃない」
「あの件に関しては、自分の成果にはカウントしないとさ」
「そこまで、こだわんなくっても…」

――――光子おばさん、こっち方面には、ある意味、命賭けてるからな〜…

もしかして、あたしにもおばさんのお見合い成立の極意なんてもんが遺伝してんじゃなかろうか。
うわ…　そんなもんが遺伝しても嬉しくないぞ。

そんなことをつらつらと思いだしているあたしを後目に、我が家のおふくろ様はせんべいを食べ終えたらしく、ずず…と渋茶を飲み干して口を開く。

「あんた、今…というか今までずっと、誰とも付き合った事ないんだろ？　――まあ、あんたと付き合うなんて奇特な奴、いるかどうかも分かんないけど、とりあえず今いないんなら、話のタネに一遍見合いなんてのをやってみるのも良いんでないかい？」

「奇特ってなんだよ。奇特って！」

あんたの娘は珍獣か！　今とか、ずっととか、なんであんたが知ってんの！

「あんただって、結婚願望がない訳じゃないだろうが」

「……そりゃあまあ、そうだけど…」

一応、これでも女ですから。結婚とか恋愛とかに夢が無いでもないけれど。

――――――　実は、今になって思いっきり初恋中とか、言えないよねぇ、やっぱり。

昔から男友達は多かったが、色っぽい話になったことはついぞない。あたしも、これっと思えるような人もいなかったし、それはそれで不自由もなかったし。

「無理に、とは言わないけど、やっぱり人並みな事はやってみても良いと思うね、あたしゃ。あんたの旦那はともかくとして、あんたたちの子供には、あたしもお父さんもそれなりに夢ってもんはあるんだから」

……そんな風に言われると、返す言葉なんてございません。

孫に『じいじ』と呼んでもらう事。言ってて恥ずかしいこれが、あんまり自己主張ってもんをしなさすぎるあたしらの親父様のささやかな夢だってことは十分過ぎるほど承知しております。

もちろん、あたしだって、折角女に生れた以上、子供の一人や二人、生んでみたいし育ててみたい。この際旦那は――――――　いらないとかって言ったら、殴られるな、きっと。でも、さっき、おんなじような事、言ってたよな、かーさんも。

「ユウの方はさ。何のかんの言っても男だし、ある程度の年齢になっても子供は持てるだろうけどさ。だけど、あんたはやっぱり女だし。この頃じゃ、ある程度、年齢いってても子供はちゃんと産めるだろうが、育てるには体力あった方がやっぱり楽っちゃ楽だからねぇ。お互いに」

「お互いに？」

「そう。いくら年より若く見えても婆（ばば）だから」

「婆って誰よ」

「そりゃ、あたしの事」

けろんといったよ、この人は。確かに、あんたはもう五十とっくに過ぎてるってのに、下手したら三十半ばに見えようかってぐらいの童顔だけど！

「自分で若いとかって言うな！　――――　てか、婆って何、婆って」

「正確には、『ばあば』って呼んでほしいかねぇ。あんたが勤め続けるにせよどうにせよ、どうせあたしが面倒みる事になるんだから。少しでも、あたしの体力があるうちにしてくれると助かるんだよね

ぇ。子供の相手ってのは、思ってる以上に体力勝負だから」

しみじみとそんな風に言われると妙に納得してしまう。

なんか、先の事まで一応考えてんのね、この人も――――――　ってか、違うだろ！　話、思いっきりずれてっぞ！

「ま、みっちゃんの件はまだ考えるだけでいいからさ。一回、会ってみるのも良いかもよ。経験に」

大口あけて反論しようとしたあたしを見透かしたようにおふくろ様は言ってくれる。確かに、いい経験にはなるだろうけどさ。

「――――――　そんないい加減なの、相手の人にだって失礼じゃん」

全然まったく、結婚なんて、今はする気もないのにさ。

「それぐらい軽い気持ちで良いって事。深く考えるような事でも無いってことさね。こーゆー事は、あくまでもお互いの縁ってもんだからね。みっちゃんも、そんな事ぐらいわかって言ってるんだからさ」

そうまで言われると、あたしはうなずき返すしかない。

「さ～て、そろそろユウも帰ってくるかねぇ。――――――　有里、見合いの件、あたしがユウに言うからね。あんた、黙ってんだよ」

――――――　ま～た、この人は。

なにウキウキしてんだか。あたしだけでなくこの後、兄貴でも遊ぶ気だな、こりゃ。

「ハイハイ」

呆れたようにひらひらと手のひらを振ってやる。

るんたった！と鼻歌でも聞こえそうなおふくろさんの後姿を見送って、あたしが最後のお茶に手を伸ばした時それはいきなり降ってきた。

「――――　そういや、この頃、剛史君見かけないねぇ。元気でやってるかい？」

一瞬息が止まりかけて、手にした湯呑をひっくり返しそうになる。

「……さあ、この頃、見かけないし…」

嘘は言ってないぞ。このひと月、本当にその影さえもあたしはこの目で見ていない。

「あんた、おんなじ職場だろ？　見かけないってことがあろうかい」

「同じだって言っても、担当するトコ違いすぎるもん。――――――何の噂も聞いてないから元気なんじゃない？」

良いにつけ悪いにつけ、剛史は病院では注目されてた人間だ。何かあったら、院内僻地のあたしたちにも話はきっと届くだろう。

「昔馴染みだってのにつれないねぇ…　ユウも会いたいと思ってるだろうし。見かけるような事でもあったら、また遊びにおいでって言っときな」

――――――　そんなこと言えるもんか！

いっその事、洗いざらい此処でぶちまけてしまえば、厄介事が全部ぜ〜んぶ解決するんではなかろうか。

思わずそんな誘惑に囚われてしまったあたしを、いったい誰が責められる。

最後の最後に思いっきりの爆弾をぶちまけて、さっさとおふくろ様は居間を後にする。

残されたあたしは――――――

一つ大きな溜息を吐いて、それからゆっくりと食べおえた食器を片づけ出した。

その二十七（後書き）

ようやく、きりの良いところまで更新できました。本当に長い間お待たせいたしました。

この間に、お気に入り登録が４００を超えさせていただきました。ユニークアクセスも、５００００を超えて…　う、嬉しいです！本当にありがとうございます。

…でも、この後も、きっと更新、遅れます。最初に謝っておきます。すみません。

なかなか思うように更新できませんが、どうかゆるゆるとお付き合いくださいますようお願い申しあげます。

その二十八

月曜日。

休み明けの病院は、殊のほか慌ただしい。休みの間に出た入退院の申し送りとか、救急の患者の手配とか、その他もろもろの事務処理が一気に回ってくるからだ。

あたしは休日出勤してたから休み明けでは無いんだけど、それでも午前中はあたふたと走り回る事がいつも以上に多すぎた。よって、そうなると、必然的に昼休みが午後にずれ込む事になる。

「――――　あら、山本先生。今、お昼ですか？」

深山さんと連れ立って食堂の扉を開けた時、其処に居たのは見慣れた背中。一瞬振り返って微かに見開かれた目に回れ右をしそうになった体を寸でのところで引き留める。危ない危ない…　人の目他人の目。深山さんが居るでしょうが。そう感情に突っ走って行動する訳にはいかないぞ。絶対後が怖すぎる。

「今日は、整形が異常に混みまして…　看護師には別々にお昼行ってもらったんですが、僕が抜ける訳にはいかないですからね。しかたなく、今です」

もう腹ペコで…

――――――　うわ～～～…爽やか過ぎる笑顔が怖い…

ちらっ…とあたしを見た視線がふいっと逸らされる。

そーかそーか、気まずいか。そっちが気まずい様にあたしだって気

まずいわ！　なんだってこんなところで会うんだか。

病棟の看護師さんは、基本、時間通りのローテーションなんだけど、その日の患者数で仕事時間がずれ込む部署は、外来、事務、薬局など、病院である以上結構多い。その所為か、お昼休みの時間決めは各々各部署の裁量に任されて、食事の時間がまちまちになる事が病院では往々にして起こりうる。

そして今日。ずれこんだ昼休みを消化すべく、午後の一時半も過ぎてから職員食堂に顔をそろえてしまったのは、あたしと深山さん、そして剛史の三人だけだった。

置いてある食器を確認してみると――――　あたしたちが最後か…

　まったくなんて間の悪い。

ほぼひと月ぶりに見た剛史は、いつも通り変ににこやかな笑顔を浮かべているが、ほんの少しだけ影が薄くなったような気配がする。

……少し、痩せた…？　――――　いや、あたしの所為じゃない。

絶対全く所為じゃない。たとえ、ホントに奴が痩せたんだとしても！

しかし、そーとー疲れてはいますね、お兄さん。さっき、一人称、僕になってたし。そこへ持ってきて、あたしと顔突き合わせてご飯だなんて、そっちも思いっきりごめんこうむりたいだろうけどさ。

でもね、あたしもおなか減ってるの。あんたのご機嫌に付きあって、今さら場所変えたりするような余裕は残念ながらございません。午後からだって、仕事満載。ぐたぐた言ってる暇は無いのよ、あたしもね。さっさと食べて、少しでも休憩を取らせてもらわないと、体持たない、マジやばい。

……まあ、深山さんもいるしね。二人っきりじゃないってことでお

互い手打ちにしましょうよ。
とりあえず、今だけは。

置いてあった、もう冷めてしまった一人前のトレーをとって、剛史から一番遠い椅子にさりげなく座る。
ちらっと奴がこっちを見たけど…　これぐらいは、良いじゃんか。
まわれ右、しなかっただけでも褒めてくれ。

「外来も大変ですね～　今日は山本先生おひとり？」
「ええ。副院長は、出張で北海道行ってますから。この一週間は、僕だけで…　当直は助っ人に入ってもらいますけど」
「あらあらあら…」

流れの関係で、あたしと剛史の間に座っちゃってる深山さんと奴の間で、世間話のような情報交換が始まる。あたしはと言うと、思いっきりおなかが減ってますって感じで食事に集中――――　する振りで、しっかり会話だけは拾いまくってます。大体、この狭い空間の中にいて、聞こえない訳なんてないし。

自分がしゃべんなくても大丈夫そうでほっと一息。此処に二人きりで気まずく無言で食事って…
うわ～～っ、考えたくない。絶対ヤダ！　ほんと、深山さんが一緒でよかったな～――――　などと、その時あたしは暢気にも、そんな事を考えてたから油断した。

「――――――　そう言えば、神部ちゃん。今度お見合いするんだって？」

ぶぶっ！！！

やばい！思わずみそ汁吹き掛けた！
な、なに！？　なんなの！その爆弾！！

「し、しません！　――――っていうか、深山さん！　それどこで！？」
「うふん。もちろん、晶（あき）さんから」

――――――　うわ～～～～っ！！　そこからかい！！

極上の笑顔を張り付けた言ってのけた深山さんに、思わず頭を抱え込んだあたしには、絶対絶対罪は無い！

深山さんの言う『晶さん』と言うのは、実は神部晶子（かんべあきこ）さん――――――はい。間違いなくあたくしの母親の名前でありまして。

「い、いつ！？――――　っていうか、なんで！？」

ありえねぇ！　昨日の今日だぞ！！

「今朝ね～　晶さんからお電話いただいたの。『うちの売れ残りのバカ娘に良い縁談が回ってきてね～』って」

こーゆー事情ですんで、土日勤務、配慮よろしくですって。
にっこり――――――ああ、なんて微笑みなんですか…

「み、み、深山さ～ん～～～……」

あなたのお言葉のその語尾に、ハートマーク付いてるような気がするのはほんとにあたしの気のせいでしょうか…――――――　って言うか、おふくろ様！　いったい全体あんたって人は…！

どうしてくれるんだ、この始末！　なんだってこのお方を巻き込んで！

ごふっ！げふっ！！

――――と、自分のでない咳き込む音に目をやれば、

「た、剛史！？」

「あら、山本先生。大丈夫ですか～？」

げふっ！ごふっ！と思いっきり胸を押さえて苦しんでる剛史の姿。

ころがったお椀の中身が少しだけトレイに零れて。

み、みそ汁か？　味噌汁だな！　なんだってあたしと同じように…

しかもこのバカ、気管に入れやがったな！

何時まで経っても収まらない咳に焦ったあたしは、手近にあった湯呑に冷水器から水をぶち込んで剛史の所にすっ飛んで行く。

「剛史！　とりあえず、水…水のんで…　いや、無理に飲まなくてもいいか…　と、とにかく、だ、大丈夫？」

ごふっ！げふっ！と、剛史の咳が続く間、丸まったその背中を撫でながら、のほほ～んとしている深山さんを振り返る。

「深山さん！　狙ったでしょう！？」

「あらら…ひどい。何を狙うって？」

「ちょうど、あたしらが味噌汁飲むとき、狙って言ったんでしょうが！　どうすんです、この始末！」

「そんな～～…　山本先生をわざわざむせさせるなんて器用な事、出来る訳ないでしょ？　あたしに」

にっこり。

――――――　い～や。出来る…　あんたなら出来る！

まったくまったく、他人事だと思って…

「遊んでるでしょう！　二人して！！」

「二人ってだ～れ？」

「ああたと、うちの、おふくろさんの事です！」

「あら、失礼な…　わたしはただ、娘想いの先輩の親心に感動してしまっただけなのに…」

そこで、涙を拭うフリをしないで～～～！

少し落ち着いてきたものの、まだまだげふげふやっている剛史の背をぽんぽんぽんぽん叩いてやりながら、にこにこしている深山さんをじと目で見返す。

あたしの顔、今、絶対、ものすごく情けない事になってるぞ。うん、間違いなく。

その二十八（後書き）

どうにか更新です。でも、すみません。こんなところで切りました。
またまた長くなったので二分割。続きは明日に更新予定。よろしく
お願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1275s/

一生分の片思い

2011年10月11日08時58分発行